
家庭教師ヒットマンREBORN! 無の守護者、来る!

骸っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 無の守護者、来る！

【Nコード】

N5354W

【作者名】

骸つち

【あらすじ】

六道骸の双子の妹、六道浅葱あさぎは骸とともにエストラネオファミリーの研究所を壊したあと、骸たちと中小マフィアを潰してまわっていた。そんなある日骸と浅葱は今までで一番の兄妹喧嘩をする。それが原因で浅葱と骸、犬、千種は別行動をとることになる。そして浅葱は道に迷いながらもある中小マフィアを潰していた。そこに黒服金髪と同じく黒服の赤ん坊があらわれて・・・。

オリキャラ設定1〜原作以前編〜（前書き）

前書き 警告！

- ・ 原作破壊します。
 - ・ 駄文です。
 - ・ 下手な挿絵がオリキャラ設定で二個だけです。
- そんなのもいい、という心が広い方は見ていただけると嬉しいです。

オリキャラ設定1〜原作以前編

：名前：
ろくどつあさき
六道浅葱

：身長：

6才 75センチ

7才 80センチ

8才 90センチ

：体重：

6才 4キロ

7才 5キロ

8才 8キロ

：見た目：

骸と同じ髪型。ただし後ろ髪の長さは肩下10センチぐらい。
顔は骸と瓜二つで世間でいうめっちゃかわいい女の子。
ただしめっちゃやせてる。

：能力：

六道輪廻の力。ただし地獄道以外は多少しか使えない。
エストラーネオにいれられた形状記憶カメレオンのDNAの改造体の力。それで漆黒の翼をもち、藍色の毛並みをもつ九尾の狐の姿になれる。大きさは大人一人乗れるぐらい。詳しくは本編と原作以降のオリキャラ設定で。打つのが面倒とかじゃないよっ！

浅葱の幻覚能力は有幻覚で火柱とかばんばん使えば10秒程度継続できるぐらい。武器だけ有幻覚でつくるなら10分ぐらいはできる。有幻覚じゃない普通の幻覚ならいくらでもできる。

精神世界にいける。

骸と離れていても感情を感じ取ることができ、会話もできる。（精神世界じゃない現実で）。

・戦闘能力：

ベル（幼少）と同じぐらい。

けど骸（幼少）とは幻覚と身体能力で勝っているため単純な戦闘能力では上だがいつも作戦勝ちされる。

10メートルぐらいなら余裕で跳躍できる。

・武器：

・骸の三叉槍の先つちよに三叉の槍のかわりに三叉の長い爪のようなものがついてる大鎌。有幻覚でつくるのもちあるく必要がない。
・短剣二本。詳しい設定は本編とオリキャラ設定原作以降編で願います。

この下に挿絵があります。

嫌なかたはとばしてくださいです。

> i30599 — 3925 <

は浅葱が妖狐になったときの姿です。

口元も白いもやっぽいのは霧です。

画像悪いのはかんべんしてください。

もとはめっちゃよかつたんですけど投稿するときはこの大きさの容量じゃ投稿が無理だつて書いてあつて……。
すみません。

ちよつとはなれてみたら少しはましになります。

> i30608 — 3925 <

は浅葱が使う短剣二本です。

柄のぎざぎざっぽいのはそこに指をかけて、もちやすいよ ってやつです。

なので柄は拳大の大きさです。

中心側のやつがそれぞれの鞘です。

左と右の短剣で対になっています。

それで左下と右下のは、それぞれの柄の先っちよの平面（柄尻っというんだっけ？）のところですよ。

オリキャラ設定1〜原作以前編〜（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

今回はプロローグなので次回から本編ということになります。

標的0 プロローグ(前書き)

二つ連続投稿です。

読んでいただければうれしいです。

今回は浅葱の本当幼いときなのでひらがなばっかです。
読みずらいです。

標的0 プロローグ

わたしにはきおくがある。

それはたぶんぜんせのきおくなのだらうとおもつ。

だつていまのじぶんはちっちゃくて、いるばしょはまっくらで、
してとなりにひとりいる。

それになんかみずにつかっている。

ぶかぶかしてる。

これははおやおやおなかのなかなのだらう。

こんなじょうきょうでじがなんてあるはずない。

ましてやきおくも。

けれどわたしととなりのことは、てをつないでかおをみあわせれば
どちらからともなくほほえみあつ。

となりのこにもじがあるのだろう。

きおくもあるのだろうか。

わたしと、おなじ。

それは、いやだなとおもう。

だって、あんなものきえさってほしいきおくなのだから。

わたしのきおくはなぜか6にある。

そのすべてはくるしみ、げつぼつ、かなしみ、うつらみ、なぐとこころ
まいなすのかんじょうでいるとどらねて

いる。

そのなかでも1つだけ、ほんとうにけしきりたいきおくがある。

そのきおくのなかでもわたしのとなりにはもうひとりいた。

ずっといつしよにいた。

そのことわたしはいつしよにおやからぼつこつをつけていた。

よーじぎゃくたいというものだ。

しよくじもじゆづぶんにあたえらねず。

いちにちいつぶいっばいのみず。

いっしゆうかんにいっかいのしよくぼんいちまひ。

それでもなぜかいきていけていた。

まっくらでせまいくつかんにわたしととなりの「」。

おふるにもいかせてもらえず。

いふくもじゅうぶんにあたえられない。

がつこーというものにもいかせてもらえない。

まいにちまいにちおやがなんかいかくる。

やっとだしてくれるときぼつをもつのはもつむただとしる。

なんかいかくるりゆうーはみずなどをもつてくるものもあるがすとなれ
すはっさんというものがほとんどだ。

そのたびにしないていどにわたしととなりの「」はいたためつけられる。
る。

あるひおやじやないひとがきた。

そのひとはわたしたちのおやはしんだとつげた。

ころされたとつげた。

わたしととなりのこはよろこんだ。

するとおやはまわりにはひょーばんはよかったよつできさまらがころしたのかといわれ、しょけいという

ものをされることになった。

なんで。

なんでなんで。

わたしたちはなにもしてないのに。

わたしととなりのこはまわりのおとなをなんとかころしてにげた。

そのときはねんれいというものがじゅっさいぐらいにはなっていたのでなんとかころせた。

けれどすぐにつかまった。

そこでもいたためつけられて。

わたしとなりのじいば。

ころされた。

じいじとじいばのおおむら。

ほかのきおくもここままでひどくなくてもにたようなものだ。

それまでいちどもとなりのことはなしたことはない。

なぜって？

それはことばをはっせばまわりのひとたちにくびをしめられたから。
そしていうんだ。

まわりのおとなは。

「汚らわしい化け物めっ！空気が穢れる。声をだすな！次でしたら
一週間水ぬきだ」

と。

なんで？

こえをだすことさえもゆるされないの？

なんでもちわるがるの？

うまれたそのしゅんかんからくびがすわっていたのがいけないの？

うまれたそのしゅんかんからめのしょうてんがあっていたのがいけ
ないの？

それともうまれたことそれじたいがいけないの？

それでもわたしたちはいきてきた。

いきてこれたのはいつでもとなりとなりのがいてくれたから。

きおくにすこしだけあるまともなちしきをつかえばおそろくとなり
のこはふたごのきょーだいというもの

なのだろう。

わたしはとなりのことことばをかわしてみたい。

めをみるだけでだいたいはわかるけれど、それでもことばをかわす
のはちがう。

ああ。

このあらたなせかいではことばがかわせるといいな。

でもこのあらたにはじまるせかいではいままでのきおくとはちがい
なにかすきるといふものがあるよう

だ。

それがあればとなりのこと、ことばをかわせるかなあ。

それがあればこんどこそ、きたないひとのせかいをみずにするかなあ。

そしてとうとうわたしたちははおやのなかからうまれた。

わたしはあとからうまれたのでいもうと、になるのかな？

するとまわりのおとなたちがぎゃーぎゃーとうるさいことになりついでに

「ば、化け物だっ」

なにが、ばけものなのだろう？

「こいつらはうまれたばかりの双子のはずでしょう！なぜ焦点があつているのだ！？やはりエストラナーネ

オのやつらのいうとおり化け物なのでは！？」

「そんなもの私に聞くなっ！やはりこいつらは化け物なのだ。エストラナーネオファミリーに引き渡すぞ。

高値で売れるはずだ。それに引き渡せばもう私のファミリーには手を出さないといていた。いいな？」

「ええ。こんな化け物は私達の子供ではありませんわ」

いまのは、ははおやらしきひとかな？

ああ。

またひとのきたないぶぶんをみることになってしまった。

「いいのですか？ボス？」

ぼす？

ちちおやらしきひとはえらいひとなのかな？

「ああ、さつさとエストラーネオに連絡を入れ「その必要はありません」「！」「！」

ん？

だれがちがうひとがはいつてきた。

はくい？

おいしゃしゃん、とかいうひとなのかな？

「貴様は、エストラーネオの科学者か」

かがくしゃ？

「ひひひひ。ええ。そうでございます。こうなると思い待機していたですよ。金額はこちらでよろしい

ですか？」

「ああ。それでいい。ちゃっちゃとこれらをもって行って私のファ

ミリーにはもう手をださないでくれ」

ふぁみりい？

かぞく？

わたしたちは、かぞくじゃないの？

どこかにわたしたちはうらねてしまっの？

なんで。

なんでなんで。

まいかいこうなるの。

そうだ。

となりのこは。

となりのこもこちらをみていた。

そしてどちらからともなくてをのばし、にぎりあった。

そしてねむけがおそってきて、ふたごはねむった。

それをみていた周りの者達は。

「ひっ。生まれたばかりで自我があるのか！？はやくつれていってくれ。エストラーネオ」

「ひひひ。わかっております。」

そうして生まれたばかりのふたごはエストラーネオファミリーの実験施設へと連れて行かれた。

その道中。

「ひひひひ。まったく我が子が普通じゃない、化け物ですよ、と騙しただけで化け物呼ばわりのうえ、躊躇

踏いなく売るとは、ひどいですねえ」

「それを私達がいいます？これからこの双子を実験動物にするというのに。それに化け物なのは嘘じゃない

いでしょう？ふふふふ。」

「まあたしかになあ。うちのボスが強い怨みを感じるといつからき

てみれば設けもんだつたなあ。初めは

こんな餓鬼だと驚いたが、確かに怨みの感情がにじみ出ているなあ。実験が楽しみだよ。やはりボスはす

ごいな。ボスは実験も戦闘も何でもできるからな。ひひひ」

「そうですねえ。すごい人ですよ。」

などという途中からはボスの自慢大会となったエストラーネオのマフィアの会話であった。

標的0 プロローグ（後書き）

作者は心がもろいですが、誤字脱字などあれば教えてください。
もちろん感想もまっています。

標的 1 双子の願い、来る！（前書き）

うってたのが消えたー！

私の千何百文字が・・・。

こまめに保存しなきゃだめということを知りました。

標的 1 双子の願い、来る！

わたしのむつつのきおくのなかのせかいのときからのたつたふたつのねがい。

そのひとつめはかなわなかったけれど。

もうひとつのねがいはかなうといいな。

そうして双子の片割れは目を覚ました。

めをあけてとびこんできたのははいいる。

く。く。

でもせまくはない。

ふじつのおおきものへやだ。

でもごどもがたくさんいた。

わたしからはなぜかずいぶんとはなれているけれど。

なんかふるえてる。

ああ、こわがられているのか。

でもなぜ？

うーむ。

わからん。

あ、となりのこは？

そうおもいさがしてみるとすぐにみつけた。

ふつうによこにいた。

よかった。

あんしんするとまたねむけがおそってきた。

ああ、となりのことはなしたいなあ。

ゆめのなかでもあえないかなあ。

そう思いながら片割れは眠った。

「おきてください。ねえつてば。」

こえがきこえたのでまぶたをあけてみる。

するとあおぞらだった。

そしてまわりはそうげんだった。

げんじつじゃないようだ。

でもここにはみおぼえがある。

そうだ。

きおくのなかでのせかいでこんなところがあったいいのに、とおも
うかべたばしょだ。

そしてめのまえにはしょうねんがいた。

ぼろぼろのぬのをはおっている。

む。

これにもみおぼえがある。

そうだ。どのきおくでもいっしょにいるとなりのことだ。

けれどそのすがたはきおくのなかのすこしせいちょうしたすがただった。

なぜ？

「ああ、このすがたですか。あかこのままだとしゃべりずらいですよ。あとここはせいしんせかいで

す。それにしょうりょうですがげんかくがつかえるのでこのすがたにみせているのですよ。ふつうにしゃ

べれるようになるまではげんかくではなしまししょう？ぼくのとなり

そのすがたはめのまえのしょうねんとつりふたつだった。

「あー。あー。あー。えーと、はなすのは、はじめて、だよね？」

「ええ、ずっとはなしたかったのですが。じょうきょうがじょうきょうでしたし。まったく。あのおとな

たちはどこからぼくたちのこえをかぎつけてきたのでしょうか」

「あはは。そーだねえ。ま、いまははなせるしいいじゃん。やっぱりこのせいしんせかいにこれるのもすき

るのおかげかなあ」

「そつでしゅね。おそろしくは」

「ならかんしゃだね。わたしはきみとはなすことときたないせかいをみないことだけがきおくのなかのせ

かいのときからのねがいだっただ

「おや、きぐうですねえ。ぼくですよ。しかしふたつめのねがいはうまれたしゅんかんにくずれおちま

したがね

「まーいいじゃん。ひとつでもかあっただけで。それだけでわたしはうれしいよ」

「クフフ　そうですねえ。ぼくもうれしいですよ」

「あ、そいえばなまえつくろうよ!」

「なまえ？」

「うん。みよつじはいつしょにかんがえてなまえはたがいのをつく
る」

「いいでしょう。それではみよつじはなににしますか？」

「む。あーじゃあじゃあ」

「ろくどつ、なんていいんじゃない（どつですか）？」

ふたごはみごとにはもった。

「クフフ じゃあそれに決定だ（です）」

「きみのなまえはねえ……。じゃあむくろー！」

「わかりました。それではあなたのなまえはあさぎなんてどうです？」

「うん！ありがとう むくろ」

「そろそろげんじつにもどりましようか。でないとしらないあいだにぼくたちのからだがじんたいじっけ

んされているかもしれません」

「あー。やばい。それはひじょうにまずいじゃないか。むくにい。せいしんせかいからかえったらにくた

いがしんでいたなんてわたしはいやだぞ」

「それではもどりましよう。ぼくももちろんいやです。まああかじをじんたいじっけんするかはわかりま

せんが。すくなくてもたてるぐらいになるまではないとおもいたい
ですが、ゆだんはきんもつですね。と

いつかむくにいつてなんですか？」

「ん？むくにいはむくにだよ。いちおつむくにいがおにいちゃん
だろ？だからむくろにいちゃん。りゃ

くしてむくにい。だよ？いやだった？」

「いえ。まあいいです。それではそろそろほんとうにもどりましょ
うか」

「さっし」

そうして精神世界から双子は去った。

まだ人体実験はされていなかった。

そうして双子は安心する。

これの繰り返しは何千、何万と繰り返される。

そしてとうとう双子にとって運命の日がおとすれる。

標的 1 双子の願い、来る！（後書き）

感想いつでもまっています。

標的2 運命の日、来る！（前書き）

今日も二話投稿です。

標的2 運命の日、来る！

はじめてムク兄と精神世界で話してから六年がたったある日のこと。

灰色が広がる部屋に一人入ってきた。

「実験だ。1206こい」

1206。

1206？

なんか聞き覚えが・・・。

ああ、私だ。

「聞こえているのか？1206こいといっている」

ああ、つるね。

いかないと今日の夕飯がやばそうだなあ。

これ以上へらされたらいい加減死んでしまふ。

まあ。

餓鬼道よりはましだろうけど。

「んじゃあいつてくるね。ムク兄」

「おや。浅葱が先ですか。いつてらっしゃい。浅葱」

「ん」

一文字で答え、私は大人とともに部屋を去る。

つれてこられたところは実験室だった。

そして実験台の上に寝かされる。

そこからは恐怖だった。

生まれる前からある記憶にもあるかわからないほどの恐怖。

麻酔もかけられずに左目にメスをいれられる。

そして新しい瞳をいれられる。

痛いどころではない。

狂うほどの痛み。

それでも狂わない私はすごいと思う。

いや、もどから狂ってたのかな？

叫ぶのはやじの昔にやめた。

ずっと叫んでいたらそれこそそのままだつぶれてしまふ。

瞳をいれられて、縫われるのが終わり、やっと終わりかと思った。

あんなことを聞くまでは。

「おお、成功だ。やはりこんな瞳と共鳴するだけあったな」

「ああ、第一段階成功だ。それでは次の段階へ進むぞ。こちらにだけ共鳴している例のDNAをこいつに移

植する」

第一、段階？

それってまだこれが続けるといっしょと？

く、ふふふ。

ふふふ。

ははははは。

もう、全てが馬鹿馬鹿しくなってくる。

そこからはまた地獄が始まった。

「それでは第二段階、つまり最終段階を始める。麻痺毒を注入しろ」

麻痺毒。

麻酔じゃ、ないんだね。

麻痺毒といつても麻痺させるのは動きだけという不思議なものだった。

つまり痛みは少しも軽くならない。

なんなのだろうか。

ここの人達はそんなに人を痛めつけるのが好きなのだろうか。

そうこう考えているうちに実験は終わっただらしい。

なにやらここのお偉いさんの長ったらしい説明がはじまっている。

「貴様に移植した六道輪廻の瞳の能力の予想は以上だ。そしておそらくその瞳は貴様ら双子にしか適合し

ないだろう。他のに試したときは全てが死んだ。次にその瞳を基盤にして移植した形状記憶カメレオン

のDNAの改造体についてだ。このDNAの改造体については貴様にしか適合しないだろう。理由は不明だ

が。他のに試したときはこちらもすぐに死んだ。天使の翼のようだが、漆黒の色の翼をもち、藍色の毛並

みをもつ九尾の妖狐の姿になることができる。そして翼は一枚一枚が鋼鉄より硬く薄い。ようするに切

れやすい。大きさは一人余裕でのせられるぐらい。一部変化はできない。妖狐の力としてDNAにプロ

グラムされた能力は羽を飛ばして攻撃&操れる、吐く息は霧、幻覚

を作れる、あともう1

つあるがそれは正体不明の力だ。力が圧縮してあり炎のような形状
ということしかわかっていないが、そ

れを体内で生成できるというものだ。プログラムはもう書き換えは
できない。以上だ。これからは我がエ

ストラーネオのためにせいぜい働け」

そうしてお偉いさんは去っていった。

その瞬間に私は気力がつきて寝た。

起きて目に入った色はまたも灰色だった。

しかしちがうのはとなりにムク兄がいない。

どこに行ったのだろうか。

ああ。

ムク兄もあの地獄の実験を受けているのかな？

って、こんなに落ち着いてる場合じゃないのか。

ムク兄なら大丈夫だろうが一応助けなければ。

そんなとき大人の悲鳴が聞こえた。

あ、ムク兄が大人たち殺しまくってるのかな？

気配がどんどん消えてる。

くふふ。

ちよつどいいね。

もともとここ潰すつもりだったんだし。

んじゃ、ここをやつら殺してきまーす。

そんな軽いノリで浅葱は一面灰色の部屋のドアを蹴りでぶち破り歩いていった。

蹴りでぶちやぶったドアの先にいたのは十数人の大人達だった。

む。

なぜ？

・・・。

この先にあるのは実験室のドア。

ああ、ムク兄のいる部屋に突入する機会をまっているのか。

うん。

納得。

そいじゃあこいつら殺しましょうか。

「おい、貴様1206だな。1205の暴走を止める！」

暴走？

何言ってるの、この人たちは。

私達は離れてても言葉を交わすことができるけど。

ムク兄の意識は全然乱れてないよ。

なのに、暴走？

ああ、ムク兄が逆らって自分達が殺られるだけ、という状況をそのままというのが嫌だったのか。

馬鹿な人達。

その理論でいうなら私もこれから暴走ということになるよ？

「くふふ。なら私もこれからあなたがたのいう暴走、してあげますよ。」

「なっ、貴様も逆らうつもりか！ならば、突入部隊全員1206に照準をあわせろ！」

ガチャ。

浅葱に照準があわせられる。

浅葱の瞳の文字が六から一に変化する。

浅葱はあせったようすもなく、幻覚で何かを形作っていく。

浅葱の手に霧が集まっていく。

そこにあらわれたのは長い棒の先端あたりに棒と垂直に等しい角度

で三叉の長い爪のようなものがついて

いるものだった。

有幻覚でつくられた三叉の大鎌だ。

「くふふ。あなたがたにもらった六道輪廻の地獄道と、形状記憶力
メレオンのDNA改造体とやらの能力で

あなたがたを殺してさしあげますよ」

「っ！撃て！」

ズダダダダダダダ

そんな効果音がまさにぴったりなマシンガンの連射。

その全てが浅葱にぴったり照準があっている。

しかし浅葱は全ての弾を三叉の大鎌を使いはじいていく。

ズダダ、ダダ。

突然音が止む。

弾が尽きたようだ。

「くふふふ、もう終わりですか？」

「な……。全てはじかれるだー！」

「こんな化け物にしたのはどこのどいつですか？」

そうだった途端浅葱は一步で距離をつめ、一瞬で皆殺しにしていく。

数分後。

そこには大人十数人の屍と一人の少女しかいなかった。

「くふふふ、ふふ、ははははは 殺してたーのしっ さて、ムク兄は大丈夫かな？」

そういつて実験室のドアを開けるとムク兄のほうも終わったところらしい。

実験室の中にいるほうが人数が多い。

つまりムク兄のほうがたくさんを殺したわけで……。

「むひ。おんこ」

「おや、浅葱じゃないですか。どうしてここにいらっしゃるんです？」

そういったムク兄の右目は浅葱の左目と同じになっていた。

そして浅葱の咳きは聞こえなかったようだ。

「む」

一文字で答えて廊下のほうを指差す。

「ああ、なるほど。それではこんなところちゃっちゃと出て行きましょう。そしてぼくと一緒にマフィア

の殲滅をしませんか？」

「当たり前じゃん」

「くふふ。では行きましょう。あ、そこに隠れている二人も一緒にきますか？」

ムク兄が話しかけた方向には二人の子供がいた。

二人の子供はコクリ、とうなずいた。

「それではついてきてください。とりあえず町へでます」

そうして四人はエストラネオの研究所から去っていった。

標的2 運命の日、来る！（後書き）

感想まっています。

標的3 兄妹喧嘩、来る！（前書き）

今日からは一日一話投稿になると思われます。

標的3 兄妹喧嘩、来る！

「なあ、ムク兄」

「なんですか、浅葱」

「おなかすいた」

「・・・」

沈黙が場を支配する。

「あなたはよくこんな状況でそんなのんきなことがいえますねえ」

そう。

今はかなり危機的状況だったりする。

今はエストラナーネオが嫌われていたので研究所がつぶれた、と聞いて生き残っているエストラナーネオの関

係者を皆殺しだー、と付近のマフィアが騒いでいるのだ。

そのせいで浅葱たちはマフィアに追われている。

今は町の路地裏に隠れている。

通常の体力状態なら皆殺しもできたかもしれないが、なんたって今は通常の体力状態なんてものではない。

い。

むしろぎりぎりの状態と聞いていいだろう。

だって骸は実験された直後だったから実験でけずられた体力はそのまま回復してない。

浅葱は実験を二個受けて、そのせいで骸の二倍体力がけずられている。気絶してそのまま寝たおかげ

で少しは回復しているが消耗した体力の半分も回復していないと思う。

犬と千種というらしい二人は私達とはちがいちびちびと何回も実験を受けていたらしく、体力などほぼ

削られていると聞いていい。

だから浅葱だけでなく皆疲れているし、おなかも減っている。

しかしみんな堪えてきたのだ。

それをぶち破る発言ができたのは浅葱だからだろう。

そう。

浅葱はかなりマイペースなのだ。

「だっておなかすいてたら動きも鈍くなるからすぐ捕まっちゃうよ？」

「まあ、それもそうですね。では食料を確保してきますか」

「うん。私はここで寝て、じゃなくて犬と千種を守ってるからムク兄食料どっかで盗んできて？」

「今寝てるといいかけましたよね。まあいいです。ここから動かないでくださいよ」

「うん。いつてらっしゃーい」

そして浅葱は骸が行ってから三秒もしないうちに寝たのであった。

このあとは帰ってきた骸が浅葱に文句をいいながらも骸がもってきた林檎を全員で食べて、少しの睡眠を

とってから追っ手を皆殺しにして、町から逃げたのだった。

あの運命の日から一年がたつ。

浅葱たちは様々な町を転々としていた。

そしてある町の果物屋から今回は全員で盗みを働いて、人にみづからなような廃墟についたとき事件が起

こつた。

「ねえねえ。ムク兄。久しぶりに殺しあいしよよ」

「そのせりふを兄弟に言う場合、普通は殺しあいではなく手合わせだと思えますが……。まあいいし」

よう。浅葱に常識などありませんもんね」

ぶつ。

何かの切れる音がする気がする。

「む。なんだそれは。私を馬鹿にしているのか？ ナッポーめ」

ぶち。

何かがぶち切れる音がする。

「クフフフ。今忌まわしき果実の名が聞こえた気がするのですが？」

「気がするじゃないし。てゆーか何？ムク兄もしかしてそんな髪型なのにナツポー嫌いとか？あははは

は。うけるー」

ぶっつん。

「浅葱、死ぬ覚悟はできていますね？それに第一浅葱だってナツポーでしょう？そのうえにチビなのでチ

ビナツポーですか？」

ぶちい。

「チビじゃないし！ムク兄たちが大きいだけだ！あとたとえチビだとしてもそれは栄養が足りなかったか

らだ！多分！いや、そのはず！それに私はナツポーじゃないよ？ムク兄の眼はかざりかな？だって私は後

ろの髪背中あたりまであるし？ ナツポーはそんなに細長くないじゃん。だからナツポーはムク兄だけだぜ

い
」

「そんなに死にたいのですか？ 浅葱」

「本当のこといっただけだよ」

「あなたはここで息の根をとめて差し上げます」

「やれるもんならやってみやがれっ！」

「ま、まっってくださいびよん！ 何本気で殺しあおうとしてるびよん
！？」
「」

「めんどい……。」

「「とめないですよ（ください）。もうムク兄（浅葱）をぼこぼこに
しないと（一度痛めつけないと）気が」

すまない(すみません)!!」「」

そういつと同時に骸の右目の文字が四となり、互いの三叉槍と三叉鎌がぶつかりあう。

浅葱の左目の文字は一になっている。

浅葱は地獄道以外は多少しか使えないので地獄道以外はほぼ使わない。そのかわり地獄道を使えば幻覚能

力は強化されるので大体戦闘時は地獄道で幻覚能力を強化して有幻覚により三叉鎌をつくりだし、幻覚を

おりませで戦うのだ。

ガンッ

ギンッ

キインッ

金属のぶつかりあうような音が鳴り響く。

キンッ

スパッ

浅葱の鎌の先端が骸の腕をかする。

ドカッ

骸がよろめいたところに回し蹴りをくらわす。

骸はさっきの攻撃で力尽きたのか動かない。

浅葱がとどめをさそうと鎌をふりあげると浅葱の心臓めがけて槍の先端が飛んできた。

「っっ」

とっさのことによけきれず右腕に槍が貫通した。

「ちっ。動けないのは演技だったの？」

「クフフ。きづかない浅葱が悪いのですよ」

浅葱は槍を抜きながら不満そうな顔をする。

そして言うてはいけない一言をもらす。

「ナツポールの分際で、だましとか使いやがって。そもそもナツポールなら武器としてパイナツポール使えよ」

「ナツポールナツポールいい加減にしなさい。浅葱」

「けっ。何えらそうにいつてるんだよ、ナツポール」

「本当に殺されたいのですか？チビナツポール」

「ナツポールくん。君こそ殺されたいの？」

「それはこちらのせりふですよ」

そういった二人から膨大な殺気が放たれる。

犬と千種はもうすでに壁際へと避難していた。

それから数時間、浅葱と骸は戦い続けた。

廃墟はもともとぼろぼろだったのが、6才とは思えない戦いをする骸と浅葱のせいでさらにぼろぼろにな

っている。

最終的に骸の作戦勝ちとなり、今浅葱は首元に三叉槍の先端をつけられている。

「やはりチビナッポーは馬鹿なのですね。単純な戦闘能力ならチビナッポーのほうが上なのになんであな

たが負けるかわかりますか？用は頭の使いようなんですよ」

「馬鹿馬鹿いいやがって。ナツポールの分際で。もう決めた！私は一人でもマフィアをつぶしてやる！だか

らもうムク兄たちとわかれてやるからな！精神世界でもムク兄なんかとあってやらないからなっ！」

そういって浅葱は起き上がって、犬と千種にむかって一言。

「犬、千種、そーゆーわけだから。じゃあな。」

最後に骸に向かって、

「いまさら止めても無駄だからな。せいぜい死ぬなよ。じゃあなナツポー」

そういって止める間もなく走り去っていった。

あとには堪忍袋の尾がまた切れかかっている骸とそれを必死で止める犬と千種が残った。

標的3 兄妹喧嘩、来る！（後書き）

感想何回でもまっています

標的 4 黒服の集団、来る！

浅葱は骸たちと別れてから手当たりしだいに見つけたマフィアを潰してまわっていた。

「ふーあ。さっきのマフィアも手ごたえなかったな。次は手ごたえあるのがいいな」

ちなみに浅葱の今の服装は黒のタンクトップに黒のショートパンツ、それにぼろぼろの茶色の薄地の袖の

長いロングコートをきている。それにこれまたぼろぼろのサイズのあっていないロングブーツをはいてい

る。

「んー。ナツポーはマフィアの殲滅とか本気で考えてるみたいだけど、実際問題そんなめんどういよな

ー。つーかマフィア消えたら戦いとか殺しの相手いなくなんじゃん。一般人はつまんないし……。殲滅

はおもしろいからいいとして……。目的は何にしようかなあ……。あ、そいえばエストラーネオ壊し

た気になってたけどあそこってただの研究所じゃん。あのお偉いさんもいなかったし。んじゃエストラー

ネオを潰すのを目的にしよう。エストラーネオをみつけるまではマフィアを潰してまわるとして。って、

やばい一人になるとめっちゃ独り言増えた。これからへらさなければ……。」

んー。

マフィアのマジトはどこにあるかな。

ここらへんにはもうないのかなあ。

むー。

と考えながら浅葱は森の中の枝から枝を飛び移って移動していた。

それから1時間ほどたったころ、1つのでかい建物が見えてきた。

何かの旗がはためいている。

それに警備のものもいる。

ってことは、マフィアみっけー

よし、今日はあそこ潰したらあの建物の食料あさって眠ろう。

さっき戦った疲れもあるし体力も半分もないけど、まあ大丈夫だろ。

本気で戦えるような強いやついたらいいなー

そんな軽い気持ちで向かった浅葱は知らなかった。

とつか知るはずもなかった。

ここがボングレ独立暗殺部隊VARIIAのアジトだということ。

同時刻

V A R I A アジト内

「報告！こちらに知らない人影が近づいています！あと少しでつかと！」

「うゝおゝおゝおい。誰だそいつはあゝゝ」

「わかりまゝ報告！見張りが殺られました！今こちらにむかっているもようです！」

最初に報告にきた隊員の声をさえぎって他のものが報告をする。

「しじっ。何それ。なんかおもしろそ。王子いちばんのりー」

そういった金髪で王冠(?)をつけている少年がたってナイフを投げた瞬間にV A R I Aの幹部が三人集

まっている部屋のドアが蹴破られた。

「しじおわっ」

キンッ。

浅葱は入った途端に飛んできたナイフを大鎌で飛んできた方向には
じき返す。

浅葱の眼の文字は一となっている。

パシッ。

金髪の少年はそれをあっさりとキャッチする。

「あつぶなー、いきなり何？もしかしてもしかしなくとも私がここ
にくるのわかってた？」

「しっ。当たり前。気配でわかるし」

「おおー！やったぜい。ここ今までで一番潰しがあるところじゃね
」

そういつて浅葱は金髪の少年に向かって大鎌をふりおろす。

サッ。

金髪の少年はなんなくかわす。

ズドツ。

大鎌が地面にささる。

浅葱はそれを抜く。

しかしそんな一瞬の隙についてナイフが大量に飛んでくる。

でもそれは軽く身を捻るだけでなんなくかわせる。

「ししっ。かかった」

「？ 何いつてんの？」

そういつて動き出そうとしたとき浅葱の右手首から肩にかけてが
気に切れた。

「!?!」

「だからいったじゃん」

そういった金髪の少年がナイフを浅葱の頭上に円を描くように展開する。

「曲芸じゃん」

「ちがうし。しっしっ。針千本のサボテンのできあがり」

「にはならないよ」

そういった浅葱は大鎌の柄尻を地面に叩きつけて地面を割る。

そうするとわれたところから有幻覚の炎が立ち上り炎は蛇の形となつてナイフを全て飲み込んでナイフが

全て溶けると消えた。

「くふふ。そんなので私を殺せると思つたら大間違いだよ」

「ししっ。あんたのほづがよっぽど曲芸じゃねえの？」

「違つよ。そこの赤ん坊はきづいてるかな？」

「ムム。僕は幻覚で見えなくしていたのに。それを見破るとはね。君は幻覚使いかい？」

「くふふ。まああつてるよ」

そういつと今度は大鎌を地面と水平に構えて。

「私の幻覚世界にレッツ御招待」

瞬間、部屋がぐにゃぐにゃとまがりはじめた。

そしてあちこちにひびが入り、そこから火柱が立ち上った。

すると突然火柱が全て凍った。

「僕をなめてもらっちゃ困るよ」

赤ん坊がいった。

「ふーん。けっこーやるじゃん」

浅葱はにやりと笑うと。

「でもやっぱまじ無理」

そういってぱたん、と倒れた。

「」「はっ」「」

その場にいた白髪ロンゲ、金髪の少年、赤ん坊の声が見事にはもつた。

標的 4 黒服の集団、来る！（後書き）

感想まっています

標的 5 最悪の寝起き、来る！（前書き）

章をつけてみました。

あといつのまにかお気に入りが増えていたっ！
ありがとうございます

標的 5 最悪の寝起き、来る！

・・・。

・・・。

しばらくの沈黙のあと。

「うお おお いっ！ いきなり倒れたぞお。どっいつことだ
あ！」

「知らねーし」

「ムム。これは栄養失調じゃない？どーする？殺すかい？」

「どーすんの？スクアーロ」

「ちっ。とりあえず医務室へ運んでおけえ」

「了解しました！」

今だにこの部屋に残っていた隊員がいい、医務室へ運んでいく。

「何で助けんの？」

「とりあえず何でここに攻撃してきたのかきかないといけないからだ。ベル、マーモンあいつが起きるま

で見張っておけ。」

「ん。りょーかい」

「了解だよ」

そういつてベル、マーモンは医務室へと歩いていった。

残されたスクアアローはというと。

「ちっ。XANXUSに報告してくるかあ」

といつてXANXUSの部屋へと歩いていった。

「なあマーモン。ところであの炎の蛇ってなんだったんだ？」

「ああ、あれはおそらく幻覚にボスの憤怒の炎に似た力をこめ実態にしたものだね。僕の推測だけど」

「ふーん。ボスの炎に似た力って。ししっ。やっぱりおもしろいことおこったし」

そう話しているうちに医務室の前についた。

そして入る。

そこには浅葱しか寝ていない。

「ししっ。穏やかな顔して眠ってやんの」

そういってベルが浅葱に手をのばそうとしたとき。

ガチャ。

と扉が開いてルツスーリアとレヴィが入ってきた。

「ああ。可愛い子じゃない」

「うむむ）ポッ」

「うわっ。何頬赤くしてんだよ、ムツツリスケベ。こいつは俺んだ
し」

「なんだとっ！そんなものいつ決めたのだ！」

「しっつ。今だし。だってこいつ見た目いいし戦いもできるんだぜ
？王子にびったりだし」

「む。戦いもできるのか？」

「あり？知らなかった？」

「知ってるわよう。この子がきたときはスクアーロから聞いてるわ。でもきつとレヴィはこんな可

愛い子が強いなんて信じられなかったのね。それに私たちはスクアーロにいわれてきたのよ？」

「むむ」

「ふーん。何で？」

「さあ？わからないわ」

ドゴオ。

そんな効果音がつきそうな勢いで開かれた扉。

「もう起きてるかあ！？」

「む。まだ起きておらぬぞ！」

レヴィはスクアーロの声に対抗するように大声で答える。

「相変わらずじつるわ」「じつるわ」「…」

ベルがしゃべろうとすると浅葱が起きたようだ。

むくり、と浅葱が起きて、ベッドの横に降りる。

瞳の文字はーになっている。

そして手のひらを天井に向けて右手を上上げる。

「人が久しぶりにベッドで寝れたというのに、それを邪魔した気持

ち悪い声の主は誰ですか？」

浅葱の声がいつもより3割り増しで低い。

「こいつだし。気持ち悪いかどーかは知らねえけど」

ベルはスクアア一口を指差す。

「うっおっおっおい。俺は気持ち悪くなんかねえぞおっ！！」

「うむ。起きたらならに可愛い」ポッ（

レヴィが小声で呟く。

ぶち。

何かが切れた。

「くふふふ。あなたは存在自体が公害だと思えますよ?」

そういつて浅葱はにっこり笑う。

けれど眼が笑ってない!

「一度死んでください」

そういつて有幻覚でナイフを宙に何千本と出す。

それを一気にスクアアロとレヴィに飛ばす。

「ううおおおい！危ねえぞお！」

「なぜ俺にもっ！？」

「気持ち悪いからですよ」

そついいながらスクアアロとレヴィはどんどんはじきかえいていく。

しかし何本かははじき返しきれず刺さっていく。

やはりスクアアローのほうの実力が上なのかレヴィより多くのナイフをはじき返していく。

けどなぜかレヴィのほうナイフの向かっている本数がかなり多い気がするのはいけいだろうか。

そして10秒ほど立つと、一瞬で全てのナイフが消えた。

フラッ。

起き上がっているのも無理になったのか浅葱が倒れる。

「おっと」

とベルが浅葱を支える。

「ん？誰？ あ、さっき殺そうとした人だ」

と浅葱がベルに支えられながら空気をぶち壊す発言をした。

標的5 最悪の寝起き、来る！（後書き）

そいでは相変わらず感想お待ちしています。

標的6 黒服のボス、来る！

・・・。

またしても沈黙がおとずれる。

「あれ？間違ってた？」

こんな空気で言葉を発する浅葱。

「いや、まちがってはいないよ」

それに答えるマーモン。

「ふーん。んじゃあ何で自分たちを殺そうとした私は殺されていないの？」

「それはお前の正体を知るためだあ。」

血だらけでルツスーリアに包帯をまかれながらもスクアーロが答える。

ちなみにレヴィはスクアーロより重傷なのにあとまわしにされて、今は自分で包帯を巻こう

としてるが不器用なのか全然できていない。

「あり？なんで血だらけ？つーかなんでこの部屋刺し傷みたいなの
いっばいあんの？」

「うっおっおっおいつ！！！！てめえがやったんだろおっがあ
！！！」

「うわっ。うるせえ。てかマジで？」

ベルが答える。

「マジマジ。すごかったぜ。宙にナイフが何千本といきなりあらわれてそれが全部

スクアールとムツツリスケベに飛んでくの」

「ああ。じゃあやっぱさっきの夢じゃなく現実か。てゆうかまたやっちゃった系かあ」

「……」

「うん。私がマフィアのアジトの高級そうなベッドで勝手に寝てたら持ち主が帰ってきて

いきなり撃たれたときがあったんだけど、その持ち主の顔が想像以上にきもくて、そのと

きも起きたらまわりが破壊されてて、死体がごろごろと。それを見たナツポーたちは顔が

引きつってた。あとから聞いた話から考えるに、私は嫌なやつに起こされたりよっぽど機

嫌が悪い状態で起きたりするとそいつを無意識に殺そうとするみたいだね」

「機嫌が悪い状態？」

「悪夢を見たり、今みたいに寝起きに気持ち悪いやつを見たりすることだね」

「あ、じゃあもしかして、今殺そうとしたのってムツツリスケベのせい？」

「うん。大声で起こされる程度なら別に殺そうとなんてしないよ」

「お、お、い！じゃあ何で俺にまでナイフが飛んできたんだあ！」

「なんとなく?」

「う、お、お、お、い！！！！なんとなくですむかあ！！」

「あー、器が狭いなあ」

ぶちい。

「うおおい！今すぐ三枚におろしてやる」うるせえ。カスが「！」

ガスッ。

新たな声が聞こえた瞬間スクアーロの頭が蹴り飛ばされた。

「いきなり何しやがるう。XANXUS！」

「てめえは何者だ」

スクアア口をきれいに無視してXANXUSは問いかける。

浅葱はベルに支えられながらもXANXUSを正面から見据える。

「何者？六道浅葱だよ」

「あ？」

「あれ？聞こえなかった？だから六道浅葱」

「そついでに聞こえてるんじゃないかねえ。とつとと答える」

そういったXANXUSは浅葱に銃口を向ける。

「おりよ？もしかしなくても君短気？だめだよ。短気だと友達いなくなるよ」

() () () ()
() () () ()
() () () ()
() () () ()
! ? () () () ()

その時ヴァリアーの幹部の心の声はもった。

「カスが。いいから答えろ」

ぶち。

「あれ。今私に向かってカスっていった？カスってちびって意味なのかな？」

浅葱の声がいつもより低い。

「だったらどうした」

「殺す」

一瞬で浅葱から膨大な殺気が放たれる。

XANXUSと浅葱の殺気が衝突して空気がびりびりとする。

そして浅葱は右手に霧を集めて有幻覚の大鎌をつくりだそうとする。

しかし、途中で霧散する。

「？」

その場にいたXANXUS以外の頭に？が浮かぶ。

「あー。やっぱやめた。つーか無理だな。今の私はあなたには多分敵わない。たとえ体調が

万全で体力も全快してたとしても。そんなのと戦っても無駄だしね。さあ煮るなり焼くなり

もう好きにすればいいさ。質問にもできる限り答えてあげるよ」

「ブワーツハツハツハツ。こいつぁおもしれえ。肝が据わってやがる。カス鯨、こいつに

入隊書を書かせろ」

そういつてXANXUSはスクアア口に入隊書を渡して部屋から出て行った。

「ちっ。これに必要事項を書けえ」

標的7 模擬戦闘、来る！

「入隊書？」

「そうだあ。てめえに書いてもらってそれをボスに見せて了承されたらここにはいるんだあ」

「え、何でマフィアなんかに入んなきゃなんないのさ。第一了承されなかつたら」

どーなの？」

「死だ」

「うわ、ま、いいけど。そうだったら意地でも逃げるし。でもこいつて何てゆーとこ？」

「ここはボンゴレ独立暗殺部隊 V A R I A だよ」

赤ん坊が答える。

ついでにいうとムツツリとオカマはムツツリの怪我が想像以上に酷いとかで別の部屋で

オカマに治療されてるらしい。

「ボンゴレ？ってそれめっちゃでかいマフィアじゃん！」

「知ってるのかい？」

「うん 知ってるよ。ナツポーはいつかそれを利用してマフィアの殲滅とかしよう」と

してて、それを聞かされた私はそんなでっかいとこと戦ってみたいなあ、と思って

いたわけですよ」

「マフィアの殲滅？ ナッポー？ まあいいよ。今度聞かせてもらおうからね」

「ん。それでこの仕事って暗殺だけ？」

「暗殺のほかにもボンゴレに敵対したマフィアの殲滅とか警護とかもあるけど、大体は」

依頼を受けて、暗殺とかだな きょーみでた？」

「殲滅 ここにいたら殺しもあるし、強いやつともたたかえるのか？」

「そうだぜ」

「おお〜 はいりたい！ただふらふらしてるだけじゃ全然強いのと会えないんだ。それに

時々復讐者ヴァインディチェ来るし・・・」

「復讐者？じゃあ何で君は捕まってないんだい？」

「あー。それは復讐者を知ってから、あ、私やばいじゃないか、と
思って、復讐者が

探してる脱獄囚とかの情報を集めといて、それを渡して、見逃して
もらってたから」

まわりにいたものが驚く。

「ん？どつたの？」

「いや。何でもねえ。とりあえずこれを書けえ。」

「ん。わかった」

その後は入隊書に必要な事項を書いていく。

「あ、その前に君たちの名前って何？私はいったけど君たちのは聞いてないよ。」

「ししっ。俺はベルフェゴール。ベルって呼べよ」

「俺はスクアードだあ」

「僕はマーモンだよ。さっきでいったオカマがルツスーリアで、ムツリが」

レヴィ・ア・タン。そして僕たちのボスはXANXUSだよ」

「へえ。これからよろしくだね」

「おう。よろしくな」

「合格できたらな」

「ムム。よろしく」

「えーと、まずは7カ国以上話せるか。そして話せる言語を答えよ。

話せる、っと。んで話せるのは、

イタリア語、日本語、フランス語、ギリシャ語、中国語、英語、ロシア語、スペイン語、

の八個っと。うん。何とか大丈夫だね」

という感じで浅葱は黙々と、独り言は呟くが、進めていった。

数十分後。

「終わったー つつてもそんなに多くなかったけど」

「XANXUSに届けてくる」

とってスクアールが部屋からでていった。

「お疲れー 合格できるといいな」

「うん」

10分後。

がちゃ

「うゝおゝおゝおい。これから模擬戦闘をするぞお！もう入隊は決定だがそれで

入隊後の地位を決める！」

「ふーん。わかった。どーでもさんの？」

「ついてこい。ベルとマーモンもだ」

そして浅葱はスクアアロについていく。

後ろにはマーモンとベルもついてきていた。

しばらく歩くと訓練場っぽいところについた。

ここでもやるようだ。

もう真夜中なのであたりが暗い。

まあ夜目は効くので問題ないが。

そこにはもうXANXUSとルツスーリア、ムッツリがいた。

「これから俺と模擬戦闘をする」

「殺しはあり？」

「お前が弱かったら殺されるぞお」

「んでスクアーロは殺していいの？」

「殺す気でいー！」

とスクアーロがいう。

「結局どっちなんだよ？ま、いーけど。ところでちっきの怪我はい
ーのか？」

「そんなこと気にするなあ」

「ふーん。んじゃいくよっ」

浅葱の左眼の文字が一になる。

そして浅葱の右手に霧が集まり、三叉の大鎌ができあがる。

そして浅葱は走り出して、スクアーロに大鎌をふりおろす。

キーンッ。

スクアールが剣で防御する。

そしてまた浅葱が大鎌をふる。

そしてスクアールが防御、そして攻撃、という攻防がしばらく続いた。

「あはは こんなに強いやつ初めてかなあ めっちゃ楽しつ」

そういった浅葱はスクアールから距離をとって大鎌をくるくるまわ

して、柄尻を

地面にとん、と置く。

すると置かれたところから地面が割れていく。

そして割れた地面が次々と浮かんでいく。

浅葱はその中心の瓦礫の上に立っている。

「幻覚かあ。だがこんなもんで俺を止められると思うなあっ！！！！」

そういつたスクアーロは瓦礫の上をひよひよいと飛んでこちらに近づいてくる。

「え〜。幻覚平気なの〜？ま、いいけど」

といつと今度は浅葱は大鎌をふりかぶる。

「何をしようかと無駄だあっ」

「くぶぶぶ。それはどうでしようっ」

と、浅葱は大鎌を何も無い空中で地面に平行にふる。

するとふった軌道にかまいたちのようなものが発生しスクアアアに飛んでいく。

「っ！？」

とっさにスクアーロはよける。

しかしよけきれずに袖がスパツと切れている。

「何をしたあ」

「何、ただの幻覚の強いものですよ。幻覚にある力をこめると有幻覚、つまり実体の

ある幻覚がつくれるんです。まあすぐ疲れますが。少し前倒れたのも有幻覚を使って

「疲れたからです。この大鎌も有幻覚ですよ」

「ある力？」

「ま、とりあえず決着つけましょうよ」

「そつだなあ」

「んじゃちょっとしか持たないけど本気いきまーす」

そういつて大鎌を地面と平行に構える。

「現実の幻覚世界へ御招待」

そういつと浮いていた瓦礫の影がどんどん広がっていきVARIATIONの幹部と浅葱を包む。

その中に無数の火柱が立ち上る。

暗闇をてらすほどの火柱は見ただけで高温だとわかる。

「さて、その火柱に触れると、一瞬で黒こげですよ」

そういつてどんどん火柱を増やしていく。

底も見えない、縦も横もわからない暗闇から火柱が方向様々に伸びる。

「ちいっ」

そういつてスクアアア口は当たっているがぎりぎりまで致命傷をさけながら

浅葱に近づいていく。

もう少しで近づくといふところできなり現実にもどる。

「あれ全部致命傷さけるとか。化け物かよ」

そう呟いた浅葱は息切れしながらもスクアーロに大鎌をふりおろす。

スクアーロはいきなり現実に戻ったことに動揺しながらもそれを剣で受け止め、

反撃しようとする。

浅葱はそれを大鎌ですらそうとする。

しかし大鎌が少しずつ霧散していく。

「ぐっ」

スクアール口がその隙を見逃すはずもなく、一瞬で浅葱の首に剣をそえる。

そえられた浅葱はというと。

「あー、負けちった。ま、楽しかったからいいけど」

といいながら両手を上にあげた。

そして、

「じじちゃんじじちゃん」

という気合の抜ける浅葱の声で模擬戦闘は幕を閉じた。

標的 8 衝撃の事実、来る！（前書き）

テスト終わったあー！

よっし、これでパソコンやりまくれるぜ

そいでは本編どぞ。

今回は少し浅葱の弱い部分があります。

標的 8 衝撃の事実、来る！

模擬戦闘が終わったあと、スクアーロは治療を受けてから、XAN
XUSと話込んでいた。

そして今は浅葱は医務室でオカマ、もといルツスから治療を受けて
いる。

さつきルースーリア、と呼んだら「ルツス姐って呼んで？」といわ
れたが丁重に

お断りしたはずだがひつこかったので何とかルツスと呼ぶ、という
ことで落ち着いたのだ。

「すごいわね。浅ちゃん。あのスクアーロと戦ってかすり傷しかないなんて。」

スクアーロは結構火傷があったのよ」

「へー。そーなんですかー（棒読み）」

「本当にすごいのか?」

「だって実戦だったら最後に剣を突きつけられたときに死んでたし・
・」

「ま、いーじゃねえか。浅葱、王子ぐらい強いんじゃない？」

ベルがいつてくる。

てゆーか王子？

私が頭上に？を浮かべているとマーモンが教えてくれた。

「ベルは本物の王族の血をひいてるんだよ」

「えっ!?!」

マジで?」

「マジだし。しっしっしっ」

「心読まれたっ!?!」

「だって浅葱顔にでてるぜ？」

うわっ！

何か前にもこんなことあった気がする。

今後はまた気をつけねば。

と、浅葱は決心する。

「にしてもスク違いわねえ」

む。

確かに。

もう30分はたっている。

新入隊員の地位を決めるぐらいでなぜそんなに遅いのだろう。

とか思っていたらスクアーロとXANXUSが医務室にやってきた。

「決まったぞお。浅葱は俺たちと同じ幹部だあ！」

「なぜいきなり幹部!？」

私は驚き聞いてみる。

「強さが現幹部のベルと同じぐらいだからだあ」

「理由それだけ？それに私まだ6才だよ。あと半年ぐらいで7才だけど……。」

そう、今は一月中旬ぐらいなので誕生日まであと六ヶ月弱なのだ。

まあ誕生日だから浅葱はどうかするとうわけではないが。

骸がいたときはケーキを盗んで食べたりはしていたが。

浅葱はムク兄がないしいつか、みたいに思っている。

なんだかんだで骸は浅葱にとって大事な人物なのだ。

「ベルだって今7才だあ。」

「え、マジ？」

「しっしっ。マジだし。」

「うわー。こここのボスって7才の幹部いるし、赤ちゃんの幹部もいるし、6才の私も幹部に」

しゅんすとするじゅんじゅん？

瞬間、空気が凍る。

「消されてえか、ドカスが」

XANXUSから尋常でない量の殺気がでる。

浅葱はやはりこの人には勝てないなあ、と思い。

「すいやせんでしたー。反省してます。前言撤回します！」

ビシッ、となぜか敬礼する。

はたからみれば全然反省しているようには見えない。

「次いったらカッ消す」

「ハイイ！わかっておりやす。たいちよー！」

また浅葱は敬礼。

いや、だからそれ全然わかってるようには見えないから。

とこの場の全員が思ったとか。

「ゴホン！まあいい。本題に戻るぞお！浅葱は書類仕事できるかあ？」

「覚えてたらできるんじゃない？」

「なら決定だあ」。浅葱は明日から正式に幹部として働いてもらうぞお！今日は

自由にしてお

「うーす。了解しました」

そう答えたときにはもう朝日が昇り始めていた。

あの後、浅葱はスクアーロに自分の部屋を覚えてもらってスクアーロが部屋から

でたとたんにふかふかベッドに入って寝た。

そのときの浅葱の感想は、

「わ〜。ふかふか〜 どんだけこ〜もつかってんだろ。」

だった。

それから数時間後。

もう完全に太陽は真上に来ていた。

むくり。

やっと浅葱は起きたようだ。

「ふわああ。うわ、めっちゃ寝過ぎした。ま、いいけど。むー。これから何をしようか」

と、いつとりあえず部屋から出る。

「つかつかつか」

いきなり迷っていた。

「むー。とりあえず適当に歩いてこよう」

と浅葱が歩いていると少し大きな扉が目に入った。

「おお。あそこなら誰かいるかな」

と扉を開けて入っていく。

そこは昨日浅葱がぶち破った部屋の構造と似ていた。

そいえば扉も似てたような・・・。

すると中には人がいたようでこちらに気づき話しかけてくる。

「お、浅葱じゃん。どしたの？道迷ったとか？ししっ
」

ベルだった。

ソファアの上で寝転がっていたようだ。

今は上半身だけ起こしてこちらを見ている。

「むう。仕方ないじゃん。部屋も何も自分の部屋しか教えられてなかったし。」

それよりこっつて、昨日ドアぶち破った部屋に似てるんだけど・・・

「

「当たり前じゃん。だってここの部屋だぜ？」

「!?!? 昨日あんなぼろぼろになったじゃん。まさか昨日の今日で
もう直ってるとか?」

「そのまさかだし」

「うええ。どんだけ金もってんの?」「」「」

「んー。結構もってると思っただけ?」

「ふーん。んで「」はど「」。」

そついいながら浅葱はベルの向かいのソファに座る。

「「」はロビーだぜ。」

「へー。「」れから何しよ・・・。」

「んじゃ王子が案内してやるよ。」

「むおー！ありがとう」

浅葱は嘘偽りなくにっこりと笑う。

こんな笑いをみせるのは骸や犬、千種以外では初めてだろう。

「／／／ ししっ。気にすんなって。とりあえずルツスに服作って
もらうか？」

「服なんて作ってもらえるの？」

「ああ、それまではシャワーあびて俺の服貸してやるからそれ着て
まっつておめいぜ」

「シャワー？」

「あれ、もしかして知らない？」

「うん。今までは石鹸は盗んで、有幻覚で熱湯だしまくって森とか
人気少ない川の

近くとかで洗ってたし・・・」

浅葱は思い出す。

エストラーネオのときのことを。

あのときは週に一度ぐらい水の張った広い桶のなかに全員放り込ま
れていた。

けれど中に入ってるのは冷水でとても寒かった。

それで風邪を引いても毛布も何も与えられない。

でもみんな実験でついた血を落としたいし、あの灰色の部屋はカビなどもはえているのでそのまま

でいたらそれこそ病気になるのでみんな嫌が応でも洗うしかない。
それでも短時間で

でようと必死で洗ってさっさとでる。

あのときのことを思い出して、浅葱は少し震えた。

いくら余裕ぶっつけていても、その状況を壊したのが浅葱たちであつても浅葱の記憶には

しっかりとトラウマとして残っているのだ。

そんな浅葱の頭をわしゃわしゃとベルはなでる。

「？」

「大丈夫だし。姫はもう俺たちの仲間だろ？だからいつか話してもいいって思えるように

なったら話してくれよな ししっしっ

「ありがとう」

そういった浅葱の顔には笑顔が浮かんでいた。

「ところで姫って？」

「ん？だって姫、強いし可愛いし何より王子と一緒にいるんだから
姫」

「むー。ベルの思考回路は意味不明ということにしておこう。ま、
いいけど」

「ん。じゃあ早速行こうぜ。姫にはそんなぼろぼろの服似合わねえ
つて 先にとりあえず

着替えちゃおうぜ」

「クスッ。ありがとう」

浅葱は聞こえないような声でもう一度お礼を言った。

「ん？何か言った？」

「んーん。さ、行くう。シャワーってやつも早く見てみたい！昨日はすぐ寝ちゃったから

早く洗いたいし」

とって浅葱とベルはロビーから出て行った。

標的9 ルッスの必要性、来る！（前書き）

章を追加させてもらいました。

補足：標的9 についてつけるの忘れてたのでつけさせてもらいました。それ以外は変わってません。すみません。

補足2：昔骸交換したものだ。昔骸と交換したものだ。に直しました。他は直してません。すみません。

標的9 ルッスの必要性、来る！

浅葱は今ベルの部屋にいる。

今ベルが浅葱に着れそうな服を探してくれているのだ。

「ん。これもぶかぶかかもしんねえけど長袖Ｔシャツとズボン」

そういつてベルが渡してきたのはしましまな模様のベルが今も着ているＴシャツと

同じ柄のものと黒いズボン。

どちらも明らかに浅葱と比べればぶかぶかだ。

「むづ。私はチビじゃないもん。皆がおつきいだけだもん・・・」

浅葱は小さくそう呟いた。

「じゃあ大浴場行ってこいよ。一応部屋にもそれぞれシャワーはついてるけど大浴場は」

広いしきつと清掃員ぐらいいるだろうからそいつにシャワーの使い方教わってこいよ

その間にルツスになんか服頼んどくし。なんか注文ある?」

「んーん。ないよ。あ、でもTシャツだけ私が注文していい?」

「ん。どんなの?」

「じんなの」

と書いて浅葱は有幻覚で長袖Tシャツの絵がかいてあるA4の紙を
創りだす。

そこに書いてあった柄は薄水色っぽい色に霧のような模様がついた
ものだった。

「この程度の有幻覚なら30分はもつから、これをルッスに見せて
きて。そいえば

サイズってどーすんの?」

「サイズのことなら心配ないぜ。ルツスは変態だから見ただけわかるらしいし……」

「うわ、マジで変態じゃん……。ま、いや。あと、その隊服のコートっぽいやつと」

長袖Tシャツはちょっとぶかぶかめにして、っていつといてくれる?」

「ん。オッケー。じゃあいこうぜ。場所はさっき教えたところから」

「ありがとう」

そういつて浅葱はベルに貸してもらった服をもち、部屋をでていった。

ちなみに浅葱のもちものは今着ているものと三叉槍の先っちよだけだった。

昔骸と交換したものだっただ。

骸の三叉槍は強力な幻覚でできている。

これは有幻覚ではない。

だってこれをさして意思を伝えたり記憶を見せたりもできるし、何よりこれは契約を

するためのものでもある。

契約とは体をのつとる契約だ。

天界道のマインドコントロールの強化版といったところだろうか。

少なくとも浅葱はそう認識している。

まだ完全にのつとることは契約してもできないが、エストラーネオにあつた憑依弾とか

いうものを使えば完全に使えるようになるだろうと思う。

研究所と一緒に壊してしまったが・・・。

浅葱はこの三叉槍の先っちょの部分のようにただの強力やただの幻覚ならば無制限に

できるが、しかし骸は浅葱みたく無制限ではなく、有幻覚をつくることはできない。

そのとき浅葱は骸に狐の姿のときの羽を一枚あげた。

20センチぐらいだがとても薄く硬く切れ味ばつぐんだ。

それぞれがあげたものには当時の力のほとんどをこめて、互いの命がシンクロ

するような機能をつけた。

互いが死なない限り瀕死の傷を負っても生命力をわけられ、死なないという機能だ。

だが傷が深すぎればわかる側が追いつけずその傷が分ける側に移って傷が半々になる、というリスクがあるのだが。

これはもともとから魂レベルで繋がっている骸と浅葱だからこそできたものだがそれ以前に

これは真に信頼していないとできないものだ。

信頼できないやつとしたら、自分が戦っているときをみはからって、
相手がわざと

そのときに重症を負って間接的に簡単に殺すこともできるからだ。

ちなみに媒介にする三叉槍の先端と羽は体内にしまうこともできる。

今までぶかぶかコートの無駄にでかい内ポケットに浅葱は昔骸と交換した三叉槍の

先つちよを入れてあったが、これからは体内にしまうことにしたので腕に躊躇なく

三叉槍を突き刺すと、三叉槍が霧散してさした傷口から入って、傷口がふさがった。

話は戻り、浅葱は大浴場にきて、とりあえず風呂に入ってみた。

すると清掃員であらうおばさんがいた。

浅葱はそのおばさんにシャワーというのがどれでどう使うのか聞くことにした。

それから1時間ほど、浅葱はおばさんに教えてもらったシャワーでおばさんと一緒に

かけあってみたり（一方的に浅葱がかけおばさんは逃げていた）
広い風呂を

泳いだりしていた。

そしてやっと浅葱は風呂から上がりベルから貸してもらった服をきて、ベルがいるで

あるつロビーへと向かっていた。

ぶかぶかだと思われていた服は実際ぶかぶかだったがベルについて、と渡されていた

ブーツにすそを少しいれたので、引きずらなくてすむ。

Tシャツの袖は、そのまま手が隠れている。

すそがワンピース並みになっているが仕方ないだろう。

浅葱は以上にちっちゃい。

そして以上に細いのだ。

まあ栄養不足なども原因なのだろうが・・・。

ちなみに今までできていたぼろぼろコートなどは清掃員のおばさんが捨てといてくれると

いので渡して捨ててもらったことにした。

そしてロビーに入ると予想通りベルがいた。

「お。おそかったじゃん どーだった？」

「うん。楽しかったよ」

「よかったじゃん ルッスにいったら明日にはできるってぞ。それよりやっぱ姫は

何着ても似合うな」

「本当？ただぶかぶかなだけだよ？」

「当たり前だし。それにそれ王子の服だから姫なら似合うんだよ」

「そっか とりあえずありがと にしても今日たのんで明日できる
とか……。」

「ルッスってただのおかまだと思ってた……。」

「まあ、おかまだけどルッスいなかったら今頃VARIIA大変なこ
とになってた」

「かもな……。この隊服デザインとかつくったりしたのルッスだし。
ご飯もルッスが」

作ってるんだぜ」

「え、マジ？ルツスって結構必要性あったんだね」

「確かに、でもうるさいけどな。しししっ」

「うん。スクアアロとは違うけどあのおねえ言葉がすごい」

「しししっ だよなあ」

などと夕飯にルッスに呼ばれるまで雑談は続いたのであった。

ちなみに夕飯では、

「あらあ、浅ちゃんその服似合ってるわよ。やっぱり浅ちゃんはどんな服でも

似合いそうねえ。ふふふ」

「うっ。なんかきもさ倍増してる・・・ヘルプ、ベル・・・」

「しっ。ゴメン 無理だし」

「裏切り者」

と、いふことがあったのであった。

標的10 初任務、来る！

ルッスに服を頼んだ翌日。

「浅ちゃん。洋服できたわよう」

浅葱の部屋にルッスが正午あたりにたずねてきていた。

そして浅葱はといえば、まだ寝ていた。

「んに？ルツス？ふあーあ」

ガチャ。

浅葱はあくびをしながらドアを開ける。

そこには予想通り洋服が入っているであろう大袋をもったルツスがいた。

「おはよう。浅ちゃん」

「ん。おはよー。ルッス。服もうできたの？」

「できたわよう。早速着て見せてね。じゃあ昼ごはんを作って待ってるから食堂に来てねえ」

「んー。わかった」

そういつて浅葱はルッスから大袋をもらってドアを閉めた。

ちなみにVARIIAのアジトの構造については昨日ベルに教えてもらった。

「んー。まだ眠い。でもお腹減ったなー。早く着替えて食堂行こう」

といつて浅葱は着替えて食堂に向かった。

食堂に着くともうスクアアロとレヴィ、ベル、マーモンは食べ始めていた。

ルツスは厨房にいるようだ。

ん、XANXUSがいない。

まあ、あのボスは自分の好きなときに食べるのだらう。

そこまで歩きながら考えてよじちやくブルたちのとこにたついた。

「おはよー」

「おはよ、姫」

「ム、おはよじつ」

「おはよじつだ」

「うおおおい！おせえぞお！」

「うるさい、遅くて文句あんのかよ」

「新人隊員は普通一番に起きて挨拶するだろうがあ」

「新人隊員は新人隊員でもスクアーロたちが私は幹部っていったんだよ？幹部は」

「寝坊が普通のはずだっ！」

「ムム、それは違うと思うよ、浅葱。幹部が寝坊ばかりだと組織が成り立たないじゃないか」

「あ、そっか。まあ、明日からはちゃんと起きれるようにするよ。今日みたいに真昼に

起きることはなくする。どうせなら夕方まで寝ることにするよ。」
「れでいい?」

「うう、お、お、おい！全然いくねえぞお……!」

スクアーロの顔に青筋が浮かび始めている。

ああ、この人も短気なのか、からかいがいがある

と浅葱は思っていた。

「ま、いーじゃん。ルッスー、ご飯ちようだーい」

「わかったわよう」

といった10分後あたりにルツスはご飯をもってやってきた。

「あら、浅ちゃん。その服も似合ってるわよう」

とルツスはいつてくれた。

今の浅葱の格好はルツスに作ってもらった服だ。

黒のショートパンツに太ももまである黒のニーソックス、それにベルたちと同じブーツ。

上は薄水色の霧みみたいな模様のはいった長袖Tシャツ。

襟のぶかぶか具合からみるに袖も手はすっぽりかかっているだろう。

ちなみにすそはショートパンツが半分かくれる程度だ。

そしてその上から前を開けたV A R I A隊服のコートを着ている。

これも袖がすっぽりと手を隠している。

すそは膝辺りだ。

「本当？ありがとう」

「しじつ。似合ってます」

「ありがとう あ、ベル昨日借りた服返すからあとでもってくるね」

「うーよ。やるし」

「おお。ありがとう。じゃあベルにはこれをあげるよ。」

とって取り出したのは漆黒の10センチぐらいの羽10本だった。

「ありがとう。とじまでじの羽何の羽？」

「私の羽」

と答えると皆「は？」みたいな顔をしていた。

唯一冷静さを取り戻したマーモンが聞く。

「どっしりしてどだい？」

「うんうんうんうん」

と喋って浅葱は漆黒の翼をもつ九尾の狐の姿になる。

九本の尾がゆらゆらとゆれている。

「化け物、って思った？」

そういった浅葱の声は少し小さかった。

今までこの姿を見て化け物、といわなかった人は骸と犬、千種以外
いないのだ。

こんなふうにしたエストラーネオの研究所のものたちはこの姿をみせる以前から

もうすでに化け物、といていた。

「しっつ。そんなこと思っかよ」

!?

浅葱は動揺する。

こんなふうに返されるとは思わなかった。

「こんなことで何で化け物っていわないといけないんだい？」

マーモンにもいわれ、浅葱は涙がでそうになる。

しかしそれを必死でこらえ、狐の姿から人型に戻る。

「くふふ」

浅葱は小さく笑う。

「どっちみち、いつかは話さないといけなかったんだろっし、今話すよ。私の

今までと、力のことを」

浅葱はそういって話し始めた。

もちろん昼ごはんを食べながらだが。

浅葱は昼ごはんを食べながら、自分のことを話した。

まあ骸や犬、千種的能力までは言っていないが。

兄妹喧嘩をして別れてきたことや6つの記憶などは話した。

「と、いう訳なのです。だからエストラーネオをつぶすのがとりあえずの目標なのですよ」

それを聞いたVARIIA幹部はしばらく呆然としていたが。

「すごいじゃねえかあ。テメエは予想以上に使えるようだあ。」

「しっつ。狐姿と戦ったらレヴィなんてぼろぼろじゃね。」

「そうだね。戦闘もできるなんて邪道だけど浅葱は認めるしかなさそうだね。それに」

「幻術では僕は負けないよ」

「くふふ。そうだね。ありがとう。あとベル、レヴィと戦ったらぼろぼろじゃないよ」

肉片たりとも残らないさ
「

「ぬお！なんだとっ！
「

「しっつ。浅葱の言つとおりだし。ムッツリなんか消えちまえ
「

「・・・」

無言でレヴィは部屋の端でいじけ始めた。

「うゝおゝお　おい！話が終わったところで早速任務だあ！浅葱はベルと組んで

ボンゴレの要人を殺そうとしているという中小ファミリーをつぶしてこおゝいー」

「りょうかい」

「りよーおかい」

「それと浅葱、さっきの話をXANXUSにも話すがいいか？」

「うん。いいよー」

浅葱は軽く答えた。

「それでは行ってしま、いー」

といわれたので早速任務にベルといった。

そして浅葱とベルは標的の中小ファミリーを潰しに行った。

中小ファミリーはなんでこんな小さいのにボンゴレに手だそうとしたのかわからない

ほど小さかった。

だって構成人数は10人にも満たなかった。

アジトは小さな小屋だった。

しかもめっちゃ弱かった。

殲滅は一分とかならずに終わった。

浅葱は敵の首を大鎌で飛ばしていき、ベルはナイフを心臓に飛ばしていった。

終わってから2人はつまんないー、となげいていたとかいないとか。

標的11 運命の邂逅、来る！

初めて浅葱が任務に行ってから2週間ほどたった。

今は2月に入ったばかりだ。

そして初任務から帰って浅葱の力を聞いたXANXUSを浅葱がからかいに向かって、

どう思った？と聞いてみると、

「は。そんなことで有能な部下を手放すと思ったか？」

といわれた。

多分ボスにしては優しいほうの言葉だったと思ったので浅葱は微笑んでありがとう

といった。

浅葱は表面上は普段通りだったが実際はからかいに来たというのも

おれねるべら

うれしかった。

そして今日も浅葱はある任務に行くことになっている。

ちなみに浅葱は書類仕事は結構得意だった。

平均の10倍くらいのスピードでできた。

だが浅葱は書類仕事が嫌なのでスクアア一口に抗議して実戦を増やしてもらった。

今日の任務はボンゴレを潰すために禁弾を開発しようとしているとかいうマフィアの

殲滅だった。

それを聞いたときの浅葱の心境は複雑だった。

禁弾といえばエストラーネオを思い出す。

エストラーネオは憑依弾というものを作ろうとしていた。

そのために何人犠牲になっただかわからない。

だがそれがあればおそらく私と骸の力のマインドコントロールを昇華させられる

だろっからどうせなら手に入れてやるっと思っただけど、怒りが勝って全て

壊してしまった。

今となっては苦い思い出なあ、と思う。

エストラーネオの作った力を使うのは癪だが、自分たちで作った力で自分たちがほろぶ

など笑える、と私は思う。

まあその憑依弾はエストラーネオ以外には禁弾とされているようだが。

そんなことは私には関係ない。

でも1つだけ疑問がある。

なぜ禁弾と勝手に言って禁止するのか、だ。

マフィアとは力で相手を屈服させるものなのだろうか？

なのになぜ強い力をもつものを禁止するのか。

それがわからない。

つくるのに人がたくさん犠牲になるから？

どうせマフィアなどそれ以外にもたくさん命を犠牲にしているだろ
うっ..

マフィアというものはやっぱり訳がわからない。

まあそういう自分もつい2週間ほど前にマフィアとなってしまうた
わけだが。

ここらで話は戻り、潰す相手は禁弾を作ろうとはしているがまだ未完成で、構成人数も

20人ほどだそうなので簡単な任務だろうと思った。

スクアール口から任務の内容を聞かされてから2時間ほどたったころ。

浅葱とベルは敵の研究所兼アジトへと向かっていた。

「ねー、ベルー」

ふいに浅葱がベルに話しかける。

「ん？どしたの？姫」

「禁弾ってなんで禁弾って呼ばれるの？ていつかなんで禁止するの？」

「んー。スクアールとかの話によれば、作成に多大な犠牲を出す、力が凶悪だから」

とかいう理由らしいぜ」

「ふーん。でもマフィアだって禁弾じゃなくても命たくさん奪ってるじゃん。殺しとか」

は好きだけど」

「まー、そーだけだな。あ、でもこついうのも聞いたことあるぜ。
禁弾は人の力を

超えたものだから人の世が狂ってしまうのだ、とか」

「ふーん。それで勝手に禁弾とかいうのか」

「ん？なんかいったか？姫」

「んーん。さっ 早く殲滅しちゃおう」

話している間にもう敵の研究所兼アジトについたようだ。

いかにも研究所だぜ、ってな感じの窓1つない灰色の建物だった。

エストラーネオの研究所に大きさは劣るが形が似ていた。

「ひーめっ？どしたの？」

しばらく凝視してしまっていたようだがベルに呼ばれて現実に戻る。

「なんでもないよ。さあ、さっさと潰してしまおう」

そうだ。あの研究所のものは皆殺しにしたはずだから私を知るものはないはず。

あの偉そうな人以外はいないはずだ。

それにこんな見つかりやすいところにエストラーネオのアジトがあるわけない。

私たちがいた研究所はもっとわかりずらくて、それにこれの何倍も大きさがあつた。

そこまで考えて、浅葱はしまっていた自分の羽を8枚取り出す。

大きさは30センチぐらいでそれを片手4枚で扇型のようにもつ。

けど袖で手は隠れているので袖から羽がでているように見える。

大鎌は長期戦には向かないというのがとVARRIAは暗殺部隊なのであんな大きい武器は

目立ってしまうのでよほど強い敵以外には羽を使うことにした。

狐姿のときの翼は羽を飛ばして攻撃できることからわかるように
飛ばした瞬間に

生えてくるので、取り放題 なのだ。

まあはやすのにも体力は削られるのだが。

そして研究所の壁をスパッと切り裂く。

ズウウウウン。

轟音が鳴るが煙も舞っているのでこの隙に研究所に入っていく。

ちなみに外に逃げる事ができないように幻覚をかけてあるので二人で中に入る。

でてくる敵を一瞬でたおしていくと敵が一人もでてこなくなった。

一応一つ一つの部屋をみていく。

そして最後に無駄に硬そうな、エストラーネオのアジトの実験室の扉ととても似て

いる扉にたどり着いた。

「ししっ。じゃあ行くぜ」

その声とともに今度はベルが扉を切り裂く。

煙が晴れると一つの人影があつた。

するとこちらに気づいたようで、「1206?」と声を発した。

それを聞いた瞬間に浅葱の表情が凍る。

標的12 トライウマの相手、来る！

「姫？大丈夫か？」

浅葱はベルの声も耳に入っていないようだった。

「なんで、生きてる、の？お前は、私の、目を弄くり回した、やつ。
あの時！

ちゃんと殺したはずだ！お前は突入部隊にいて、私はお前を見つけた！それで、

一番最初に鎌の先端で左目を潰したあとに、心臓を刺したはずだっ

「!

「ひひひ。わしは自分の体で実験をしてな、心臓を10個もっているのじゃよ、ひひひ」

「ちっ。これからは殺しのときは首を狩ることにするよ。まあ左目は潰せているみたい」

「だしいいとするけど、何でエストラネオの研究者がこんなところにいんだよ?」

といいなから浅葱は大鎌を創りだす。

これも袖で手が隠れているので袖が折れて掴んでいるように見える。

そして浅葱は男に一瞬で近づいて大鎌の刃を首に当てる。

「答えないと首を狩るよ」

「どうせ答えても殺すのじゃろっ…」

「いいから答えろ」

浅葱に声が低くなる、と同時に刃を1センチ横にずらす。

そして幻覚で男の体が燃やされていくように思わせる。

「ひ、ひひ。まってくれ。わかった。話す」

と男がいうと大鎌の刃はずさないが幻覚は解いてやる。

「わしはあの研究所の唯一の生き残りじゃった。わしはとにかく実験がしたかった。

しかしあのとときボスに報告すれば責任を取らされもう実験ができなくなるかも

しれないと考えて、逃げてこのファミリーにたどりついたのじゃ。
ここは禁弾の

開発を行っていた。だが全然進んでいなくてな。わしが知識を提供するといえは

丁重にもてなしてくれてな。ひひっ」

「エストラーネオのボスは、どこにいる？」

「ボスを殺しに行く気か？ひひっ。無駄じゃ。ボスは強いのじゃ。研究者のくせに

強い。頭の回転も速い。いくらわしらが作った化け物の1206でもかなわん

「じゃあいい」

「1206と呼ぶなっ！私には六道浅葱という名前があるんだっ！
いいから

場所を言えっ！」

と浅葱はいうとさらに1センチ大鎌の刃を首に刺した。

「ぐっ。ゴボッ。ボスの正確な居場所は知らん。報告だって電話で
行っただけだ。」

ただエストラネオの本部だ。相当大的い研究所であることは間違いないだろう。

これでわしの知っていることは全てだ」

「使えないやつ」

と浅葱は呟いて一気に大鎌を横に動かした。

「さ、べル。ここ燃やしちゃっちゃと帰るじっ。」

浅葱は笑っていた。

けれどもどこか無理をしているような、そんな笑顔だとベルは思った。

その後は浅葱が有幻覚の炎で研究所を燃やしてVARIIAのアジトに帰った。

その間は一言も話さなかった。

「ただいま」

「ただいまだし」

浅葱はアジトに戻るころにはもうすでにもとに戻っていた。

けれどそれが逆にベルの不安を煽った。

「ムム。今日は少し遅かったね。何かあったのかい？」

マーモンが痛いところをついてきた。

「んーん。ちょっと昔の知り合いにあったただけだよ」

そうだった浅葱の顔には影が差していた。

（ムム。何かあったようだね。あとでベルに聞くとするかな）

「それじゃあ私はもう寝るね。今日は夕飯いらないうってルツスにいいよ」

とって浅葱は部屋に戻っていった。

浅葱は部屋に戻ってからコートとブーツを脱いですぐにベッドにダイブした。

「あーあ。どーしょ。ベル皆に話しちゃうかなあ。あんなに取り乱

したの見られ

ちやった・・・。まあそれはいいとしても。エストラーネオのボスが
いるところ結局

わからなかったし・・・。あー！。ま、いつか。明日考えよう」

と独り言を呟いて3秒後にはもう寝ていた。

浅葱が部屋に戻ったあとのロビーにはマーモンとベルが残っていた。

「ベル。本当は何があったんだい？」

「昔浅葱に人体実験したっていうエストラーネオファミリーの研究員の生き残りが

いたんだよ」

「ムム。詳しく話してくれるかい？」

」
「あ

と
い
っ
て
ベルはあったことをマーマンに全部話した。

ベルが全てを語り終えた。

「ムム。そんなことが。これは報告書にも書いておいたほうがいいだろうね。」

今日の浅葱はかけないだろうから、ベル書いといてあげなよ」「

「わかってるし」

と喋ってベルは自分の部屋に戻って報告書を書いてスクアーロに提出したのであった。

標的13 憎悪の標的、来る！

翌日の夕方。

「おっはー
」

夕方にもかかわらずおはよう、といいながら浅葱がロビーに顔を見せた。

ロビーにはXANXUS以外の幹部が集まっていた。

「もしお母さんの時間じゃなると細しよ」

「まあいいじゃん。私は今さっき起きたんだし」

とらって浅葱はいつものように笑う。

いつものように言葉を発する。

いつものようにソファに座る。

ただ、最近では寝坊しなくなったのに今日は寝坊してきた。

違いは、それだけ。

でもそんなにも違う。

「姫、大丈夫か？」

「くふふ。何をいつてるの？大丈夫に決まってるじゃん」

「本当のことをいったらどうだい？」

そついつと浅葱は俯いた。

そして少したってから言葉を発した。

「みんなには、エストラーネオのことも話したからエストラーネオファミリーは

知ってるよね。それで、エストラーネオの本部の場所とかボスのことを

知ってる人、いない？」

「知ってどうするんだい？」

それに対して浅葱は「才とは思えない微笑を見せる。

「ぶっ壊す」

一言だけ囁く。

そのときの浅葱の眼には闇しかなかった。

その瞳を見てしまった他の幹部たちは本能的な恐怖で身を竦める。

「くふふ。知らないならまあいいよ。私のこの怒りはいつまでたっても消えは

しない。たとえ何年かかっても必ずあいつらは潰すんだから」

そう浅葱が言った途端にロビーに笑い声が響いた。

「ぶわーっはっはっは。ますます気に入ったぜ」

「それはどうも けど私にはそんなことよりエストラーネオのことが知りた「知ってるぜ」!？」

XANXUSが浅葱のセリフをさえぎって言葉を発する。

「俺は知ってる。エストラーネオの本部のありかも、ボスの正体もな」

「教えてよ、ボス」

浅葱が殺気を放ちながら言う。

そんなのにも動じずXANXUSは言い放つ。

「エストラーネオのボスはもとは非人道的なことのしすぎとして復讐者に最下層の

牢獄にとらわれていた。だがそこを抜け出し、今も復讐者の追跡を逃れ、人体実験を

しているというやつだ。そんなやつ居場所を知ってどうする？今のテーマじゃ勝ち目

なんてねえだろう？」

「それでも、私は！ムク兄を傷つけた、犬や千種を苦しめた、マフ
イアが！」

「エストラーネオが！許せないんだっ！」

「ふははっ。だうやらテメエの覚悟は本当のようだ。それにそいつ
を殺すことが

できたらV A R I Aの地位も上がるだろうしな。本部の研究所はア
ルプス山脈を

くりぬいて作つたらしいからアルプス山脈のどっかに入り口がある
んだろうな。

だが強力な幻術やら結界やらで守られてるらしい。だから正式な入
り口以外で

入るのはほぼ無理らしい。今行くのはテメエじゃ自殺行為だという
ことを

覚えておけ」

それだけ言ってXANXUSはロビーから出て行った。

「私に、どうしろってんだよ……」

そういった浅葱の頬には一筋の涙がこぼれていた。

それを見た皆は浅葱には話しかけられなかった。

そして浅葱は部屋に戻っていった。

翌日の夕方。

「おはよう」

今日も盛大な寝坊をした浅葱がロビーにやってきた。

今日はロビーにXANXUSも幹部も全員集まっていた。

「今日は昨日の話の結論を聞いてもらおうと思ってね。私はまだエストラネオの

本部を潰そうとはしないことにする。ここにいれば任務でマフィアを潰していけるし、

それに今行って、ボスの言うとおり負けるのも嫌だ。だからどうせなら圧倒的に

潰してやりたいからもっと強くなったら潰すことにする。心配かけたみたいで、

「じめんなさい……。だからこれからもよろしくね」

「当たり前だしっ　そんな時は手伝ってやるよ」

「ムム。そうだね。そのときは通常の半額でいいよ」

「ありがとう　お金は取るのかって質問はしないでおくよ」

「おい。なら早速任務だ。テメ工昨日今日さぼってただろ」

XANXUSが威圧感ある声でいう。

「あー。そうだった。寝坊もしてたしねー。んじゃあべル、任務早速行こうぜい」

「しししっ ああ」

そしてここ2週間で日常となった非日常的な日常が戻ってくる。

しかし今までと違う点が1つ。

浅葱は殺しるとき必ず首を狩って殺すようになった。

そしてついでに通り名は首狩り姫。プリンセス・ザ・アッシュ

標的14 揺りかご、来る！

V A R I A に浅葱が入ってから2ヶ月半ほどたった。

「ふあーあ。やっぱりちゃんと朝に起きるのは眠いなー。こればっかりは何日

たつても慣れない……。まあ今日は会議あるっばいから2度寝で
きないん

だよな。遅れたらスクアーロうるさいし……」

ぶつぶつと文句をいいながらも浅葱は会議室へと行く。

「では全員揃ったなあ。！これから重要な任務の話をするからよく聞いておけえ。」

という無駄にでかいスクアアーロの声で会議が始まる。

「ん？そいえばオツタビオはいーの？」

浅葱が同じ幹部のオッタビオがないことに気づく。

「今回の作戦にはオッタビオのやるうは反対的だったからなあ。
あいつはいいんだあ」

「ふーん。ざまあ、オッタビオ、仲間外れ」

と、浅葱は笑う。

浅葱はオツタビオが大嫌いなのだ。

初対面のときから浅葱はまだ子供なのだからうつんたらかんたらとうるさかった。

だからもう浅葱はオツタビオには話しかけられても総無視しているのだ。

「じゃあ話を進めるぞお。俺たちはある作戦を実行する。それは九代目暗殺だあ。」

沈黙が支配する。

「文句あるやつはいるかあ」

「なぜに？」

浅葱は質問する。

「んなもんXANXUSに聞けえ」

そういわれて浅葱はボスのほうを見るがボスは目をつぶって、話す気はさらさらしないようだ。

「まあいいや。私はボスについていくしかないしね」

「ししっ 俺もだ」

「僕もだよ」

「私もよう」

「無論俺もだ」

「よし、なら決まりだ。実行は明日。詳しい作戦は今からいう。し
っかり聞いておけえ」

その後は作戦をスクアーロが発表していった。

まとめると、スクアーロとボスで九代目暗殺。

レヴィは中庭の敵を排除。

ルツとベルは廊下の敵を排除。

マーモンは司令室を落とす。

そして私は狐姿になって霧を振りまいたあとに、自分の周りに集まってきたやつを

一通り殺したあとにボスとスクアアーロの加勢。

という感じだ。

この後は各々明日までしっかり休んでおくよつたということとで任務は無かった。

書類仕事はたくさん与えられたが・・・。

翌日、ボンゴレ本部。

きいいううううううおおおおおおおおおおんん

といつとても高い不思議で綺麗な音の狐姿の浅葱の鳴き声がこだま
する。

不思議な声を聞いたものが何だ何だと外にでてくる。

浅葱は大きく息を吸って、一気に吐き出す。

すると高濃度の霧があたりに充満する。

30センチ先も見えないほどだ。

きいいううううううおおおおおおおおおおおおんん

また浅葱は鳴く。

わざと敵に自分の居場所をわからせるために。

その思惑に乗って敵がぞろぞろと浅葱の周りにやってくる。

その際に他のV A R I A幹部は行動をしているのだ。

浅葱は九本の尻尾の先に長さ50センチほどの羽をそれぞれもつ。

それで周りのものの首を次々狩っていく。

「うわああー！無闇に近づくな！首を狩られるぞー！」

「首を狩られる！？プリンセス・ザ・アッシャー首狩り姫か！？」

「なんだと！ならなぜ我々に攻撃するのだ、うわー！」

声が響いていたが突然静まり返る。

浅葱が集まっていた周りの全てのものの首を狩ったからだ。

「むー。皆雑魚ばつかだったなー。数は多かったけど。1000人ぐらいいかな?でも

普通本部ならもっと数でてくると思ったんだけどなあ。まるでこんなところには

人数を裂けないような。といつかいつら皆首に鉄の防具的なのつけて斬られ

ないようにしてた。まあ鉄だろうが普通に切れるけど。むー。ま、いっか。さて、

ボスとスクアーロのところへ行きますか」

といい浅葱は走っていった。

そのころスクアーロは衝撃の事実を聞いて、驚愕していると今度は
XANXUSが氷づけに

されてどつすねばいいのかわからなくなっていた。

ガシヤアアアン。

その時派手な音とともに天井を突き破って狐姿の浅葱がやってきた。

スタツ。

あんなに派手に降りてきたにもかかわらず着地は完璧だった。

「ボスが、凍ってる・・・？」

浅葱の第一声はそれだった。

「君は、新しく入ったVARIIAの幹部の六道浅葱さんかな？」

九代目は浅葱が狐姿でも浅葱だと超直感できづいたようだ。

「そうです。ボスに何したのか教えてくれませんか？」

九代目なんて浅葱にとっちやあどつでもいいようなやつなので敬語で殺気も

全開にして話す。

「XANXUSは眠りについたのだ」

「そんなことは聞いていません。何をしたのかを聞いているんです」

「それを聞いても無駄だよ。この氷はもう溶けない」

「くふふ。溶けない？それはどの口がいつているのですか？」

とつと浅葱の左眼の文字が一になる。

そして尾の一本の先にもっている羽に有幻覚の炎をまとわせ、氷に向かって投げる。

すると炎をまとった羽が通ったところがあっさり溶ける。

「！？君は、一体。だけどその程度ではこの氷を溶かすことは叶わないよ。」

「どうやらその力を使うと相当疲れるようだね。だけど氷はこんなに大きいんだ」

九代目の言とおりであった。

浅葱は今の小さな有幻覚に相当力をこめたのであっさり溶けたがあれだけ力を

こめると体力の消費も尋常じゃないのだ。今までの戦いの分もあわせてもう

立っているのもやっとというところだろう。

「ちっ
「

ぐらり、と浅葱の体が傾く。

地面に倒れる直前で人型に戻る。

「ちっ
」

スクアードがそこで勢いよく飛び出し、浅葱を抱えて走り去っていき

その途中で通信機で他のものに連絡する。

「うおおおおい！聞こえてるかあ。作戦は失敗だ。今すぐアジトに戻るぞお」

と、切って通信を切った。

それから数十分たってアジトに幹部が全員揃った。

浅葱もスクアーロに抱えられて帰っているときに目を覚まして、狐姿で走ったほうが

早いからと、狐姿でスクアーロを乗せて帰ってきた。

「ボスはどうしたんだい？」

マーモンが聞く。

「氷づけにされたんだあ」

「それはどついでに何かしらあ？」

ルッスーリアが今度は質問する。

「それは今から説明するぞお」（XANXUSが九代目の実子じゃねえというの以外は

話すかあ）。それについてはまだ調べてえこともあるしなあ」（

スクアーロは自分が知ったXANXUSの秘密の片鱗以外についてはあったことを全て話した。

そこで本部のやつらがやってきた。

「独立暗殺部隊VARRIAの幹部の皆様方。今回のボンゴレ本部襲撃事件の容疑者

として来てもらいます」

そして浅葱たちは本部に拘束されて事情聴取を1週間にわたり受けて、V A R I A

アジトに戻ってきてまた1週間ほどたつて聞かされた報告は彼らの怒りを生み出す

ものであった。

『ボンゴレ独立暗殺部隊V A R I Aはこれから無期限活動停止処分とする。ただし

副隊長オツタビオのみはボンゴレ本部にて高地位でボンゴレに貢献してもらおうと

とする』

幹部でオツタビオだけ作戦に反対し参加しなかったこと。

オツタビオだけ昇進して活動停止じゃなかったこと。

それにスクアール口によれば襲撃が知らされていたかのように作戦当日はいつもより

ボスの警護が多かったらしい。

他にもおかしい点はいくつかあった。

これらからオツタビオにこの作戦が漏らされていたということを推測する

ことは容易にできた。

標的15 揺りかご後、来る！

結局なんでクーデターを起こしたのかはスクアーロとXANXUS、
九代目しか知らない

こととなった事件。

そして今日は無期限活動停止処分といいわたされてから1日たち、
幹部で会議が

開かれていた。

「とりあえずこれからどうするかだあ」

そして浅葱は昨日から考えていたことをいう。

「スクアール、私はエストラレーネオを潰すことにする。ボスの氷は私の有幻覚

なら溶かせるようだけど全然力が足りないだろ？だから他の方法が見つかるか、

私の力で溶かせるようになるかまではボスは復活できないんだから自由に

動かせてもらおうよ」

「う〱お〱お〱おい！だからV A R I Aは活動停止だつっつてんだろつがあ〱」

「じゃあスクアーロは言われたとおり何もせず待ってるの？それに私はV A R I A

として行くんじゃない。個人として潰しに行く。それにエストラーネオは有名じゃない

けど一部の人にとっては有名でね、皆から嫌われてる。潰せたら少しは信用回復するん

じゃないかな？あとエストラーネオは復讐者のリストにも入っているからたくさんいる

構成員をどれだけ殺そうが、大丈夫だよ」

「しっつ 俺は姫についてくぜ どうせなら何かやってたほづがい
いしな 何より姫を

守るのは王子の仕事だし」

「じゃあ僕もエストラーネオつぶし協力するよ。浅葱に死ぬ気の炎
を体内で生成する

力があることからそれを研究しているだろうからね。呪いを解くヒ
ントが見つかる

かもしれない」

ああ、そういえば幻覚を実体に行けるほどの高エネルギーの正体は死ぬ気の炎というらしい。

有幻覚の高エネルギーだけをだす、ということ挑戦してみてもマーモンにいわれ

やってみると藍色と黒色の混ざったような色の炎のようなものが大鎌の先に灯って、

マーモンにいわれたのだ。

「黒色はよくわからないけどこれは死ぬ気の炎だね」

と。

うまくはまだ使えないが死ぬ気の炎というものはそれ単体でも強力らしいので今それを

使えるようになるための特訓もしている。

「俺はボスがどうなっているのかを調べ、そしてボスが戻ってきたときお役に立てる

「うづらに強くなることだし、」

「じゃあ私は隊員たちをここで鍛えてるわねい。ここにいらからいつでも戻って」

「きてもいいのよう」

「じゃあ。俺は調べ物がある。それに俺ももっと強くなるよう修行することにするぞお」

そして幹部たちのこれからが決まった。

今言ったこと意外のことをするときにはちゃんと報告すること。

あと定期的にスクアール口に報告もすること。

そして拠点は相変わらずVARIAのアジトで防御はルツスーリアにまかせる、

という事になった。

今は会議が終わり、ロビーにてマーモンとベルと、まずはどうするかを話している。

「まずはやっぱりエストラネオの本部があるっていうアルプス山脈行ってみようよ？」

それでマーモンの能力で探ればアジトも見つかるよね、多分」

「別料金をもらつよ」

「今回はマーモンもアルコバレーノの呪いだかいつのを解くヒント
見つけに私たちと」

行くことにしたんでしょ？なら自主的、ということでも無料でいいじ
ゃん」

「ムム。今回だけだよ」

「ベルもこれでいい?」

「いいぜ」

「ん。じゃあアルプスは寒そうだから防寒具もって、一時間後にここ集合ね」

「わかったし」

「わかったよ」

そういつてとりあえず浅葱たちは別れた。

一時間後、ロビー。

浅葱たちは各々防寒具、といってもマフラーをもってきてる、とか
だけが、

の準備を済ませロビーに集合していた。

浅葱はいつもの隊服の格好に藍色の地面にまで着くんじゃないか、
とつぶよぶの

長さのマフラーがプラスされている。

帽子は浅葱の隊服にかぶれば顔がすっぽりと隠れるぐらいの大きさ

のものが

ついでるので必要ない。

ベルは赤色のマフラーがプラスされているだけだ。

マーモンは、何も変わっているようには見えなかった。

あとベルと浅葱は黒いトランクを持っている。

マーモンの荷物はベルと浅葱に分担している。

「浅葱、スクアードに出発するって言うてきたかい？」

スクアードは現在調べ物とやらをしていて、資料室などにこもっているのだ。

「うん。報告してきたよ。最低でも一日一回携帯で報告しろってよ」

「じじじっ。じゃあ早速行こうぜ」

「うん アルプス山脈へレッツゴー」

その後浅葱たちは電車などを乗り継いでアルプス山脈にたどりついた。

今はアルプス山脈の人気のないところを進んで山の中腹あたりだ。

先頭は浅葱が歩いている。

昔エストラーネオにいたのだから、アジトの場所の検討がつくかもしれない、

という理由でだ。

「んじゃあ早速粘写頼むよ、マーモン」

「わかったよ」

ブーーーーッ。

といつ見ても汚いが役に立つ能力をマーモンは使う。

「ムム。早速あたりだね。浅葱はアジトの正確な場所は知っていたのかい？」

「知らないよ」

「じゃあこれはすごいね。そこの大木を殴ってごらん」

「うん」

浅葱がいわれた大木を思いっきり殴る。

すると地面がぱっくりと割れて、地下への階段がでてくる。

「すっげー。さっすが姫」

「おおー。すっげー」

浅葱はびっくりして声もでないようだ。

「とりあえずスクアーロにいったん報告してから内部に入ろう」

そういったマーモンの声に2人はうなずいて、もう一度大木を殴って階段を

しまわせて、そこから離れていった。

標的16 エストラーネオ本部、来る！

エストラーネオのアジトへの入り口を見つけた浅葱たちはとりあえずその場から

離れて、近くにあった洞穴にいき、スクアーロにこれからエストラーネオ本部

へと乗り込むことを告げた。

「じゃあ一応の作戦を発表します とりあえず今から行くエストラーネオの研究所の

中にいる白衣とかスーツとかちゃんとした服着たやつら全部皆殺し
でいいから」

「要するに実験体は殺すな、ってーこと？ 姫が皆殺しにしないなんて珍しいじゃん」

「うん。頼んでも、いい？」

そういった浅葱はとても儂く、今にも消えてしまいそうに笑った。

それを見たマーモンとベルは何もいえなくなる。

「姫の頼みきくのは王子の役割だしな」

「わかったよ。でも救出はしなくてもいいんだね？」

「うん。研究所ぐらい自分で脱出できなかったらこれから生きていけないよ」

「そうかい。じゃあ実験体以外は全て殺すよ」

「うん。マーモンは呪いを解く手がかりを探しにきたんだよね？
じゃあ別行動？」

「うん。研究所に入ったらそうさせてもらおうよ」

「わかった。じゃあベル、さっき見栄はって作戦発表します、とか
いったけど実際は

ないんだ。だから行き当たりばったりでいい？」

「しっしっ 姫らしいな 姫がいいならいいぜ」

「ん。じゃあ早速行こう。我らエストラーネオ研究所襲撃隊出撃！
命令は

ただ一つ！死ぬな！みたいな
」

そんな浅葱の悪ふざけとともに浅葱たちは洞穴をでて研究所の入り口へと向かった。

今浅葱は研究所内の禁弾保存庫にいた。

目的は浅葱が憑依弾を絶対に持ち帰ってやる！と思っていたので探しているのだ。

そんなの最後にやれ、と思うだろうがそうはいってられないのだ。

先ほど浅葱とベルは偶然この研究所内の全体地図を拾った。

その大きさが絶望的だったのだ。

なので実験体の牢の鍵だけははずしてやって外に出、研究所を全て爆破してしまう

ことにしたのだ。

マーモンもきつと浅葱とベルがそんな小細工をしている間に用はすむだろうと思う

し、マーモンにもそれはもう通信機で伝えて了承を得ているので爆破することだ

したのだ。

そして研究所内にあった爆弾を設置させるためにベルと浅葱は別行動で効率よく

動いているはずなのだが。

爆破してしまったら憑依弾が手に入らなくなるので今浅葱は探しているのだ。

ちなみに憑依弾は禁弾というだけあり、ばれたらやばい、と浅葱は

学んだので誰にも

言っていないので即見つけなければいけないため、猛スピードで探している。

「あつたっ！」

そうだった浅葱の手には銃弾が2つ握られていた。

「あとはこれをしまつて、爆弾しかけて、終わりっつと」

浅葱は禁弾保存庫にも爆弾をしかけて次のしかける場所に向かい走っていった。

10分ほどたったころ、入り口には浅葱、ベル、マーモンが集まっていた。

「んじゃあ爆破3秒前2、1、」

ポチッ。

浅葱が何かのリモコンのようなものを押す。

ズドオオオンン。

と低い音が鳴り響く。

奇跡的というかエストラーネオのアジトは全崩壊したらしいがアルプス山脈は無事だった。

ちなみに実験体たちは鍵は開けてきてあげたので、生に執着のあるやつは生きるだろう。

「あ、そいえばマーモン。手がかりはあったの？」

浅葱はふと疑問に思ったことを聞く。

「いや。死ぬ気の炎とかについては結構研究していたみたいだけど、アルコバレーノ

の呪いについては全くといっていいほど無かったよ。それよりもその浅葱の首に

巻きついてるフェレットみたいな生き物は何なんだい？」

浅葱の首にはこの研究所に来る前はいなかったはずの藍色の毛並みのフェレットがいた。

「ああ、この子も実験体だったんだけど、鍵を開けてあげたらこの子だけは

ついてきちゃってね。この子の能力も使えそうだから、まあいいかなあと

思っで連れてきた」

「能力？」

「うん。この子は耳がとってもいいんだ。1キロ圏内なら針が落ちる音も

見分けられるし、わずかな声のちがいも、鼓動さえも聞き分けられる。そして

声帯もすごくてね。通信機が出す波長を声でだすことができるし、感じ取ったりも

できる。要するに生きた通信機でね。できることはこれだけで戦闘はできないけど

役にたつでしょ」

「へえ。それはすごいね。でもいくら聞き分けられたりしたとしてもそれを

「どうやって人に伝えるんだい？」

「それについては大丈夫。私が言葉を理解できるから。それはなぜか、といわれれば

この子の精神が私と共鳴できるからさ。この子は精神世界に私やムク兄がいる

奥底にはこれないけど浅いところならこれるんだ。だからだよ」

「すげーいじゃん。やっぱり姫もそのフェレットも。名前はねえの？」

「あー。名前……。浅葱のフヘレット……。アサット」

（まんまじゃん！）

このときベルとマーモンの考えたことが一致した。

「さて、早速だけどアサット。周りに生きているものはいるかい？」

「おや、」

と鳴いてアサットは耳をぴく、と動かす。

「やまをおろしていくのがひゃくてーど。それにこのちかくにひつら
らる」

「！？ベル、マーモン周りに気配って」

と
い
っ
た
瞬
間
に
三
人
の
心
臓
め
が
け
て
何
か
が
飛
ん
で
き
た
。

標的17 待ち焦がれた標的、来る！

とっさに三人は飛んできたものをよける。

「ムム。木の枝、かい？」

そう。

マーモンが言うとおり飛んできたものはただの木の枝だった。

「どーゆーつもり？ちやっさちやっさと答えてよ」

ベルが言う。

しかし相手は姿を見せずに、ベルの質問にも答えなかった。

「やあ。久しぶりだね、1206。覚えているかな？君に君の能力の説明をしたものだよ」

とって相手は姿を現す。

いかにもえらそうな服装にたたずまい。

そしてそんないかにも建前な笑顔を顔にはりつけていなければ結構いいほつである顔。

それは浅葱にとって見覚えのある姿だった。

「あ、あの時のえらそうなやつ」

・・・。

あたりを沈黙が襲う。

シリアス雰囲気をよくもまあこんなに綺麗に潰せるものだ、とこの場にいた浅葱以外は

思っていた。

「まあ覚えているだけよしとしようか。とりあえず僕の自己紹介だね。僕は

エストラーネオファミリーボス、エス・トラーネというものだ」

「1206、君につ」私は1206じゃない！六道浅葱だ！」

浅葱は相手のせりふをさえぎって言う。

「六道浅葱？ああ、あの片割れとでも一緒に考えたのか。まあそんなことはいい。1206」

そう呼ばれ浅葱は顔を歪める。

もう諦めたようだ。

それに浅葱は考えたら自分の大事な片割れにもらった大事な名前をこんなやつに

呼ばれたくない、と思ったのかもしれない。

「何ですか？」

浅葱は敬語で答える。

「君にはあのとき僕じきじきに説明に行った。そしてその力の開発もほぼ僕が

設計したようなものなんだよ。つまり今の君は僕が作った。なのにこんなことを、

エストラーネのただの研究所だけでなく本部もこんな目にしてただ済むと

思ってるのかい？」

その瞬間に相手の顔から作り物の笑顔が消える。

ゾクッ。

浅葱の闇しかない瞳を見たときには及ばないが本能的な恐怖。

浅葱もそれに聞かない瞳で返す。

「思っていないですよ？だって私はエストラーネオのボスを殺してエストラーネオを

潰すことが目的で来たのだから」

「へえ。標的相手によくそんなこと堂々といえるね。よほど神経が
図太いのかな？」

「今から死ぬものに教えて何が悪いんです？それにエストラーネオは本部も

もう潰したんです。あとは貴方を殺したらそれで終わりですよ」

そついいながら浅葱は大鎌を有幻覚で創りだす。

それに対してエストラーネオのボスは二本の短刀を抜く。

紅と黒の二色で統一された刀で刃にも柄が入っている。

「アサット、君はベルのところに行って」

浅葱は小声で告げる。

それでもアサットには十分聞こえたので浅葱の肩を降りて、ベルの肩に乗る。

「しっ
ーの？こいつ戦闘できなくても足手まといにはならね
ーだろ？」

「うん。こいつだけは私がこの手で殺しつくしてやらないと気がすまないからさ」

「アサット預かっててくれる？」

「姫がそういうならいいぜ」

「ありがとう」

浅葱はベルに向けて満面の笑みを見せる。

「／＼ ししっ そんなんどうってことねーし いっていい。絶対勝てよ」

「そうだね。まだ前にツケにしたコーヒ―牛乳代もらってないんだ。勝ちだよ」

「うん ありがとう。いってくる」

その言葉と同時に浅葱は大鎌を振りかぶって跳び出す。

そして振り下ろす、が、短刀で防がれる。

「こんなもので僕を殺せると思うの？1206は失敗作だったかなあ。」

僕が作ったのに失敗するなんて……。いやあ、ビックリ」

ブチッ。

「私は貴方なんかで作られたんじゃない！それに失敗作でもない！」

とって浅葱は大鎌の力を一端抜き、相手がよろめいたところに回し蹴りを放つ。

ドカッ。

「ぐっ」

「くふふ。失敗はお前だ。人間としても、戦闘にしても。その短刀はめっちゃ

切れるようだけど、貴方はそれに頼りきっている。エストラーネオの他のものは

ボスは戦闘もできる、とかいってたけどそれは貴方の持ち前の頭のよさで

騙していただけなんだろう？要するにただ頭がいいだけで他が全くできないやつ

なんだろう？」

「う、ぐっ。それがどうした！この世は頭だ！それに僕は戦闘だつてできる！

そのためのものを僕はたくさん作ったんだ！」

と、いったエストラーネオのボスは何かのボタンをポチツ、押した。

標的18 殺戮機械、来る！

エストラーネオのボスがポチッ、と何かのボタンを押すとズゴゴゴゴ、と低い

地鳴りのような音が響いた。

そして次にドドドンッ、と銃声が鳴る。

浅葱はとっさに横にはねる。

次の瞬間、浅葱がいたところに数発の銃弾が打ち込まれる。

「ちっ。はずしたか。まあいい。こいつを出したことでもう僕の勝ちが決まって

いるのだから！」

というと、浅葱の数メートル前に人型、といえなくもない鉄の塊が降り立った。

「何ですか、これは？」

「これは僕が作った中でも一番強い殺戮機械、そうだな、モスカ、
とでも名づけようか」

「一番強い殺戮機械、ですか。ならこれを壊せば、あなたはもう打
つ手がなく

なる、という事ですね」

「壊せるはずないだろう？この僕の一大傑作が！」

「それは、どうでしょうねえ」

といつて浅葱は妖しく嗤う。

モスカが猛スピードで飛んでくるのに対して浅葱は大鎌を構えもせずにとただ、

一歩前に動いた。

ガシャアアアン。

次の瞬間、轟音が響きわたった。

エストラーネオのボスの驚愕の音が響く。

「な、馬鹿な。一瞬で、真っ二つ、だと？」

そこには縦に真っ二つに切られたモスカと、大鎌を振りぬいた状態の浅葱がいた。

その大鎌の刃には、わずかに藍色と黒色の炎が宿っていた。

「くふふふ。あとはあなただけ、ですよ？」

「う、わあああ。殺さないでくれ！頼む、命だけは！」

エストラーネオのボスは無様に浅葱に土下座する。

「どの口がそんなことをいうのですか？実験体がやめてくれ、と命が尽きるまで」

叫ぶのも全て無視してきたくせに」

と、浅葱は躊躇なく男の首を狩った。

そして浅葱はエストラーネオのボスが使っていた短刀二本を捨てる。

「うわー。かっけー。よし。これは私が使ってる」

と、浅葱は短剣二本をコートのポケットにしまった。

そして浅葱は何事も無かったかのようにベルとマーモンに言った。

「おめ、帰るじ」

浅葱はそういつて晴れやかな笑みを見せた。

浅葱たちはエストラーネオを潰してアジトに帰っている途中だった。

浅葱はそのときどうやって憑依弾を骸に渡すかを考えていた。

離れていてもお互いの気配はいつでもわかるので気配をたどっていかうか、

と浅葱は考えていた。

でも実際は骸に頭の中で話しかけて待ち合わせすればいい話なのだが浅葱にも意地が

あるのでそれはしない。

浅葱や骸はいつまでナッポーとかチビといわれたことを怒るのだろうか。

「む。ムク兄が謝ってくればすぐに許すのに・・・」

浅葱は呟いた。

マーモンやベルには聞こえていないようだった。

（よし、決めた。ムク兄が謝ってくるまでもう絶対精神世界でもあつてやらない。

あと、憑依弾はまあ、行き当たりばったりにしよう（

と、浅葱は考えながらもアジトにベルとマーモン、浅葱はついたのであった。

標的19 意地っぱりの2人、来る！

揺りかごから3年たち、浅葱が10才になったある日のこと。

浅葱は今日はふらふらとヨーロッパのとある町を一人で旅行していた。

「うー。何しようかなー」

と呟きながら歩いていると、ふと見覚えのある人影が2つ路地裏へと入っていった。

「犬と、千種？」

浅葱は2人が入っていった路地裏へと向かった。

路地裏にいたのはやはり犬と千種だった。

「犬 千種」

犬と千種とわかった途端に抱きつく浅葱。

「うっ。浅葱さん!？」

「・・・浅葱、様？」

「うん。そーだよー 久しぶりだねっ
」

そっついながら浅葱は2人から離れる。

「お久しぶりだびょん」

「・・・お久しぶりです」

「うん。ところでムク兄は？」

それに答えたのは千種だった。

「・・・今はあるマフィアに潜入しています。なので今あつことはできません。」

そして浅葱様にあつたらこれを渡すように、といわれました・・・」

そういつて千種が差し出してきたのは三叉の槍の先端。

「骸様は、浅葱様とのつながりを持っていると、いつか頼りきりになりそうぞ」

怖いので一度つながりはあっても感じられないようにしないか、と
いつていました」

「ああ、なるほど。ムク兄は今マフィアを潰す目処がたったのかな
？だから、」

人に頼らないようにこんなことを言い出すのか」

「そうです。あとこつも言っていました。つながりは次現実であったときに

元に戻そう。それまでは精神世界でも会わない。そしてそのときまでに

どちらがよりたくさんのマフィアを潰しているか勝負しよう」と

それを聞いて浅葱は三叉の槍を腕に突き刺す。

「ムク兄は本気のようなからね。叶えてあげるさ。これでつながりを感じ取ることが

あまりできなくなった。あくまでもあまり、だけどね」

そうだった浅葱の顔は少し寂しそうだった。

すると三又の槍は碎け散った。

「じゃあ、次ムク兄に会うときまでにたくさん潰しておかないとね。あと、

「これをムク兄に渡しといてくれる？」

そういつて浅葱は憑依弾を1つ取り出す。

「わかったびよん」

「・・・わかりました」

「じんじゃあまろしくね」

と行って浅葱は犬と千種から離れて郊外の森へと歩いていく。

人気が全くといっていいほどない深い森の中。

そこには声をかみ殺しているが殺しきれていない泣き声が響いていた。

「うっ。ひっく。ぐす。今更、泣いたって、仕方ない、よね……。
ムク兄

から謝るまで仲直りしない、って決めたのは自分だし。それも多分
ムク兄に

伝わってるよな……。てゆーかつながりを感じられなく、ってい
っても

場所とか相手の気配はわかんないとしても感情とかかすかに伝わっ
てくる

じゃないか……。ぐす」

そして浅葱は残った憑依弾を取り出す。

「そいえば、まだこれ使ってなかったな」

と、浅葱は憑依弾を有幻覚の銃にセットして自分のこめかみにあてる。

そして躊躇なく引き金を引く。

ズガンッ。

森に銃声が響き渡った。

ドサッ。

浅葱はその場に倒れる。

その数秒後、むくり、と起き上がる。

「うー。契約の媒介は、大鎌でいつか。これで相手に憑依できる、と。んじゃま

契約はいつか誰かとするとして、犬と千種とかは、今度あったときでいつか」

そういつって浅葱は立ち上がり、歩き始める。

「キーンと、とりあえずアジトに戻ろっ」と

そう呟き浅葱はアジトへ向かって枝から枝へと跳んでいった。

枝から枝へ飛んでいると1人の男が現れた。

鉄の帽子をかぶっていた。

浅葱は男の一步手前の枝でとまる。

すると男が話しかけてきた。

手のひらの漆黒のおしゃぶりを見せながら。

「突然ですがあなたにはアルコバレーノになってもらいます。六道
浅葱さん」

「は？」

間抜けな声が浅葱からでるがそんなこと無視して男の手の上のおし
やぶりが光った。

光が収まると浅葱の姿が少し変わっていた。

耳が少し尖り、犬歯が鋭く伸び、手の爪が鋭く5センチほどに伸びていた。

浅葱はそれに気づいてまず爪を切ってみたが即座に生えて元通りになった。

「驚いているようですな」

「当たり前だ。これは幻覚じゃない。何をした？」

浅葱は男に聞く。

「初めに言ったでしょう？あなたにアルコバレーノになってもらうと。」

そのために虹の呪いを受けてもらったのです。普通なら赤ん坊の姿になる

のですが、あなたの場合、その身に宿っている瞳と狐の姿と反応してその

ような微妙な姿変化と、おそらくそれ以上成長しない、という呪いに

なったようですね」

「成長しない！？これ以上身長が伸びないということか！？？」

「ええ」

ブチ。

「呪いを解け！」

「駄目です。もうあなたはアルコバレーノとなった。おしゃぶりを
守るために

おしゃぶりと同化したのです」

それを聞いて浅葱は黙る。

「それではアルコバレーノの説明と行きましょうか。ほとんどは知識として

入っているはずですが、一応ね。まず大空の九属性、というものがあります。

大空、嵐、雨、雷、晴、雲、霧、無、創の九つです。無と創は天候ではない

ですが全てのものは初めは無でありそして全ては創造される、という事で

九属性に入っています」

「私は、無の属性か？」

「よくわかりですね。まあ当たり前ですか？あなたが無に選ばれた理由、

それもわかっているのでしょうか？」

浅葱は沈黙で答える。

「まあ話しておきましょう。理由は簡単、あなたは無に相応しいからです。」

あなたは無でできている。どんなに大事なものが目の前で死んでも、目の前で

何が起きても、あなたは「ま、いっか」で済ませられる。要するにあなたには

何も無いのでしょうか？」

それを聞いて浅葱は顔を歪める。

「違う！私は、ムク兄はベルが目の前で死んだら「ま、いつか」なんて

済ませられない！」

「死んだら、でしょっ？とにかくあなたはどこまでいっても無くなんですよ」

とって男は漆黒のおしゃぶりを浅葱に投げ渡す。

「とにかくあなたはもうアルコバレーノだ。それは私に目をつけられた時点で

決まったことだ。アルコバレーノの使命、きちんと果たせ。おしゃぶりを守るのだ」

浅葱は男が去った後ぼー、っとしていた。

そしてしばらくたつと「ま、済んだこと考えても仕方ないか」と
いって立ち直り、

おしゃぶりにちょうど持っていた藍色の紐を通し、首から提げた。

そしてまたアジトに向かって枝から枝へと跳んでいく。

「さて、と。アジトに戻ったら皆に言わないとなあ。特にマーモンはアルコバレーノだし」

標的20 封印の鎖、来る！（前書き）

すいません。

XANXUS氷漬けのはずなのにできてきました。

それを直しました。

本当すんませんでした。

標的20 封印の鎖、来る！

浅葱はアジトに戻ると誰にも変わった姿を見られないように幻覚で姿を消して

自分の部屋まで行った。

部屋に入ると出かけるときおいていったアサットが瞬間に飛びついてきた。

「おいていっていいんや」

とって浅葱はアサットの頭をなでる。

そして幹部とボスを緊急とって自分の部屋に集めた。

集まったマーモンの鎖で巻かれたおしゃぶりは他のアルコバレーノに近づいたときには

輝くはずだが今も同様に微弱だが輝いていた。

「うおおおおい！自分から呼んどいて何で本人がいねーんだあ！！！」

相変わらずつるさいスクアーロの声が響く。

「あー。相変わらずつるさいなー」

「その姿と漆黒のおしゃぶりはどういうことだい？僕の頭に無のア
ルコバレーノが」

新しくできた、という情報は入ってきたけど何があったのか話して
もらえるかい？」

マーモンが一番に聞いてきた。

「くふふ。それを今から話すのね」

と行って浅葱は今まであったことを全て話した。

ただし憑依弾や犬、千種のことは一切話さずに。

浅葱が話し終わると皆驚きで声がでないようだった。

同じアルコバレーノのマーモンでさえ驚いている。

「じゃあ浅葱も呪いは解きたいということでもいいのかい？」

「当たり前だろ？だってこれ以上身長が伸びなかったら次にあつたときムク兄に

何ていわれるか……」

「ムク兄……？浅葱の話によく出てくるね。誰なんだい？」

「ん？ああ、話してなかったね。ムク兄とは私の双子の兄にしてナツポー星から来た」

王子だよ」

浅葱は一応聞いてみる。

「んな訳ねーし」

「そっよお」

「当たり前だあ」

などと答えが返ってくる。

浅葱はこの答えはなんとなく予想していたとはいえ、うれしかった。

「ありがとう。これで話は終わりだよ。集まってくれてありがとう。」

と浅葱が言うと、皆各自の部屋へと戻っていった。

けどマーモンは最後まで残った。

「どっかした？」

「それをあげようって思ってた」

と言ってマーモンが渡してきたのはマーモンのおしゃぶりに巻かれています

同じ鎖だった。

「これは？」

「おしゃぶりの力を封印するための鎖だよ。まだ完全じゃないから
全ては封印できないし」

アルコバレーノ同士が近づいたときに光ることもまだ完全に防げな
いけどね」

「ありがとう」

とって浅葱は早速巻きつけてみる。

すると浅葱の体に起こっていたわずかな変化が全てもとに戻った。

「おお、すごいね、これ。呪いの本質のこれ以上成長しないって
うのは

直りそうもないけど……。ま、これからはその研究私も手伝って
いい？」

「もちろんだよ。こちらからも頼むよ」

と、いってマーモンは部屋から出て行った。

オリキャラ設定2(原作以降編)(前書き)

設定です。

読まなくても大丈夫、だと思えます。

身長・体重のところ少し補足しました。補足しただけで他は変わってないです。
すみません。

オリキャラ設定2(原作以降編)

：名前：

六道浅葱ろくどうあさぎ

：性別：

女

：血縁関係：

骸と双子の妹

：年齢：

骸と同じ15才(6月9日になるまでは14才)

：誕生日：

骸と同じ6月9日

：過去：

エストラーネオファミリーにて人体実験を受ける。それで骸の右目のあの六つてかいてある瞳を左目に移植される。骸より少し前に。その左目の力を基盤にして形状記憶カメレオンのDNAを改造した力をいれられる。

その後骸とともにエストラーネオファミリーを壊す。

10才のとき鉄の帽子の男に無のアルコバレーノにされる。

：見た目：

骸と同じ髪型と眼。しかし六とかかれた眼は左で青い眼は右で骸と反対。あと髪の毛の長さは腰ぐらいで少し癖があるがサラサラ。世間でいう美少女で骸と瓜二つ。

・身長：

156cm（普通に成長していた場合であって今はアルコバレーノの呪いで成長しなくなってるので130センチ）

・体重：

36kg（普通に成長していた場合であって今はアルコバレーノの呪いで成長しなくなってるので19キロ）

・戦闘能力：

・骸と同じあの六道輪廻の力。ただし浅葱はそれを基盤に形状記憶カメレオンのDNAを無理やりいれられているのでほぼ骸より弱い。ただし地獄道の幻覚能力は同等。

・形状記憶カメレオンのDNAを改造した力。まとめれば天使の翼のようだが、漆黒の羽の翼をもち、藍色の毛並みをもつ妖狐の姿になることができるというのになれる。ただし翼は一枚一枚が鋼鉄より硬く薄い。ようするに切れやすい。大きさは獄寺の匣兵器の瓜が大きくなったやつより少し大きくて一人一人のせられるぐらい。一部変化はできない。妖狐の力としてDNAにプログラムされた能力は羽を飛ばす、吐く息は霧、幻覚を作れる、死ぬ気の炎を体内で生成できる（属性は霧と無）というもの。プログラムはもう書き換えはできない。

・アルコバレーノの力。

・戦闘能力まとめ：

六道輪廻 地獄道以外は多少しか使えない。地獄道のみ骸と同等。

身体能力 形状記憶カメレオンのDNA改造体をつめこめれたため骸より高い。

10メートルぐらいなら跳躍できる。

幻覚能力 地獄道と妖狐の力とあわさって骸より上。有幻覚は大鎌なら1時間ぐらい、火柱とかばんばん使ったら1分もつぐらい。知能 骸のほうが上。

妖狐状態 身体能力とかが上がる。

：その他能力：

・精神世界にいける。

・憑依弾を自分にうつたのでその力を使える。

：性格：

ほぼ骸と同じ。ただしDNAを埋めこめられたときに破壊衝動もついてきたので少し骸より残忍なところもある。

：一人称：

私

：口調：

骸みたいにも敬語ではなく信用できないやつの前だけ敬語。信用できるやつの前では適当な感じ。

：武器：

・三叉鎌（骸の武器の棒の先つちよに棒と直角に三叉の長い爪みたいなのがついてる。三叉の爪のさきつちよは少し持ち手側に曲がってる。）

有幻覚でつくってるのでいつももっていない。

・緊急用に自分の有幻覚で作ったのではない短剣を二本を持ち歩いている。というか大体二本の短剣を使う。三叉鎌なんてほぼ使わない。ちなみにその短剣はエストラネオのボスが持っていたものを盗ってきた。めっちゃ切れ味がいい。見た目は一本は漆黒の柄に真紅の刀身で、柄には真紅で刀身には漆黒で波のような模様がはいっ

ている。もう一本は色が真紅と漆黒が反対になったようなもの。鏝はない。そしてこの短剣はヘルリングと同じくいわくつきで死神が作ったといわれ、ヘルリングと共鳴する。浅葱はこの短剣を「かっこいいから」という理由で気に入っている。

この短剣二本と浅葱の狐姿の挿絵はオリキャラ設定原作以前編を見てください。

標的21 並盛、来る！

エストラーネオを潰し、浅葱がアルコバレーノになってから4年たったある日のこと。

「あー。ベル。暇。これ以上マフィア潰して復讐者が来てももう

渡す情報が無いしさー。呪いの研究も一区切りついちゃったし」

そうだった浅葱の姿は4年前と何も変わっていなかった。

しかし首には4年前より改良されて、アルコバレーノに近づいても
光らなくなる

ようになった鎖がおしゃぶりに巻き付いている。

「俺だって暇だし」

V A R I A のアジトのロボーのソファで2人はだらけていた。

「だってさー。修行とかもあるけど実戦ないしさあー。マジで暇」

「俺にいうなっつもの。俺だって暇なんだし」

まさにぐでー、という効果音が似合う今の2人。

そこに浅葱がいきなり声を上げる。

「あ そいえばさ日本にもボス候補いるつってたじゃん？九代目のクソジジ」

とか門外顧問のオッサンが支持してるっつー。まさにいらないやっ

「あー。ボスが戻ってきたら殺すやつな。今は氷は姫が溶かせるけど閉じ込められ

てるところがどこかもわからないしなー。それがどうかした？」

「そいつに会いに行っつよ」

浅葱は心底楽しそうな表情で言う。

「は？」

それに対してベルは訳がわからないという表情をする。

「だってさー。暇つぶしにもなるし、一応候補なんだから強いかもしれないよ？」

「ししっ　まーな。でもスクアーロ許してくれると思うか？」

「フッ。そこはうまく騙せばいいのね」

「ししっ　じゃあ行くか」

「うん　私がスクアーロには旅行くっついていくるめとくからベルは荷物とか準備して

部屋で待ってて。私も準備終わったら呼びに行くから」

スクアーロの部屋の扉をノックも無しに浅葱は開ける。

「スクアーロー。私とベルこれから日本に遊びに行ってくるねー」

スクアーロはいきなり来て突然言われたので数秒停止したが。

「う〱お〱お〱おい！てめえのことだあ〱何かたくらんでんじや
ねえだろうなあ〱！！！」

「相変わらずづるさいね。何をいつてるんだい？私は何にも一つも
ひとかけらも

たくらんでないさ
」

そういつて浅葱は妖しく嗤う。

「うお、い！絶対何かたくらんでんだろーがあ」

「何もたくらんでなどいないといってるじゃん。ただの遊びだよ。ひっこいと」

嫌われるよー」

「チツ。何かあったら連絡入れろお」

「オッケー　じゃーね」

と行って浅葱はスクアーロの部屋を出て行った。

それから浅葱は部屋に戻って準備をして、ベルを呼んで空港に向かった。

服装はいつもの隊服だとVARIIAとばれてしまうので隊服はトラ

ソクに一着入れている

だけで着ずに私服を着ている。

といっても大して変わらない。

浅葱はいつもの隊服からコートを取って、上からフードつきのだぼだぼ藍色パーカーを前

開けて着ているだけだ。

おしゃぶりが見えないうちに薄地の藍色の長いマフラーをしている。

そしてパーカーで見えない位置にルツスに作ってもらった短刀を装着できる

ベルトをつけて、そこに短刀二本を装着している。

あと六と書かれている瞳を見て怪しまれて行動しづらくなるのも嫌なので

左目に赤色のカラコンをつけてごまかそうとしたのだが六の文字は透けて

見えてしまったので藍色の眼帯をしている。

ベルはいつもの隊服からコートを取って、ズボンも普通のそこまで高そうじゃない

黒ズボンになっただけだ。

荷物はどちらもそこまで大きくないトランクが1つずつだけだ。

そして今は日本行き of 飛行機の中。

「ベルー。そいえば家とかの手続き全くしてなかったさ」

それにベルは飲んでいたジュースを吹き出しそうになる。

「げほっ。マジか」

「うん まあついたら何とかなるっしょ。戸籍は一応金払って作ってもらってるし。」

「その他の転入手続きとかもま、何とかなるっしょ」

「転入？」

「うん 沢田綱吉というもう1人のボス候補が通ってる中学校だよ。ついでに」

そいつは今2年生になったばかり。今は5月だからね。それで私たちは戸籍で

実際より2才若くしてもらってるから。だから転入したら私が中2、ベルが

中3だから。それで一応兄妹設定だから」

「ふーん。わかったぜ」

「ん。じゃあ私は寝るけど日本についたら起こしてね」

と、いって浅葱は寝た。

1時間後。

ぱち、と浅葱が目を覚ますとすでに飛行機は着陸態勢だった。

「わーお。寝たらイタリアから日本なんて一瞬だね」

「お、起きたか、姫 おはよ」

「うん おはよう」

浅葱とベルは飛行機から降りるとまずバスとか色々使って沢田綱吉がいるという

並盛町にやってきた。

ちなみに来る途中で通った黒曜センターでは、浅葱が「ここ住めそ

うだよ ーこ

住もうよ」「、といったのだがベルに猛反対されたので渋々浅葱は諦めた、

ということがあったのだった。

そして今は並盛町のとある公園にいる。

「ベルー。私は入学手続きとかしてくるからベルはこの町を探検し
てきてよ。」

どこに何あるかとか知ってたほうが便利じゃん」

「わかったぜ。ところで変装とかすんのか？」

「うーん。髪だけ幻覚で色変えとくか」

というとき浅葱とベルの髪色が藍色から茶色になっていった。

そして浅葱はベルに5センチほどの羽を渡した。

「ほい。これを媒介にベルの髪色は幻覚かけるから常に持っていてね。離れても」

幻覚は持続するけど私が疲れるから」

「わかったぜ」

「さ、行くつか。ついでに住むところも一応私が探しとくね」

「ん。じゃあ午後5時にここ集合な」

今は午前10時ぐらいだ。

「ん。わかった」

と行って浅葱とベルは違う方向へ歩いていった。

標的22 風紀委員長、来る！

浅葱はベルと別れてから沢田綱吉が通っていて、自分たちもこれから通う

並中に向かっていった。

そして今は並中の校門前に居る。

ならちやっちやと入れよ、と思うだろう。

だがそうはいかないのだ。

なぜならトンファーを構えている黒髪学ランの少年が目の前に立ち

ふさがっているのだ。

「ねえ、何黙ってるの？君は何でここにいるのか、って僕は聞いているんだけど」

いつもなら浅葱はこんなやつがいたら戦っているだろう。

だって相手は武器構えてるし。

だが今日はそうもいかないのだ。

「だって、並森きてそうそう問題起こせないしな」

「は？何いってるの？」

「……」

「いや、僕に聞かれても困る。ていうかいい加減にしなよ」

とって少年は襲い掛かってきた。

「咬み殺す」

とって。

それを見た浅葱は、

「あーもう、いや。問題が何だこのヤロー」

考えを放棄していた。

ギンッ。

金属同士がぶつかる音がする。

浅葱は両手にエストラーネオのボスのものだった、今は浅葱のものの短刀2本を

それぞれ逆手にもってトンファアの攻撃を防御した。

そしてすかさず浅葱は回し蹴りを放つ。

それを少年は無駄のない動きで避け、トンファアの息をつかせぬ連

撃を繰り返す。

ギンッ。

ガンッ。

キンッ。

音が数分響き渡ると、いきなり音が止んだ。

少年の首すれすれには浅葱が順手に持ち替えてある短刀が、浅葱の
あご下すれすれ

にはトンファーが、それぞれ停止していた。

「へー 結構やるじゃないか 楽しかったよ」

と、浅葱は短刀を両方鞘に戻す。

それを見て少年もトンファーをしまつ。

「で、君の用事って何？」

「へ？」

「だから、並中に用事、あつたんでしょ？」

少年は呆れた様子で聞いてくる。

「あ、忘れてた」

それを聞いて、ますます呆れた顔をする少年。

「早く言って」

「じゃあ言うね。私ともう1人を並中に入れてほしいんだ。もう1人は3年の

どうか。そして私を沢田綱吉と同じクラスに入れてほしい。もう一人は男子だよ」

「ふーん。まあいいよ。手続きしといてあげる。明日8時に職員室に行きなよ」

「おお！ありがとうございます　じゃあね　」

そういつって浅葱は笑って、その場から去っていった。

並中の転入を少年に頼んだあと、浅葱はふらふら並森をさまよって
いた。

「あ、そいえば名前言ってない。てかあの人の名前も知らないや。
ま、いつか」

それで済ます浅葱だった。

「それより家ごとしょっかなー」

そう呟きながら歩いていると浅葱は一軒の大きな屋敷を見つけた。

いかにも日本、という感じの屋敷だ。

「おー。ここならベルも喜びそうだなー。住人殺して、ま、悪くても居候でいつか」

とって浅葱はベルとの待ち合わせ場所に歩いていった。

午後5時、浅葱とベルの待ち合わせの場所。

浅葱はベンチで寝ていた。

「おい。姫ー。起きろー」

ベルは浅葱の頬を引っ張って起こそうとしていた。

マーモンに及ばないながらもむにーっと伸びていた。

その時、浅葱の眼帯で覆われていない右目が開かれた。

「んにゃ？おふあひよふ？ふえる」

「おはよ 姫」

そういつてベルは浅葱の頬から手を離す。

「探検して何かわかった？」

「しじしじっ。この町はよっぽど平和な部類だっことがわかったぜ
」

「へー。私は転入手続きはもちろんのこと家も見つけたぜ」

「お、さっすが姫。早速行こうぜ」

「うん。住人殺して住もう 悪くても居候で。でも先に何か食べて
から行こうよ」

「じじい。じゃそっすっか」

そういって2人はレストランへと歩いていった。

2人は存分に腹を満たしたあとに、浅葱が見つけた屋敷へと歩いて
いた。

食事で雑談したりして時間を食ったのもう11時くらいだろうか。

完全に真っ暗だ。

「じゃーん　ここだよ
」

「おー、すげーじゃん アジトには及ばねえけど」

「そりゃあね。アジトよりでかい屋敷は一般人は持ってないと思うよ。ちて」と

浅葱はすー、と息を吸う。

そして屋敷の門についている玄関を蹴り破る。

「おっじゃましまーす 家をもらいに来ましたー」

と、大声で言い放った。

警察を呼ばれたらどうするのだろう。

しかしその声に対してでてきたのは1人の少年だった。

「誰？」

和服を着てトンファーを構えている。

いかにも不機嫌で、今にも襲い掛かってきそつだ。

「あ、昼間戦つた人だ」

またしても浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルが発動した。

標的23 居候、来る！

浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルによりあたりは沈黙に包まれる。

それを破ったのは浅葱だった。

「ねえ、君は1人でここに住んでるの？」

「そうだけど？」

「ふーん。ならば、私たちの合わせ技を受けても立っていられたらあなたの

勝ちで私たちは別の家を探す。でも受けて膝をついたりとかく立つて

いられなかったら私たちの勝ちで居候させてよ」

「ちよっ、姫？なんで居候？家明け渡してもらえばいいじゃん」

ベルが聞いてくる。

「ふっ、よく考えたまえよベル君。私たちは家事ができないじゃないかな
いか。私が

鶏のから揚げと卵焼き作れるだけで。けどそれが毎日じゃあベルは飽きるっしょ？

けれど1人暮らしをしているその人なら家事ができるはず！だから居候と称して

家事をやってもらえばいいのさ」

「おお 流石姫」

それを聞いていた少年はと言うと、もう切れていた。

「わかったよ。僕が負けたら居候も許してあげる。家事も一応やっ
てあげるよ。」

けどそっちのいいだしっぺの南国果実は風紀委員で働いてもらっよ」

ブチ。

「今思まわしき果実の名が聞こえた気がするんですけど？」

「聞こえなかったの？南国果実の君には風紀委員で働いてもらっよ
いったのさ。」

もう片方は明らかに書類仕事できなさそうだからね」

「王子は書類仕事もできるし」

「でも嫌いだろうか？」

「ぐっ（なぜわかるし・・・）」

その隣で浅葱はぶつぶつと何か呟いていた。

「私はナツポーじゃないもん。だって後ろ髪は長いし。第一ナツポ

「っていうのはムク兄の固有名詞だ。そつだよ。だから私はナツポ
ーじゃない。ナツポーじゃない。ナツポーじゃない。ナツポーじゃ
ない。Non ananas. Not pineapple. 不波
?。不菠蘿。No l a p i ? a . ? .
ナツポーじゃない。Non ananas. No
t pineapple. 不波?。不菠蘿。No l a p i ? a .
? . よし! 私はナツポー
じゃない!」

途中異国語が何個も飛び出していたが気にしていたら負けなのだ。

「さあ! ベル! 私も風紀委員だとか訳わかんないのは気にしないで
くから

さつさと私を南国果実よばわりしたこいつを這い蹲らせよう」

「いや、そこは気にしたほうがいいと思っせ・・・」

「いいんだよ、こいつに勝てれば」

「ま、姫がいーならいーけど」

その言葉を皮切りに三人は戦闘体勢に入る。

少年はトンファーを構え、ベルはナイフを手に持ち、浅葱は大鎌を創り出し、手に持つ。

そして少年が飛び出してくる。

そして浅葱が大鎌の柄尻を地面に叩きつける。

それを合図にベルがナイフを宙に放る。

「O u v e r t u r e l a S i n f o n i a d e l l a
c a c c i a a l l e t e s t e R i p p e r 首狩りと

切り裂きの交響曲序曲」

浅葱が言い、

「「Globe-trotter cacciatori di
teste coltello」 世界を駆け巡る首狩りナイフ」

次に2人が同時に言うと同時にそこから中にベルのナイフが浮かび、少年は動きを止めた。

そして少年の首めがけて不規則に大量のナイフが襲い掛かる。

それを避けるために少年は膝をついて頭を下げる。

するとその頭すれすれにナイフが通る。

パン。

そこで手を打ち付けた音が鳴る。

「はい、私たちの勝ち。こっちの勝利条件は相手をたった状態じゃなくさせる」

ことだったからね」

「姫、いいのか？怒ってたのに・・・？」

「今回の目的はあくまでも住むところを手に入れることだからね。本質を見失っちゃ

駄目、って昔ムク兄に言われてたしね」

「ふーん」

といつてベルはナイフを回収する。

回収し終えたところで浅葱の大鎌は霧散する。

「さ、てど。じゃあ君の家に居候させてもらつたらね」

「わかつたよ」

そして浅葱とベルは住む場所を手に入れたのだった。

この後は浅葱とベルそれぞれに客間へ案内してもらい、合鍵をもらって、

自己紹介や転入手続きとかをやっっちゃおう、ということでも居間に行った。

浅黄は隣に座るベルにしか聞こえない声で連絡する。

「私たちは13、14才設定で兄妹設定だから。ベルの偽名は白石^{しらいし}鈴^{すず}、

私の偽名は白石^{しらいし}浅黄^{あきは}だから。私の場合は漢字変えたただけだけど多分大丈夫」

「とりあえず自己紹介しようか」

と浅葱は言う。

「私の名前は白石浅黄、こっちが白石鈴って

名前で私の一個上の兄だよ よろしくに」

「<u>ふんっ</u>」

「さ、私たちは自己紹介したよ。君の名前は？」

「雲雀恭弥」

「ふーん。雲雀ね。しっしっ」

「よし、じゃあ自己紹介は終了、ということとで転入手続きありがとう
う」

「そんでもってもう寝ていい？」

浅葱はあくびしながら問う。

「いいよ。これが合鍵だから」

と行って雲雀は鍵を2つ差し出す。

「ん、ありがとう。恭弥　そしておやすみ　2人とも」

「ん、おやすみ 姫」

ベルは妹設定でも姫と呼ぶらしい。

そして三人は各自の部屋へと戻っていった。

標的24 転入、来る！

翌朝、浅葱は相変わらず寝坊まっしぐらに、
といつかこの時間なら
熟睡は普通である。

そう、今は午前5時である。

その熟睡している浅葱に1つの影が落ちる。

「起きなよ」

1つの声が落ちるがそんなもので起きる浅葱ではない。

ちなみに寝ているときであるうたと幻覚で髪の色は変えてある。

「起きなうてば」

「ZZZZ」

それでも熟睡する浅葱。

「僕が起きなっていてるのに起きないとはね。咬み殺す」

とって影ごと雲雀はトンファーを浅葱に振り下ろす。

ガバッ。

浅葱は殺気を察知して反射で避ける。

「むー？もう朝？」

浅葱はまだ眠いのか目をこすっている。

眼帯は寝ているときもはずしていない。

おしゃぶりも肌身離さずだが見えないようにポッケに入れている。

そして浅葱は時計を見る。

そこに示されていた時刻は5時。

「あれ？時計壊れた？」

「あつてるよ」

「じゃあ何で起したんでしょいましょつか？」

「はあ、忘れたの？昨日の賭けで君たちが勝つたらここに居候も許すけど君に」

風紀委員になってもらうって」

「風紀委員ってのと5時に何の関係があるのさ？」

「風紀委員は並中与並盛の風紀を守るのが仕事だよ。だから風紀委員は5時登校なのさ」

「へー、なるほど。ま、いや」

「納得したならちやっちやと制服着て。風紀委員の学ランとどつちがいい？」

そういつて差し出してきたのは風紀委員用長学ランと黒いズボン。

浅黄がこんな長さのズボンをはいたらぶかぶか間違いなしである。

「制服」

「なら最低でも腕章と学ランの上だけは着て」

と言って雲雀は制服一式を差し出してくる。

「ん」

浅葱がそれを受け取ると雲雀は部屋から出て行く。

今の浅葱の格好は並中の普通の女子の制服の上から学ランの上着を前を開けて

着て、左袖に風紀委員の腕章をつけている。

短剣は学ランの影になるように装備して、おしゃぶりは制服の下になるように

首にかけている。

そして雲雀も気にしていないし誰も覚えていないかもしれないが浅葱は

アルコバレーノの呪いのせいで10才で成長が止まっている。

より詳しく言うと今現在浅葱の身長は130センチなのだ。

つまり学ランはもちろんのこと制服すらだぼだぼだ。

学ランなんて床についている。

「むー。学ランの上着は短剣を隠すのにはちょうどいいけど、だぼだぼ過ぎで動きづらい」

と言って浅葱は部屋の外でまっているであろう雲雀の元へ向かう。

「恭弥ー。学ランだぼだぼすぎー」

「ああ、仕方ないね」

と言って雲雀は学ラン、制服保管庫へと歩いていく。

(本当この人は絶対一般人じゃないけど何者なんだろう?)

「これが一番短いよ」

と言って差し出してきたのは雲雀が来ているものと同じ大きさのもの。
の。

他のものに比べては裾は短い袖が長い。

「ん。袖が長いのはいや。じゃあこれで」

「じゃあ並中に行こうか」

雲雀は外にでるとバイクにまたがっていた。

「あれ？日本って18才以下はバイク駄目なんじゃなかったっけ？」

「早く乗りなよ。鈴には朝食と書置きと制服もちゃんと残しておいたから」

「おお。それはありがと あれ？でも私の朝食は？」

「君が寝坊するのが駄目なんだよ。明日からは4時に起きなよ」

「ええー」

「だったら朝食抜きだよ」

「わかった。でも今日の昼食はあるよね・・・？」

浅葱は不機嫌丸出しの顔だが頷いた。

「さあね」

「じゃないと書類仕事とか嘘の情報書くぞ」

「浅黄って居候してゐって自覚あるの？」

「んー。あるけど賭けに勝って得たものだし？家事もしてくれるって言うてたじゃん」

「仕方ないね」

そうこうしているうちに並中についた浅葱は恭弥に風紀委員の仕事
を説明され、

早速書類仕事を8時までやらされた。

ちなみにその時風紀副委員長とかいう地位の草壁という人に「すこ
いです！

書類がどんどん減っていく！」とキラキラした目で見られた。

あんな厳つい顔した人が目キラキラとかレヴィには及ばないけどキモかった、

と浅葱は思う。

その証拠にそれを見たとき反射で一発殴ってしまった。

そして現在は沢田綱吉がいるという2Aの前廊下で待っている。

担任に呼ばれたら入っていき自己紹介をするらしい。

職員や通りかかる生徒は私を見るとぱっ、と表情が明るくなって「可愛い。」

風紀委員「ここかな？怖いものしらずなんだな」とかぼそっ、と呟くけど

なぜこっこのなのだ？そんなに私はちっちゃいか！

と考えていると浅葱は段々イライラしてきた。

「あ、口調は敬語でいいよね？それにもう浅葱じゃなくて浅黄なんだ。うん」

と浅黄が呟くと担任に呼ばれた。

ちなみにこの担任には最初「今日来るっていう白石浅黄さん知らないかな？」と

子供を相手にするように話しかけられたので一発殴ってやった。

すると一度退学だーとか騒がれもしたけど、本物の風紀委員だと知られると

それもすぐに解決した。

そんなに怖いのか、風紀委員が・・・？

「白石ちゃ、じゃなくて白石さん、入って来い」

ガララ。

とドアを開けて浅黄が入っていくとクラスの方々が固まった。

風紀委員という恐怖でなのか、あまりの小ささにか。

そして浅黄は黒板のチョークを置くところに一飛びで乗り、黒板に

「白石浅黄^{ついでに浅黄}」と書いて床に降りる。

「白石浅黄と言います。イタリア人と日本人のハーフで今までイタリアに

いたのですが日本に来ました。訳は家庭の事情というやつです。これから

よろしくお願いします。3Aの転入生白石鈴は私の兄です。あ、あと私はチビじゃ

ありません。周りの方が大きいだけです。私が14才で鈴は15才です。

そして私は風紀委員です。」

と、浅黄は嘘だらけの挨拶をした。

それを聞いたクラスの皆とえば、

「「「「ええー！」「」「」

と驚愕に染まっていた。

標的25 お弁当、来る！

浅黄の挨拶が終わったあと、浅黄は沢田綱吉の隣の席だと言われたのでそこに座った。

そして一時間目が終わり、休み時間に入ると、この時期に珍しいとしてたくさんの

人が浅黄の周りに集まった。

「私笹川京子っていうの、よろしくね？」

「私は黒川花よ」

「笹川京子に黒川花ですね。よろしく願いします」

と言って浅黄は100%営業スマイルを浮かべる。

「わっ、ワタクシは佐川馬羅さかわからと申すものですの。よ、よろしく

お願いいたし、ます?」

と言って茶髪に染めたのであろうことがわかる、とこころこころに黒髪が

残っていて、カールがかかってくるくるの髪を鎖骨あたりまで伸ばして

いる女子が来た。

身長は160センチぐらいだろう。

「はい、よろしくお願いします。佐川馬羅」

それに浅黄は200%営業スマイルを浮かべる。

そのときの浅黄の本心は、

（うわー、優柔不断来たー。つーかカールに染めた髪に優柔不断って似合わ

ないだろ。しかも何か顔がウザそうだし。どっか言ってくんないかなー。

私は沢田綱吉に会いにきたんだけど。ってか何で髪染めてるのに恭弥に

咬み殺されてないの？）

だった。

そして浅黄は隣の席の沢田綱吉に顔を向ける。

沢田綱吉の周りには天然そうなやつといかにも不良なやつがいた。

「これからよろしくお願いします」

と話しかけてみると沢田綱吉はこちらを向いた。

「あっ、こちらこそよろしくお願いします。俺の名前は沢田綱吉で

す。こっちが

友達の山本武と獄寺隼人、です」

「よろしくなっ」

「ケッ」

「よろしくお願いします」

と言ってまた浅黄は営業スマイル100%を浮かべる。

(沢田綱吉、案外普通みたいだね。まあ、これから観察していけばいいかな)

とか思っていると予鈴が鳴ったので皆席についた。

そして四時間目が終わりとうとう昼休みとなった。

浅黄と言えば、転入初日にもかかわらず熟睡していた。

そして昼休みの鐘が鳴ると、沢田綱吉に起こされたのだった。

「白石さん、起きた？」

「ふわーあ。はい。起きました。起こしていただきありがとうございます
います。」

「え、と。これから俺たち昼食に食べるんだけど一緒に食べる？」

浅黄が顔を上げると沢田綱吉と山本武、獄寺隼人がいた。

「それでは御一緒させてもらいます。あなたたちはお弁当ですか？」

「いや、俺は弁当だけど山本と獄寺君は購買だよ。白石さんは？」

「私はお弁当です。今から取りに行きます」

「取りに行く？鞆の中じゃないの？」

「鞆の中なんて何も入ってませんよ。形だけ持ってきているだけです。一緒に

来ますか？」

「じゃあ購買で買ってから一緒に行こっか」

「わかりました」

購買で山本武と獄寺隼人がパンを買ったあと。

「じゃあ白石さんの弁当を取りに行くのか。どこに取りに行くの？」

「ついてきたらわかりますよ」

と行って浅黄は歩き始めた。

応接室へと向かって。

そして今は応接室の扉の前。

「あ、あれ？ここって応接室？ああ、白石さんは風紀委員だったもんね・・・？」

そして浅黄は躊躇なく扉を開ける。

ガラガラッ。

「ちーす。みかわやでーす。お弁当徴収に来ましたー」

(ええええー!? サ エさん!? しかもお弁当徴収!? 応接室にいるのは、雲雀さん!?)

「なんだい。そうぞうしいね。しかも群れてるし。咬み殺されたいの?」

「えー。ツッコミなし? つまんないー。恭弥のバーカ。もうアヒルって呼んで

やる。アヒルのバーカ、バーカ。サ エさんも知らないのかよー」

見事な棒読みで浅黄は言う。

(てゆうーか白石さん口調変わってるー!?)

「そんなに咬み殺されたいの?」

ガタッ。

雲雀は書類仕事をやっていた手を止め、席を立ってトンファアを構える。

「違う違う。まあ戦いは大歓迎だけど今はお腹減ってるんだよ。誰かさんの

せいで……。つーわけでお弁当ちよーだい」

笑顔の浅黄。

けど目が笑ってない。

「はあ。わかったよ。だからもう群れないでよ」

そう言って雲雀は浅黄に弁当を投げる。

「おっと、サンキューー　じゃーに」

と言って浅黄は応接室をでて、扉を閉める。

その手に弁当を持って。

「さあ、昼食にしましょう？ 沢田綱吉」

浅黄の口調は元に戻っていた。

「あ、うん。じゃあ屋上に行こうか」

ツナは何とか回復して話す。

「さあ、待ちに待った昼食です」

と言って浅黄は弁当の包みを開けていく。

そして開けて、食べる。

その弁当はいたって平均的なものだった。

まずくもなく、中の上くらいであろう味と見た目。

「ん。結構おいしいです」

もぐもぐ、と浅黄は黙々と食べ進める。

そこに獄寺が口を挟む。

「それってまさか雲雀が作ったとかじゃねえだろうな・・・？」

「そっぴですけど？」

「んなー！ー！あの雲雀さんが！？何がどーなってんのー！」

「うるさいですよ。食事中は静かにしなさい」

と言って浅黄は箸をツナに向ける。

「ははっ、注意されてんのな、ツナ」

「でも本当なんですかね？あの雲雀ですよ」

と獄寺はツナに耳打ちする。

「うん、あの雲雀さんが、本当に「信じられねーぞ」「リポーン！」

ツナの言葉をさえぎって現れた赤ん坊の胸には黄色のおしゃぶりがついていた。

(彼も、私やマーモンと同じアルコバレーノ、リボン・・・)

「テム工等は怪しいことだらけだぞ？それに雲雀は1人暮らしだから料理は

できるとしてもそれを人にあげるなんて信じられねーぞ」

543

「テム工等？」

ツナは疑問に思ったことを聞く。

「よっ、姫」

屋上の入り口から現れたのは茶髪の王冠をつけている3Aの転入生、白石鈴

ことベルだった。

標的26 ちょっとした危機、来る！

「ん、鈴ひゃないか。昨日ぶりだね 一応おっはー」

浅黄は食べながら話す。

「ん、おはよー」

もう正午も過ぎているにもかかわらずおはよう、と言いつつ。

「えと。あなたは誰なんですか？」

「俺はこの白石浅黄の兄の白石鈴だぜ」

「えー！白石さんのお兄さん！？」

「なぜそこまで驚く？」

浅黄は聞く。

「だって白石さんのお兄さんだから風紀委員かと思ったけど普通の制服だから」

違うんだろっし、それに身長差が「ああ、？私がチビだと？」な、何でも

ありません！」

浅黄の口調がまた崩れる。

「あーあ、また口調が崩れたじゃないですか。ま、もういいんですけど」

そう言った浅黄はいつの間にか弁当を食べ終えて、片付け終わっていた。

「さて、と。とりあえずなぜ赤ん坊がこんなところにいるのか教えて

いただいても？あと自己紹介も折角だからしてもらおうか？」

浅葱は何とか敬語に戻し言う。

「俺のこと知ってるだろ？最初俺のことを見たとき驚いていた。それ

おしゃぶりを見て、さらに驚いていただろ？隠そうとしても無駄だぞ」

それを聞いて浅葱はにっこり笑う。

「それが何だっというんです？ 中学に赤ん坊がいたから驚いた、黄色っていう

珍しい色のおしゃぶりだから驚いた、そうはならないんですか？」

「言い訳にしか聞こえねーな、それに」

そこでリボーンは言葉を切る。

そして跳躍して浅葱の目の前に来、浅黄が隠していた鎖の巻かれた
漆黒の

おしゃぶりを引っ張りだした。

「げ」

浅黄は焦った顔をする。

そして鈴に助けて、という視線を向けるが、鈴もいい案がないのか
視線をそらしている。

「じゃあこれはどついでのことだ？」

浅黄のおしゃぶりを指差して言うリボン。

「……」
「ねは、あれですか、あれ」

「あれってなんだ」

「あれは、え、と。．．．。．．．。．．．。．．．。」

「．．．。．．．。．．．。．．．。」

「あー、はい。もうわかりましたよ。言えばいいんでしょう？言え
ば。私は

アルコバレーノですよ。それが何か？」

(開き直ったーーー!?)

ツナは本日何度目かわからない浅黄へのツッコミを心の中でしていた。

「てめえが新しく入ったっていうやつだったのか……。この鎖は何だ？それに

そんなにちっちゃいのは呪いのせいか？」

プツ。

「次チビっていったら首狩るから あと呪いのことは君の推測どおりさ。少し

変わってしまったんだ。そして鎖については、呪いを解く努力もしてない

やつには教えたくもない。それにそんなやつと関わりも持ちたくないね」

「そうか」

「リボーン？呪いって何のこと？」

それに対してリボーンは帽子の鍔を下げる。

「何でもねーぞ。じゃあ俺は帰るぞ」

（まだ聞きたいことはたくさんあったが答えてくれそうにもねーな
・・・）

そしてリボーンは去っていった。

「全く、こんなに早くばねるとは思ってもみませんでした」

と言って浅黄はおしゃぶりを見えないようにしまつ。

と、そこで予鈴が鳴る。

「さあ、早く教室に戻りましょう。でないと先生の長ったらしい説教を

聞くはめになるかもです。どうせ寝ますけど」

（ ）（ ）（それも十分説教受ける行為だよ！？）（ ）（ ）（ ）

このとき4人の心が一致した。

この後は教室に戻り、浅黄は結局全ての授業で寝て、教師には風紀委員なので

怖がられ注意もされずにいたのだった。

標的27 マフィアランド、来る！

今浅葱とベルは並盛に来て一週間ほど経っていた。

そして今日は金曜日で学校から帰り、ベルの部屋で雑談をしているのだった。

「ふあーあ。疲れたー。学校って案外疲れるもんなんだねー」

「ああ、姫って学校行ったことないんだっけ？」

「うん そうだよ だからそれなりに楽しいよ。沢田綱吉はよくわかんないけど」

「確かにな。でもあいつよりボスのほうが10代目には相應しいのは確かだろ。」

ししっ
「

「そこは同意 あ、そいえばマフィアランドのチケットゲットしたんだけどさ、

スクアールにも旅行という名目で来ているわけだし、折角だし行かない？」

「いざいざ」

「よしんじゃ明日朝一だから。あと正体ばれて騒がれてリボーン
の耳にでも

入ったらやだから髪はこのままで行くからね」

「オツケー」

「んじゃまた明日ね おやすみ」

翌朝。

「ん。
おやすみ
」

「さあ、行くつベル 恭弥には許可も取ってきたよ」

「おう」

そう言って2人は港へと進んでいった。

2人の服装は私服、つまりイタリアから日本へ来たときと同じものだった。

今はマフィアランド行きの中。

「ベル。ご飯食べに行こ」

「じじじっ VARRIAのどどっちがっまいかな」

「ルッスに料理で勝てる人なんていると思う？」

「んー。思わねえ」

「だよ。私も思わない。っと、そつに言っているのには驚いたね 白石です」

「白石様ですね。あちらになります」

「ん。ありがとう」

席につくと色とりどりのたくさんの料理が並んでいた。

「おー おいしそ いただきます」

「しっつ。いただきます」

「ごちそうさまでした あー、おいしかったね やっぱルッスの料理には及ばなかったけど」

「ごちそうさん だな あいつオカマのくせに家事うまいんだよな
ししっっ」

という会話をしながら浅葱とベルは食堂を出て行き、部屋に戻る。

それから1時間ほど経ったころ、マフィアランドに到着した。

そして浅葱とベルは入島手続きも無事済ませ、遊びに来ていた。

「ベル！かんらんしゃ、つての乗ってみたい」

浅葱は無駄にキラキラした瞳でベルに言う。

「じゃあ行くか」

「ん」

と言って浅葱とベルは観覧車に乗った。

「おおおおー すごい。かんらんしゃってこんなだったんだあ」

浅葱はその10才の見た目と合わさって子供にしか見えない。

「よかったな、姫」

「うん 楽しい あ！」

「どした？」

「あれ、沢田綱吉じゃない？」

と言って浅葱が指差す方向には確かにツナとりポーン、それに青色のおしゃぶりを

持つ赤ん坊がいた。

「お、ほんとだ。どーする？行ってみる？」

「んー。あの赤ん坊はアルコバレーノ、コロネロ、かな。沢田綱吉は会っておこうか。」

信用とか関わり持っといたらなんかわかるかもだし」

「そだな」

浅葱とベルは観覧車が地面まで着いて下りると一直線にツナたちが

いる

裏マフィアランドへと進んだ。

沢田綱吉がいたところに近づくと悲鳴やら怒鳴り声が聞こえてきた。

この悲鳴はおそらく沢田綱吉のものだろう。

「とりあえず話しかけてみよっか」

と浅黄が言つと鈴も無言で頷く。

浅黄が沢田綱吉たちのところへ近寄る。

すると観覧車の上で見たときより1人いかにもつるさそつなのが増えていた。

会話から推測するにロンシャンという名前で彼の彼女がカルカッサファミリーと

いつものスパイで騙されたらしい。

どうでもいいことだが。

そして浅黄は話しかける。

「何をやってるんです?」

その声に一番に反応したのはやはりリボンだった。

「お、白石じゃねえか」

「誰だ、コラ!」

「白石さん？」

浅黄は「口ネロの質問に答えるべく口を開く。

「沢田綱吉のクラスメイトの白石浅黄といいます。あちらは私の兄、白石鈴です」

「おい、重要なこと言ってねえだろ」

「はて、何のことですか？」

「知らないフリするな。こいつも俺たちと同じアルコバレーノだぞ」

「何だと！じゃあ何で赤ん坊の姿じゃない？何よりおしゃぶりが光らねえぞ！」

「姿に関しては頭に情報が4年前ぐらいに入ってきたはずだぞ。そんなことも」

「忘れたのか？」

「忘れてねえぞ。ちょっとド忘れしたただけだぜ！コラ！じゃあおしやぶりが

光らないことについてはどう説明するつもりだ！アルコバレーノ同士が

近づくと光るはずだぜ！」

そこに浅黄が口を挟む。

「それはこの鎖のおかげですよ」

と言って浅黄は鎖の巻きついた漆黒のおしゃぶりを見せる。

「何だ？コラ！」

「くふふ。呪いを解く努力もしてない人に教える義理なんてありませんよ」

「む、どこかバイパーに似てるぜ！コラ！」

「ああ、そうだな」

「くふふ。それでは沢田綱吉に何をしていたのですか？（バイパ
ー、っていうこと）」

「マーモンのことか」

「ツナを鍛えてたんだぞ」

ドオンッ！

リボーンが答えたところで爆音が響く。

標的28 アルコバレーノ4人、来る！

「カルカツサファミリーにマフィアランドの居場所を察知されたな」

リボーンがそついつと島内放送がかかった。

『敵襲！敵襲！』

『みなさん避難所へ避難してください！』

『業務連絡！。迎撃体制にシフト！。』

うるさいサイレンもともに鳴り響く。

「ええー！ー！」

そこでツナが大声を上げる。

サイレンに負けず劣らずうるさかった。

「なんでマフィアがマフィアランドにせめてくるんだよ！マフィアが金を出し

合って作ったんだろ！？」

「全部のマフィアじゃねーんだ。ここを作ったのは麻薬に手を出さない

いいもんのマフィアだ。それを面白く思っていないマフィアもたくさんいる

んだ。カルカッサファミリーもその一つだぞ」

「マフィアにいいも悪いもねーだろー!」

確かに、と浅黄は思う。

だって浅黄は今もマフィアなんて全て壊れてしまえばいい、って思っているのだから。

ボンゴレも壊れてしまえばいいと思っている。

V A R I A だって壊れてしまえばいいと思っていた。

最初はここじゃないとここでマフィアつぶしても強いやつと戦えないし、

復讐者も来る、って自分に言い聞かせて入っていた。

でも、いつの間にかV A R I Aの幹部の皆（レヴィ除く）が大事な存在になっていた。

骸にはやっぱり届かなくても、犬や千種と同じぐらいには。

（くふふふふ。まあVARIIAの幹部にはエストラーネオの恩もあるし、

何より一緒にいたら楽しいんだよね うーむ。大事なものが

増えすぎるとするのは困りものだけど、まあいっか（

「ってことはここで抗争がおっばじまんのかよ！」

「ってより戦争だな」

「見る。おしゃぶりが光ってる。知り合いだぜ」

確かにコロネロとりポーンのおしゃぶりが光っていた。

浅黄のおしゃぶりは鎖で封じているので光っていない。

「ああ。こんなくだらねーことすんのは、スカルしかいねーな」

そう話している間にも爆発の音が響く。

「これは戦争だぞ。オレ達島にいるマフィアとカルカッサファミリ
ーとのな」

「あんなー！やばいよ聞いてないよ戦争なんて！」

あー、やっぱり見た目からしてうざそうだったやつは実際うるさく、うざかった。

「うそだろー!?!」

「しかもまずいぜ、コラ! 今日島の警備をするはずのファミリーがボスの

命日で本土に帰ってる……。この島に戦える兵隊はほとんどいない」

「あれー! それやばいよね! 負けちゃうよね!」

「どーすんだよー！」

「もちろんオレがいるかぎり奴らの好きにはさせん！だが、お昼寝の時間だぜ、」

「コラ……。ZZZ」

「…おめい」

「コロネロはほっとけ。ママン達が心配だ。地下鉄でマフィアラン
ドに」

戻るぞ・・・よ
「よ」

「ぞよ？」

「ZZZZ」

「お前もかー！」

「あーもーリボーンのやつーっ！こんな大変なときに寝やがって！
起こしたら

殺されるから起こせねーし。ってまさかアルコバレーノの白石さん
も！？」

「私をあんなやつらと一緒にしないでくれます？」

一緒にされかけたことで不機嫌な浅黄だった。

あの後取りあえずマフィアランドに行こう、ということと地下鉄を4人で抜け、

マフィア城につくと誰が大将をやるかでもめていた。

「ねーベルー。暇だからさ、もう私たちが敵全員殺しちゃわない？
敵はなんか

大群で集まってきたから合わせ技の第一番使えば一発だよ」

「でも正体ばれちゃわねえ？」

「ああ、そっか。じゃあいいや。沢田綱吉がどうするか見てようぜ
い」

「しししっ　そうしよーぜ」

と言って浅黄と鈴は見晴らしのいいところで見ていることにした。

あのははツナが大将になったけど結局何も解決せず、実質リポーンとコロネロが

解決したのだった。

帰りの船の中。

「ねー、ベル。沢田綱吉ってほんとに10代目候補？全然そんなの
に見えないんだけど」

「そーらしいぜ。とにかくもつちょい見てることだしよーぜ」

「そだね」

というところで浅葱とベルのツナ観察はまだ続くことになったのだっ
た。

標的 29 武器改悪改造者、来る！（前書き）

今回はすごい長いです。

それでも読んでいただけたらうれしいです

標的 29 武器改悪改造者、来る！

「ふあーあ、めんどくさい・・・」

浅黄は欠伸をしながら愚痴をこぼす。

今は五時間目と六時間目の間の時間である。

「どーしたんだよ、姫。今日は風紀委員の仕事も昼休みで終わったんだろ？」

「うん 昨日夜の8時までたくさんやったからね で、今日は早く帰って

精神世界で久しぶりにアサットと遊びたかったのにさ。学校で宿題で

602

やがって、沢田綱吉の家に行って宿題するんだよ……。沢田綱吉の

ことがわかるかもしれない、ってのはいいけど、宿題……。めんどい……」

「ああ、アサットはアジトに置いてきたんだもんな。いつもの姫ならま、いっかで

済ましてんのにどしたの？」

「内容が問題なんだよ。小学校のときの夢、だってさ。小学校はおろか

学校というものを行ったのも並中が初めてだし。6つの記憶でも行った

ことなんてないし。小学校のころの年齢の夢ならマフィアを全部潰したい、

とか世界なんか壊してしまいたい、とかだもん・・・」

「・・・。あ、ムク兄っての関係ではないのか？」

「世界を壊したいのはムク兄にこれ以上酷い目にあってほしくなかった」

から、マフィアを全部潰したいってのも同じ。ああ、ムク兄とずっと

一緒に楽しくいれればいい、っていうのはあるかなあ・・・？」

「そのムク兄ってよっぽど大事なんだな」

「うん 大事だよ この世界で初めてちゃんと言葉を交わせたときは本当に」

うれしかったんだ」

そう言って浅葱は満面の笑みを見せる。

「／／／　じゃあそれが小学校のときの夢、でいいんじゃないの？」

「あ、確かに。うん、そうする　ありがとう、ベル」

「どーいたしまして」

「んじゃ 沢田綱吉の家そのまま行くから六時間目終わったら先帰っててね」

「わかったぜ」

「じゃーに」

「ん。じゃーな」

挨拶を交わして浅黄と鈴は屋上から各自の教室へと戻る。

六時間目が終わり、下校時間。

「さあ、ちゃっちゃと行って宿題を終わらせましょう。沢田綱吉」

浅黄がツナに言う。

「うん。うん。(どーしよー！京子ちゃんも同じ班になったのはうれ
しいぞ」

白石さんまで一緒になっちゃった……。アルコバレーノだっ
てい
うし、

ど
う
し
よ
う
。ど
ん
な
態
度
で
接
す
れ
ば
い
い
か
わ
か
ん
な
い
ー
!」

とツナは考えつつも家へ向かって歩く。

今浅黄はツナと京子とともに下校している。

浅黄はツナと京子の3歩ほど後ろを歩き観察していた。

(沢田綱吉は笹川京子が好きなのか・・・。いたって平凡な普通の中学生じゃん)

と浅黄が考えているうちにツナと京子の家の分かれ道に来たようで京子が

ツナと浅黄と別の道に進んだ。

そこで、浅黄は直球に聞いてみることにした。

「沢田綱吉は笹川京子が好きなのですか？」

「ブツ！ど、どどどどうしてそれを！？」

「見てればわかります。まあ誰にも言うかもしれないませんが気にしないでください」

「そこは誰にも言わないじゃないの！？」

「まあ、気にしないでいきましょう。まあ、さっさと沢田綱吉の家
に行って

宿題を終わらせてしまいましょう」

「うん、うん」

とツナが言ったところでUFOがツナにぶつてきた。

「ひぎゃああああ！いででで、何なの！？誰なの！？」

「初めまして10代目。私ボンゴレファミリー御用達、武器チユーナーの

ジャンニーニと申します」

「うわっ、変なのでたー！ー！」

（10代目はボスのほづがあつてそうなのに何で皆こんなのを10代目に

したがるのか・・・？てかこいつきもい。マジ顔きもい。レヴィほど

じゃなくてもきもすぎる！）

そこまで考えたところで浅黄は自然とジャンニーニの乗っていたUFOを

蹴り飛ばしていた。

「ヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ！？」

とか言いながらジャンニーニは吹っ飛んでいく。

しかし途中で誰かにつかまれ止まる。

「まったく、何会ったとたんに蹴り飛ばしてんだ？白石」

リボーンだった。

リボーンはUFOをつかんだまま「ちらにやっってきて、着くとUFOを離した。」

「きもかったからですよ？」

浅黄は微笑みながら言う。

「んなー！？きもいってだけで！？」

「何か？」

「な、なんでもないです」

「私は先に行ってます。沢田綱吉の住所なら知ってるので」

と、浅黄が歩き出そうとしたらリボンにとめられた。

「待て、なぜだめえがツナの住所を知ってたんだ？」

「くふふ。恭弥が教えてくれたんですよ」

そう答えて浅黄はすたすたと行く。

「まったく、めんどくさいやつだなあ、リボン」

そしてツナの家につく。

ピンポーン。

インターホンを押すとツナの母が出てくる。

「あら？ツツ君のお友達？ごめんなさいねえ。まだツツ君帰ってないのよ」

「待たせてもらってもいいですか？沢田綱吉とは宿題をやるので」

「いいわよ。さあがってあがって」

「ありがとうございます」

そう言って浅黄は笑う。

台所へと通された浅葱はとりあえず食卓テーブルについてあるいすに座った。

(沢田綱吉の母はいたって普通の人だな。 てか普通に一般人じゃん。)

じゃあどつでもいっつか

「 ツツ君が帰ってくるまでこれでも食べさせてまってるわ。 」

と言っただされたのは手作り手作りチョコクッキー。

「チョコクッキー・・・」

思わず呟いてしまうほど浅黄はチョコが大好きなのだ。

あと鶏のから揚げとコーヒ―牛乳も好きだが。

（どうせルックスには及ばないだろうけど食べてもいいよね・・・）

「いただきます」

浅黄は一枚とって口に入れる。

そして噛むとサクッ、と音が鳴る。

それにほどよくチョコの味がする。

「うまい やばいこれ、ルッスのよりうまい!」

「ルッス? まあ喜んでくれたのならよかったわあ」

「はい はいはいはいはいはい」

浅黄は満面の笑みで言う。

「あらあら、そんなにうれしいわ なんならおみやげもいるかしら」

「いいんですかー！いります じゃなくてくださいー！」

軽くといつかかなりキャラ崩壊しかけてる浅黄だった。

そして今はおみやげのチョコクッキーを作ってもらっている。

当の浅黄といえは残っているクッキーを全部出してもらい、幸せそうにさくさく食べている。

そんなときツナは帰ってきた。

「ただいまー！」

「む、ひゃわだひゅなひよしがかえってひたようですね」

食べながら話す浅黄。

「ツツ君おかえりー」

「ただいま母さん、って白石さん!?!?」

台所へと行ったツナが見たものは見事にツナの家になじんでチョコクッキーを

おいしそうにほおばる浅黄だった。

「む、沢田綱吉。あなたの母と会い、少し見直しましたよ。ミドリムシから

ミジンコに格上げて差し上げましょう。こんなにおいしいチョコクッキーを

製造できるものの子なんですから」

（んなーー！白石さんってオレのことそんな風に思ってたのー
ー！）

「うふふー。ありがとう、シー君とこれから仲良くしてあげてね」

「はい。また来てもいいですか？」

「いいわよ 次来たとき何かつくってほしいものってある？」

「チヨコ関係で辛くないものがないです」

「わかったわ じゃあとリユフ作るわね」

「ありがとうございます」

浅黄はまた満面の笑みを見せる。

（可愛い。白石さんってこんなに可愛かったんだ・・・）

ツナは心の中で呟く。

「あ、沢田綱吉。宿題の作文を取ってこなくてもいいんですか？」

「あっ、忘れてた。ありがとう、白石さん！」

「いえ」

するとツナは2階に上がって行って、何か叫びをあげていたが、関係ないだろう。

しばらくすると京子がやってきたが浅黄は関係なくさくさく食べて

いた。

さらにしばらくするとちっちゃん獄寺がやってきたが変わらず浅黄はさくさく食べていた。

そして浅黄は食べ終わり、もう帰ろうかとしたとき他の人には見えていない

だろう、多分光学迷彩を使って、ツナを殺そうとしているものを見した。

(むー。 沢田綱吉が死ぬのはうれしいけど、すると沢田奈々が悲しむ。

するとトリュフが、食べれない・・・？)

「沢田奈々手作りトリュフが食べれない、だと」

浅黄は呟く。

「そんなことさせないよ」

と言って浅黄はツナの上に来ていたものを回し蹴りで吹っ飛ばす。

吹っ飛ばす方向の首が通るあたりに腕を設置し、思い切りぶつけさせて気絶させる。

そしてもう1人のほうには額あたりを殴りつけ気絶させる。

（流石に沢田奈々の家で殺すと後片付けをするであろう沢田奈々さんが大変そうだね）

それを見ていた獄寺が感嘆の声を上げる。

「おお！よくやった。10代目をお守りしてくれたな」

「いえ、トリユフが食べられなくなるのが嫌なだけです」

「えっ、と。とりあえずありがとう。」

「浅黄ちゃん。おみやげのチョコクッキーよ。」

「おお、ありがとう。いいですね。」

浅黄はそれをもってツナの家から帰ろうとする。

「あ、沢田綱吉、宿題についてですが私はさぼった、という事でいいです。」

私は早くこのおみやげを食べたいので帰ります。 arrive

rci
「

そっさい残し、浅黄は去っていく。

後には arrivederciの意味がわからないツナや山本が残された。

「え、ありべでるち？それにこの人たち何ー！」

「さよならって意味だぞ」

リボーンはそれに一応答えておく。

標的 29 武器改悪改造者、来る！（後書き）

感想も相変わらずまっています

標的30 プール開き、来る！（前書き）

またしても長いです・・・。

標的30 プール開き、来る！

ある金曜日、2Aの男子メンバーは、プール掃除をしていた。

そしてその途中で先生が中2にもなって15メートル泳げないやつは女子に

混じってバタ足だぞー、と言ったのであった。

放課後、皆が帰り支度をしているとき。

「はあ、どうせ練習したって15メートルなんて泳げっこないよ・・・」

浅黄の隣ではツナが嘆いていた。

「沢田綱吉は泳げないんですか？」

それを言つとビクッとツナは肩を揺らす。

「うっ。な、なんで？」

「さっき『はあ、どうせ練習したって15メートルなんて泳げっこないよ……』」

と呟いていたので「

「白石さんは、泳げるの？」

「一応は泳げますが、ど、ぷーる、というものは嫌いです……。昔を、

思い出すので……」

そう。

プールを見れば浅葱は思い出す。

プールがとてもエストラネオのころ風呂、という名の冷水溜めに似ていたから。

あの四角い形に、足がぎりぎりつくという高さ、それに何より、あの冷たさが。

浅黄はそれを思い出し、瞳に影が差す。

「白石、さん？」

その声で浅黄は現実に戻る。

「ああ、すみません。今は忘れてください」

と言って浅黄は笑みを浮かべる。

「うん。うん。こっちこそゴメンね……。）」白石さん、昔何があっ

たん

だろう・・・？」

「チャオツス 白石」

その時リボーンが学校内だというのに現れた。

「ciao。リボーン、何のようですか？それにここは校内ですけど？見つかったら

どしするんです。」

「心配ねーぞ。もう教室内にはてめえらと獄寺しかいないしな」

「くふふふ。誰も心配なんてしてませんよ。ただ見つかって説教を食らうのが

嫌なだけです」

そこで獄寺が駆け寄ってくる。

「あ、リボンさんじゃないですか。どーかしたんすか？」

「そーだな。獄寺も来るか？今週末のツナの水泳特訓」

「行きます！」

「白石も来いよ」

「ちよっ！リボン、そんな勝手に」

ツナは先ほどの浅黄の様子を見て心配しているようだ。

「（沢田綱吉に心配されるとは……。なんかイラっとくるね）いいですよ。」

行ってあげますよ」

「え、白石さん、大丈夫なの？」

「心配はご無用ですよ。それでは次の日曜日に」

と言って浅黄は教室から出て行く。

日曜日。

「ベルー、今から沢田綱吉たちとプール行ってくるから」

「プール？大丈夫なのか？」

ベルもエストラレーネオのころのトラウマについて心配してくねっているようだ。

「まあ啖呵ってほどでもないけどリボーンに言っちゃったしね。まあ何とかなるわ」

「そっか。無理せず辛くなったら帰って来いよ」

「うん ありがとう 行ってきます。あと、恭弥には今日町の見回りしろ、って」

「言われてるけど言い訳お願いするね」

ベルの退路は断たれたのだった。

プールに書いて水着に着替え、プールに行くともう沢田たちは泳いでいた。

浅黄の水着は藍色で下はショートパンツ型、上はひじまで隠れ、お腹も

1センチもでていない、首に布がだぼだぼとたまっているものだった。

まるで上半身を隠すかのようだった。

見知らぬ女も、ウザそう、じゃなくてウザイ女こと佐川馬羅も居た。

「誰？」

するとツナたちがこちらに気づいたようでプールから上がってくる。

「白石さん、きてくれたんだ」

「うん。まあ来るって言ったっちゃったんでね」

「はひ？この人は誰ですか？」

「あ、ハルは知らなかったね。白石さんはオレたちのクラスメイトだよ」

「白石浅黄といます」

「私は三浦ハルっていいいます。ハルって呼んでください」

「わかりました。ハル、ですね」

「はい！」

そこに存在いららないんじゃないかね、こと佐川馬羅がやってくる。

「ツ、ツナ君。も、もうそろそろ、練習再開、い、いたしません？」

「あ、うん。お願いします」

と言ってウザイ女とツナはプールへと戻っていった。

「じ、じゃあまずは、ここまで泳いで、く、くださる？」

そう言ったウザイ女は10メートルの地点に立つ。

「う、うん（10メートルなんて泳げないよ）」

ツナは返事をするが途中でぶくぶくしている。

（佐川馬羅はウザイだけじゃなく馬鹿なのか？泳げないのにまずこ
こまで

来てくださる、ってマジで馬鹿か？あー、首狩りたいな）

そんなのが30分続く。

すると山本が声を発した。

「佐川ー、時間だぜ。次は白石の番だな」

「ん？どついついことですか？」

「今30分ずつ交代で教えて誰が一番教えるのうまいか競争してんだ」

「あー、なるほど」

() じゃあどうせなら完璧に泳げるようにしてあの女との格の違いを見せて

やろっかな。あの女は1センチすらも泳げる距離増やせてなかったし)

「さて、と泳ぎ方ってクロールでいいんですか？」

「はい」

山本武が答える。

「あと、教えるときは何をしてもいいんですか？」

「いいぞ」

それには山本武ではなくリボンが答える。

「ん？いつからいたんです？リボン」

「今だぞ。お前が何をするのか見ておきたいしな」

「へえ。いいですよ。25メートル泳げるようにしてあげますよ」

「んなー！無理だよ！5メートルしか泳げないのに！」

「やる前からそれでどうするんですか、やりませうよ」

と、いって浅黄はプールの中にいるツナのところへ近づいていく。

「さて、と。まずは水に浮く感覚を覚えたほうがいいですよ。と、
いうわけで、

672

私が幻覚で浮く感覚を教えるので覚えてください」

「げ、幻覚？」

「人の五感を支配するものです。ではいきますよ。3、2、1」

パチンッ、と浅黄が指パッチンをして幻覚をかける。

浅葱はいつも幻覚や有幻覚を使うときよく大鎌を地面に叩きつけた
りするが

あれは、開始の合図をわかりやすくして使いやすかったり、柄尻で
地面を割ると

いう動作を幻覚につなげることでかけやすくする効果があるだけな
のだ。

なので指パッチンでも開始の合図はできるので使いやすくなる。

指パッチンがなくても使えるのだし。

幻覚にかかったツナは今までが信じられないくらいに見事なクロールで泳いでいく。

25メートルまで到達したら指パッチンで幻覚を解く。

「さあ、初めてまともに泳げた感想はどうですか？」

「すーじーいーすーじーいよ浅黄ー泳ぐのってすーじーい気持ちいいんだね！」

いきなり名前で呼ばれたことに驚く浅黄。

「！？」

「あっ、すみません・・・」

「別にいいですよ。浅黄って呼んでも（信頼関係をきざいといても損はないよな、

多分。それにあんな笑顔で言われたら、断れないだろ・・・」

「え、とじゃあ浅黄、オレのこともツナって呼んでよ」

「んじゃオレらのことも武とか隼人って呼べよな」

「はい。ツナに武に隼人ですね」

「ワ、ワタクシのこと馬糞って、よ、呼んでも、よくてよ」

「あなたは遠慮します」

(んなー！浅黄って佐川さんのことめっちゃ嫌ってるー！
?)

（こんなウザ女たとえツナにとっての重要人物で機密とか握ってたとしても、

仮にだとしても仲良くはなりたくない！）

「んじゃあツナ、そろそろ練習を再開しましょうか」

「あ、うん。改めてよろしくお願いします」

「それでは次は幻覚を少し弱くします。それで25メートル泳いでください。

弱くなったところは自分の五感でもって補ってください。先ほどの感覚を

思い出せばできるはずですよ。そしてその次はまた幻覚を弱くします。

わかりましたか？」

「うん、うん」

「それではいきます。3、2、1」

パチンツ。

浅黄の指パツチンが響く。

（あう、指パツチンはまっちゃった。しばらくこれでいいのかな）

そしてそれが何回か繰り返されたとき。

「ぷはあ、な、何とか25メートル泳げた・・・」

パチパチパチ。

すると拍手を浅黄がする。

「おめでとつございます　これでツナはクロールで25メートル泳
げるように」

なりましたよ　」

「えっ？？」
「えっ？？」
「えっ？？」
「えっ？？」

「その通りの意味ですよ。今のは指パッチンしただけで幻覚は使ってません。」

682

正真正銘ツナが自分の力で泳いだんです。自信を持っていれば泳げますよ。

背泳ぎやバタフライ、平泳ぎでも自信とクロールのときの浮く感覚を

大事にしてください。そうすればできるはずですよ」「

「あ、ありがとう！浅黄！」

「いえ。リボン、私の力はどうでしたか？」

「（白石の力はバイパーと同じ幻覚か……。しかし白石にはまだ得体の

知らない力がある気がするな。警戒は怠らないでおくか）ああ、すげえな。

30分でツナをあそこまで泳げるようにできるとは「

「くふふ。格の違いってやつですよ。家庭教師が教えていないってことは

リボーンでもできなかったってことですか？」

浅黄は嘲笑を浮かべる。

「ちげーぞ。全部オレが教えても生徒の成長にはならねーからな」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえませんかよ」

「オレなら10分でできた」

「私は本気を出せば5分です」

「オレだって本気を出せば1分だぞ」

「なら30秒」

「オレだって10秒だぞ」

「馬鹿ですか？10秒で25メートル泳げるのはよっぽどの人だけですよ？」

「なら白石は泳げねーんだな」

「そんなことは言ってませんよ」

2人の後ろにはゴロゴロゴロゴロと文字が見えるようだ。

「ちよっ！2人とも喧嘩しないでよ！」

「チッ。今回は見逃してやるぞ」

「くぶぶぶぶ。それは「ちらのせりぶですよ。それでは私はもう帰

りますね

arrivederci

そう言って浅黄はプールから去って行った。

この後どうなったかといえば、プールの授業ではツナが練習したク
ロールではなく

平泳ぎだったという悲劇があったという。

しかしツナは浅黄の助言を覚えていて、何とか15メートル泳ぎき
ったそうだ。

標的31 夏祭り、来る！

今日は並盛が普段より一層にぎやかになる夏祭り兼花火大会の日だ。

そして浅葱といえば。

「おおー やっぱルツスはすごいなー、オカマなのに」

ルツスに浴衣を作ってもらって、送ってもらい、着ていた。

サイズは10才から微動だにしていなので大丈夫だ。

「姫はやっぱり何着ても可愛いな ししっ」

「くふふ ありがとう、ベル」

浅葱の浴衣は、これまた藍色を基調に、薄ピンクの蓮の花柄で、袖はこれまた

ぶかぶか、丈は膝ぐらいで、足には二本足の下駄をはいている。

少しでも背を高く見せたいのだろう。

帯は逆の薄ピンクを基調にして、背中に大きなリボンとなっている。

そして眼帯は変わらず、しかし首には季節でもないのにマフラーを巻き、素肌が

見えないようにしていた。

「ちで、と。ベル、私は夏祭り行ってくるね。風紀委員としてだけ
ど」

浅葱の左腕には風紀の腕章が確かについていた。

「じっっ 楽しんでますよ」

「ゴメンね。ベルにスクアールからの報告、絶対長そつなのに、任
せちゃって」

「いーんだよ。祭りいったことないんだろ？ししっ
」

「ありがと んじゃあおみやげ一杯持ってくるよ
」

「ああ。楽しみにしてるぜ
」

「うん 行ってきます
」

「さっさとー っっ」

その言葉を背後に浅葱は雲雀とともに夏祭り会場へと行った。

「恭弥、恭弥！あれは何なの？」

「浅黄って仕事で来てるってことわかってる？」

「だから5万だってちゃんと回収してるじゃん！で、射的って何？」

「はあ、仕方ないね。あの銃で景品を倒すんだよ。倒したやつはもらえるんだよ」

「おお よし、これもブルのお土産にする！ちょっとまってて」

と言った浅黄の両手にはたくさんのたこ焼きやら何やらが持たれて
いる。

さらには頭にまでバランスよく乗っけている。

「おじちゃん。一回やらせてください」

「あーよ」

と言っておじさんは笑って銃の弾を差し出してくる。

「や、や」

浅黄は片手に銃を持って狙いを定める。

「や、や」

の掛け声で弾が発射される。

すると一気に半数近くが倒れた。

おじさんはあんぐり口を開けていた。

「さ、早くつめてください」

「お、お、」

おじさんは目が虚ろになっていたが浅黄には関係ないだろう。

浅黄は差し出された袋を持って雲雀のもとへと戻る。

「じゃーん」

「ワオ。すごいね、じゃあ次行くよ」

「うん 次は、あのチョコバナナ屋かな？」

「5万」

雲雀が屋台をやっているものと言っ。

「雲雀さんー！？てか浅黄何その荷物ー！？」

「うん？鈴へのお土産ですよ」

「どんだけ・・・」

「ところで早く5万出してください。じゃないとあぁなりますよ」

そう言って浅黄が指差した方向には風紀委員が屋台を壊している光景があった。

「本当に壊してるー！じゃ、じゃあはい。5万、です」

「ん、よし。次行こう、恭弥」

「わかってるよ」

そのやり取りを交わしたあと、浅黄と雲雀は去って行った。

「ふわーあ。やっと集金大体終わったー
いるの ん？あの神社にたくさん

風紀乱してんじゃない
」

「
そうだね
」

そう言いつとも、雲雀と浅黄は走りだす。

もちろん浅黄は荷物を全てバランスよく持っている。

神社の階段を上り終わると同時に雲雀は近くにいた不良をトンファ
ーで殴り飛ばす。

「うれしくて身震いするよ、うまさうな群れを見つけたと思ったら、
追跡中の

引ったくり犯を大量捕獲」

「ヒバリさん……！」

「私もいますよ」

その声とともに現れたのは両手に大量の荷物を持ち、頭にもたくさんの荷物を

乗せた浅黄だった。

「浅黄!？」

「んだっ、いっしん」

「並中の風紀委員長と風紀委員だ!」

「あっちの女もか!？」

「見ろ、腕章してやがる」

(まさかヒバリさん、オレを助けに・・・?)

「集金の手間が省けるよ、君達がひったくつてくれた金は風紀が全部いたたく」

「ああっ!?!」

(またあの人が、自分のことばかりっ!!)

「むかつくアホがもう2人、ちょうどいい、中坊1人しとめるために柄の

悪い後輩を呼び過ぎちまってな、やつら力もてあましてんだわ」

「何人いるのー!?!」

「加減はいらねえ!?!そのいかれたガキどももしめてやれ!?!」

「ヒバリさんと白石さんでもこの数はやばいんじゃない、てか白石さん
あんなに

荷物もって戦えるの・・・?」

「だったらお前も、戦え」

そう言ったりポーンはツナに死ぬ気弾を打つ。

「リ・ポーン復活、死ぬ気で喧嘩ー!!オラア!きやがれ!」

「余計だな」

「たかが中坊3人だ！一気に仕掛ける！！」

その時爆発が起こる。

「10代目！！」

「助っ人とーじょー」

山本と獄寺だった。

「気に食わねーガキどもが、ぞろぞろと」

「ヒバリと白石と初の共同戦線だな」

「冗談じゃない、ひったくった金は僕がもらっ」

「そうです、一軒一軒集金も大変なんですよ」

「なあ？」

「やらん！」

「当然っス」

ツナは蹴りやパンチで、獄寺は爆弾などで、山本はバットで、雲雀は

トンファーを使いどんどん敵を倒していく。

浅黄は荷物などないかのように華麗に舞って、足技でどんどん倒していく。

浴衣と合わさって本当に何か踊りを舞っているようにも見える。

そしてツナたちが勝利を治めた。

浅黄たちはといえば、雲雀は浅黄に付き合わされて花火を神社の屋根の上で見ている。

「普通に集金するよりたくさん金手に入ったんじゃない？」

「まあね」

「そりゃあよかったね はなび、ってのも綺麗だね」

「・・・」

「無言は肯定だね」

という感じで花火を見ていたのだった。

標的32 肝だめし、来る！

ここは雲雀の家の中の浅葱の部屋。

今はベルと浅葱がいた。

「ベル、スクアーロの報告ってなんだったの？」

「ボスが隠されてる場所が見つかったってさ」

「！？」

「そのボス救出の作戦ができたから、明日の朝一番の飛行機で帰ってこいってさ」

「わかったよ んじゃあ今日は私は折角だし並盛めぐりをしてくるよ」

「今からか？」

もう真夜中である。

「うん んじゃ行ってきます」

浅葱はショートパンツに長袖Tシャツ、夏祭りのときの下駄という格好で出かけた。

何気の下駄を気に入っていた浅葱だった。

浅葱は今並盛商店街を歩いていた。

カランコロンと浅葱の下駄の音だけが響きわたる。

「むー、でももう真夜中だからどこもおもしろいのないなあ。あ、墓地いったら

誰か肝だめしとかやってないかな。よし、行こう」

と言って浅黄は意気揚々と墓地へと走って行った。

浅黄が墓地について最初に見たのは、変な形をした門、それに変な男にその門に

つれさらねよつとしているツナだった。

「あ、変な男が増えた。変な男Bの電気攻撃でAが元気になってるし。てゆうーか

あの門の向こうって死後の世界？餓鬼道、かな？」

浅黄は眼帯を取って、左目の文字を六から二の餓鬼道にする。

「うん、やっぱりあの先は餓鬼道だね。ってかなんで餓鬼道からこっちに

これなんだよ。思い出すと腹たつ。あんなのずっと閉まってくんない

かなー。てか今すぐに。こーなったらあの引っ張ってる変な男を脅

して

閉じさせるか。よし、そうしよう」

浅黄はそう言って変な男に近づいていき、とび蹴りを食らわす。

「ぐほあー」

と言って変な男Aは吹き飛ばす。

「な、何をする！・・・！」

しかし男は浅黄の左目を見た途端に顔色を変える。

「あ、眼帯忘れてた」

「え、浅黄、その目は一体・・・？」

「そうか！お前が哀れな双子の片割れか！」

それを聞いた途端に浅黄の表情が変わる。

「その名で呼ぶな」

浅黄は幻覚で変な男Aの周りに毒蛇を数十体と出す。

「ひ、ひ」

「私は、私達はもうあの世界にはいないんだ。あれはもう過去の、

記憶の中でしかない。今はこの世界の住人なんだ。だから、お前は

おとなしく餓鬼道へと帰れ」

そう告げると浅黄の幻覚の蛇が実体となり、変な男Aを扉の中へと連れ去っていく。

男が門に完全に入ると門は消えた。

そして浅黄の左目の文字も六に戻る。

「てゆーか文字を二にする意味なかったな・・・」

そこでツナが浅黄に話しかける。

「あ、浅黄！その目って一体、何なの？眼帯も……。見えないんじゃないかったの？」

「（もう見られたし、イタリアにも帰るんだし、いつか（見えるよ。眼帯は

この目を見られて怪しまれるのが嫌だったからさ。まあもう必要ないけどね。

見られたし。私には、私達には六つの前世の記憶がある。そしてそれぞれ

世界でスキルを得たんだよ」

それを聞くとツナの頭には？が浮かぶ。

「私達？それって浅黄と鈴のこと？でも哀れな双子、って・・・？」

「くふふ。まあいいです、もう明日にはイタリアに戻りますし、教えて差し上げますよ」

「えっ！イタリアに帰っちゃうの？」

「ええ、呼ばれましたね。本題に戻りましょうか。その前に、リボーン」

できてきたらどうですか？そんな草むらひに隠れずじ

それを聞き終わるとリボンが草むらひから出てくる。

「チッ。ばれたのか、じゃあとっとと話せ、ちっきの話を」

「うわー、命令口調だと友達いなくなりますよ？どうでもいいですけど」。

ぶっちゃけると私と鈴は本当の兄妹なんかじゃないです。そして私には

別に本物の双子の兄がいます。さらにぶっちゃけると私は今15才、

鈴は16才です。でも年齢に関しては恭弥も意味不明なので問題は

ないでしょうけど」

「んなー！ー！じゃ、じゃあ浅黄って先輩、なの？」

「ツツコムところがちげーぞ、ツナ。何で年齢、この調子で行くと
名前も

偽名か・・・？を偽装して並中に入ったんだ？」

「くふふ。そこまでは教えられませんよ。いずれわかるでしょうしね。」

それでは、私はもう帰ります。 a r r i v e d e r c i i 「

と言つと浅黄は去つて行つた。

（やっぱ白石は油断ならねえな。哀れな双子、つてのも何なのか

わからねえし。それに左目に浮かぶ文字。調べる価値は、あるか）

とリポーンは1人考えていた。

標的33 久々のイタリア、来る！

「ふわあーあ、ベル、聞いてないよ。飛行機が7時とか、それで4時に起きるとか・・・」

浅葱はにっこり笑う。

「うっ、でもまあ、細かいことは気にすんな」

「うーん。ま、いつかそれよりもうそろそろでないとかばいんじやない？」

「ししっ んじゃ行くか」

「うん。恭弥は、置手紙残しとくよ内容は、今までありがとうございました。

イタリアの実家に帰ります。もうあなたといるなんて堪えられないの！

みたいな b y居候組く」

「ししっ それ次あったときの雲雀がすごいことなってんじゃん
」

「でも楽しそうっしょ」

「まーな んじゃあ今度こそ出発しよっぜ」

「ん」

そして浅葱とベルは並盛に来たときの服装、浅葱は眼帯を取っているが、

で空港へと向かった。

数時間かかり、やっとイタリアに到着する。

そして今ベルと浅葱はアジトのある森の中を枝から枝へと飛び移って移動していた。

「あ、髪の色もつ幻覚解くからね」

「ん」

「文字でベルが返すと浅葱は幻覚を解き、もとの髪色に戻る。」

「さっぴもとの色のほつがっくらくるぬ」

「まーな、この色で十数年と生きてるからなー、しししっ ほら、

もうそろそろ着くぜ」

それを聞くと浅葱はスピードを上げる。

そして門が見えると一際強く枝を蹴り、勢いをつけて門を蹴り破る。

「一番乗りー」

」王子二番「

すると久しぶりの怒声が響く。

」うおおおい！！！何門壊してんだあ！！！」

それに浅葱はてへっ、っっていうポーズをとり、

「だってー、久しぶりだったんだもん」

「ぶざけてんじゃねえぞおー！！！！」

この言い争いはルツスがご飯に呼びに来るまで続いたとか……。

ルツスの作った夕飯を食べた後に幹部は会議室に集合していた。

「とりあえず、浅葱いゝ！旅行とか言って沢田綱吉と会ってやがったなあゝ！！！」

「それが何か？みたいなの」

「てめ」もう諦めたほうがいいわよう　浅ちゃんがこんな性格なのはもう

わかりきったことでしょう？」「ルツス……。チッ」

「んじゃあボスを助ける作戦、っての早く発表してよ、スクアアール」

浅葱はそついつといつもより少しかは真面目な色の含んだ目になった。

ここから3話ぐらい番外編で黒曜編です。

なぜ番外編というかは浅葱がでないからです。

名前はですが。

浅葱がでないならいらないだろうと思うかもですが、原作にない会話があるので乗せときます。

あと、お気に入りポイント、本当ありがとうございます
閲覧数もいつの間にか増えています・・・。

本当にありがとうございます

感想もいつでもまっています

数日前から並中の生徒は正体不明のものたちに襲撃されていた。

最初は風紀委員だけだったのだが今では無差別としか思えない被害となっていた。

しかし共通点もあり、襲われたものは皆歯を抜かれていた。

そして抜かれる数は一本ずつ減っていたのだ。

まるでカウントダウンするようだ。

そしてとうとう雲雀が敵のアジトを見つけ、雲雀はそこへ敵を殲滅するために向かった。

バキッ。

ドカッ。

ここは黒曜ヘルシーセンター。

新道が出来てほぼ使われなくなった旧道の脇に建つ廃墟の一部だ。

そしてそこには大量の不良が気絶して転がっていた。

そんなものには目もくれず不良を気絶させた少年、並盛中風紀委員
長の

雲雀恭弥は奥へ奥へと進んで行く。

そしてついに最奥である3つ部屋に着く。

しかしそこにいた人物を見た雲雀は驚愕した。

いた少年は浅黄と同じパイナツポーヘアに、浅黄がよく着ていたのと同じ柄の

Tシャツ、それに浅黄と全くの瓜二つの顔だった。

違うところと言えばTシャツ以外の服装と髪の色と身長、あと目の色が反対と

いづぐらいだろつ。

まあ浅葱は眼帯をしていたので浅葱のオッドアイについては雲雀は知らないが。

浅黄は絶対10才以下にしか見えない容姿だけどそれでさえ瓜二つなのに

成長したらもっと瓜二つになるのだろう。

「浅黄？」

雲雀は思わず呟く。

すると少年は答える。

「おや？浅黄とは浅葱のことですか？」

「どづいづいことづうち風の風紀委員の白石浅黄は君と何か関係があるのかい？」

「クフフ。浅葱は今どこにいるのです?」

「浅黄ならちよっと前にイタリアに帰ったらしいよ」

「らしい、とは?」

「>今までありがとうございました。イタリアの実家に帰ります。
もうあなたと

いるなんて堪えられないの!みたいな by居候組くって書置きだ
け置いていきなり

消えたんだよ」

そう言った雲雀は明らかにイラついていた。

そしてそれを聞いた少年はといつと、

「ク、フ、クハハハハハ！いかにも浅葱らしいですねえ」

「それで？浅黄は君の何なんだい？」

「まず言つと白石浅黄というのは偽名ですよ。本当の名前は六道浅葱です。」

そして僕は六道骸です」

「ふーん。それじゃあ浅葱は君の何？何でそんなに似ているんだい？」

「双子の妹、ですよ」

「だからか」

「はい？」

「だから浅葱と君はそんなに口調が似ていて、僕を苛立たせるのも似ているんだね」

「ああ、敬語を使うときに浅葱は僕と似ていますね」

「似ているどいじろじゃなくまるっきり同じだよ」

「クフフ。そうですか。浅葱と僕は確かに同一ですね、クフフフフ」

「ふーん、まあいいさ。君は僕に咬み殺されるんだからね」

と云って雲雀はトンファーを構える。

「クフフ。そんなに焦らないでください。並盛中風紀委員長雲雀恭弥」

「何で知ってるの？」

「何事にも調査は重要ということですよ。そしてそんな貴方に急いで

用意したプレゼントがあるんですよ」

骸は何かのボタンをポチッと鳴らす。

するとあたりに幻想的な桜がたくさん現れる。

桜クラ病である雲雀は膝をつく。

ボコッ。

バキッ。

桜クラ病で動けない雲雀を骸は痛めつけていく。

それでも雲雀は骸をにらみつける。

「おや？もしかして桜さえなければ、とっていますか？それは勘違い

ですよ。君レベルの男なら何人も見てきましたし、幾人も葬ってきました。

地獄のような、場所だね。さあ、続けましょう」

そう言った骸の右目は一の文字になっていた。

ボコッ。

バキヤッ。

そしてまた骸は雲雀を殴っていった。

これで最強と思われていた風紀委員長は生涯忘れることはないであろう敗北を

骸からは現在進行形、浅葱からは初めて会ったときの余裕の態度にベルとの

合わせ技e t cと、六道双子それぞれから受けたことになるのだった。

ツナは今九代目の指令で骸討伐に来ていた。

復讐者というマフィアの牢獄から脱獄した骸を捕獲せよ、というよ
うな指令だ。

もちろんツナはやる気ではなかったのだが。

ツナ、リボーン、山本、獄寺、ビアンキ、それになぜか佐川馬羅も
一緒に来ている。

今現在役立たずだが・・・。

そして現在は主要メンバーの犬は山本が倒し、MMもビアンキが倒し、バース

というおっさんもドクターシャマルとイーピン、ランボの協力により倒した。

千種は獄寺がすでに重傷を負わせているはずなので残りは六道骸だけだ。

ツナ達が六道骸だと思っている人物は実際は骸に操られているランチアという

人物なのだがそれを知るよしはなかった。

骸がいるであろう建物へ向かっているとずっと行方不明だったフウ太が物陰から

現れたが、すぐに走り去って行ってしまい、ツナは追いかけていく。

追いかけていった先にいたのはフウ太ではなく1人の黒曜生だった。

それが本当の六道骸なのだがそれをツナは知らない。

ツナが近づくと少年はツナのほうに振り向いた。

それはツナを驚愕させるものだった。

「浅黄!？」

「おや、また間違えられましたね」

「え!?!また?あれ!?!でも浅黄、でっかくなつた・・・?」

「クフフ。僕は浅黄とやらではないですよ?」

「え、あ!?!すみません!?!じゃあ何であなたはここに?」

「ああ、僕は捕まっていたんです。それであなたを見つけて助けに

来てくれたんだと、安心して……」

「あ、そうだったんですか……。でもそんな助けに来たっていても

赤ちゃんとか女の人もいるんですよ」

「へー、そうなんですか。その赤ちゃんは何か間接的にするんです

か？」

「いや、そ、それにしても捕まってたなんて大変ですね。」

「僕は質問してるんですけど。」

そう言った骸の右目には六の文字が浮かんでいた。

「なっ！浅黄と同じ・・・？（てか怖ー！骸に捕まると皆あんなふうに」

なっちゃうのー！？）す、すみません！友達が待ってるので！後で
助けます！」

と言い残し、ツナは山本達のもとへと走っていった。

残された骸はといえば、

「クフフ。あの赤ん坊はアルコバレーノで間違いないようですね。
それに

しても浅葱は何でボンゴレの連中と知り合いなんでしょうねえ。まあ

次会ったときに全てわかりますか」

といい、黒曜ヘルシーセンターへと戻っていった。

ツナはとうとうリボンと、傷1つない馬羅と一緒に黒曜ヘルシー
ランドの

最奥であるう部屋にたどり着く。

「ツナ、油断するなよ」

「う、う」

リボンの警告に返事をして扉を開ける。

そこで見たものはリボンですら驚いた。

「あれ、さっきの!？」

「白石・・・?」

「クハハハハ! アルコバレーノでさえも間違えますか!?! ああ、浅葱も」

アルコバレーノでしたね」

それにリボーンは殺気をこめて言う。

「てめーが本物の六道骸、か。それよりもてめえは復讐者に捕まって

いたはずだ。なぜそこまで知ってる？」

「クフフ。あなたなら何かしら調べたのではないですか？どこまで
僕達の

ことを知っているんです?」

骸は殺気をこめて言い放つ。

「リ、リボーン君、話して、く、くださら、ない?」

馬羅は骸の殺気に直接当てられたわけではないのに震えて、立っているのもやっと。

という状況になっていた。

それを見たりボーンは舌打ちする。

「チツ。だからてめえはついてくるな、つったろ？」

「うう。ひっく。ご、ごめんなさいませ。ワ、ワタクシは、す、少しでも

役に立ちたくて。つ、次こそは役に、た、たって見せますわ。ですから、

今回は、も、もう、殺気が・・・」

馬羅は冷や汗が滴っていた。

「オレが調べてわかったのはほんの少しだぞ。あいつがどっかの戸籍作成屋に

頼んで日本の戸籍を偽造で作ったってぐらいだぞ。でも本名とかは

全然わからなかった」

「クフフ。その程度しかわからなかったんですか？アルコバレーノ
リボーン。」

僕と浅葱が双子、ということもそれじゃあ知らないようですね。君
たちがいう

白石浅黄は僕、六道骸の双子の妹ですよ」

「・・・!？」

「まあいいですよ、少しだけ教えて差し上げます。確かに僕は復讐
者に

捕まっていたので何が起こったとかそういうのは全くといってもし

いほごに

世間知らず状態です。けれど、浅葱と僕は精神、魂レベルから繋がっています。

なので、僕は浅葱のことなら誰よりもわかるんですよ。浅葱も同様に僕のこと

なら誰よりもわかる」

「!？」

「けどまあ、数年前に繋がりをせき止める契約をしたので次現実で

会い、

。契約が解かれるまでは感情ぐらいしかわからないんですけどね・・・

アルコバレーノだとわかったのは浅葱がアルコバレーノとなったとき

その契約が少し揺らいだからです」

「じゃあやっぱ白石ってのは偽名だったんだな。本名は六道浅葱、か？」

「おや、わからなかったのでは？」

「無のアルコバレーノができたとき知識が入ってきたときに名前も入ってきたんだぞ。」

「けどあいつは漆黒のおしゃぶりを持っていながら白石浅黄となつた。オレは鉄の」

「帽子の男も信じたくねえからな、だからあいつが名乗った名前ですんでいたんだぞ。」

「鉄の帽子の男、とやらはずいぶん嫌われているようですね。」

「？」

「浅葱もあの男が大嫌いのようにだね。その男のことを考えているであらう時には

負の感情が大量にながれこんでくるのですよ」

「そうか・・・」

「え、リボン？鉄の帽子の男って、一体？」

ツナがりボーンに問う。

「何でもねーぞ。それよりオレ達の目的は骸退治だったはずだぞ」

「あー！」

「何忘れてんだ。ちゃっちやと倒してママンの料理を食べるぞ」

「うん」

そして骸はツナに負ける。

骸と犬、千種は復讐者に再び捕まった。

結局馬羅は、柱の影でぶるぶる震えて隠れていたら、憑依されて、

ツナの邪魔になり、足手まといになるだけなのだった。

こうして黒曜生襲撃事件は幕を閉じたのだった。

標的34 XANXUS救出、来る！

時は戻り、浅葱とベルがイタリアへ戻って一週間ほどたったある日の深夜。

「浅葱、準備はいいかあ？」

「オッケーです」

「じゃあ行くぞお！」

「了解」

ボンゴレ独立暗殺部隊VARI A幹部はある作戦を実行していた。

【XANXUSを絶対救出しようぜ 大作戦】である。

ちなみに名づけたのは浅葱。

とりあえず内容を要約して書いておく。

XANXUSが閉じ込められている氷は浅葱にしか解けないのでこの作戦では

浅葱が重要となる。

もう一つ重要なことが、XANXUSを救出できても施設のボンゴレの人間を

皆殺しにしてもまたXANXUSは捕まって、ボスになれないので騒ぎを

起こさないで、XANXUSが救出されたことすら気づかれないように

救出する計画。

なので囿などは一切使わずにただ姿を発見されないように最下層へと浅葱は

行く必要がある。

なので最下層へと行くメンバーは浅葱とスクアーロの2人だけだ。

スクアーロの理由は何かあっても冷静で賢明な判断をするため、というのと

8年ぶりに氷からでれてもすぐには動けないだろうからXANXUSを

おんぶする要員としてだ。

ベル、ルツス、レヴィ、マーモンは施設の近くの人に見つからない
ところで

車に乗って待機だ。

これまたいつもなら枝から枝へ飛んでいくが車の中でもXANXU
Sの治療を

するためである。

そして話は戻り、今浅葱とスクアーロは人気のない通路を闇に紛れ、

気配と足音を消して最下層へと進んでいる。

10分ほどかかってやっと最下層へとたどり着く。

中には浅葱の幻覚で見張りを寝かしつけてから入った。

中はとても寒かった。

「おおう、以外と寒い・・・？」

「なんで疑問なんだあ・・・」

スクアーロも寒さでかいつもより声は小さい。

「だって昔の冬はこれが普通だったし」

「……。そうか……」

昔、とはエストラレーネオのときのことだろう。

「そんな気落とさなくていいよ。さあ、ちやつちやつとボスを助けようじゃないか」

「あゝ」

進んで行くとXANXUSが閉じ込められている大きな氷があった。

「さて、と。やっと私の修行の成果、ってやつだね」

「さっさと溶かせえ」

「わかってるって んじゃあ溶かすよ」

そして浅葱は右手を掲げる。

指パッチンの形で。

「3」

その声で浅葱の周りを黒と藍色の二色の、でも純度がとても高く綺麗な麗で

幻想的な炎が渦巻く。

「
2
」

その声で炎が四方八方に一度飛び、氷と床の設置面へと飛んでいく。

その炎が　の中に星型が入ったような模様、いわゆる魔法陣の形になる。

「1」

その声で炎の魔法陣のようなものの純度がさらに増す。

「0」

その声とともにパチンッ、と指パッチンする。

指パツチンが鳴らされた刹那。

ゴオオオオツ！

と魔法陣のようなものから氷を余裕で飲み込む黒と藍色の混ざった
火柱が立ち上る。

「うっおっおっおいっ！あれじゃあXANXUSも燃えてんじや
ねえだろっ

なあ……！！……つーかあの魔法陣はなんだあ……！！」

「まさかー 私を誰だと思ってんの？私は何年もこの死ぬ気の炎
というものを

操る修行をしたんだよ？もう死ぬ気の炎のエキスパートさ」

「そっなのか？」

「ゴメン、エキスパートなんて嘘。でも操れるようにはなっただ
あ、あ、あ」

魔法陣つてのは気分だから何も関係ないよ」

「うおおおい……！」

「あ、氷溶けたよ」

スクアーロの叫びは浅葱には届かない。

浅葱が言った通り氷は溶けていた。

それに伴い藍色と黒色の炎は消える。

XANXUSがずしゃっ、と倒れる。

「XANXUS！」

スクアードが駆け寄っていく。

どっちら息はあったらしい。

「あーあ、疲れた。まあボスも助かったしね。よしとしようか。ボス
スガ

いたら楽しいからね」

浅葱は今にも倒れそうなほどだったが笑っていた。

楽しいことも楽しいことも大好きな浅葱は簡単にいえば愉快犯なのである。

その後は、スクアール口がXANXUSをかついで施設を無事誰にも見つかることなく

出れて、アジトにも戻れたので【XANXUSを絶対救出しようぜ
大作戦】は

成功したのだった。

そしてXANXUSといえば、いつの間にか意識を戻して、8年前と同じ、いや

それ以上じゃないかという暴君ぶりを発揮していたのだった。

標的35 オッタピオの最期、来る！

XANXUSを救出してから6日たった。

浅葱は今、スクアールとマーモンとともにXANXUSの部屋へと来ていた。

「ふわーあ。眠い……。ボスー、眠いので早く用件をお願いします！」

そして浅葱はなぜか敬礼をビシッと決める。

眠くてテンションが変になっているようだ。

「明日にオツタビオ暗殺兼モスカの設計図の入手を目的とした作戦を行う。」

ただしモスカの設計図という真の目的はてめえらにしか話さねえ」

モスカという単語を聞いた瞬間、浅葱の目から眠気が消え去った。

「なんで、モスカの設計図がまだ出回ってんの？」

それにはマーモンが答える。

「エストラーネオの本部を壊滅させたときに運がよくその時本部に
いなかった

モスカ研究員はモスカの資料をイタリア軍に売って、自身もイタリ
ア軍で

研究させてもらえるようにしたらしいね」

そしてXANXUSが口をはさむ。

「しかしそいつは今は他のイタリア軍のものたちと一緒に抜けたらしい。

そして今度はオッタビオにモスカの情報を売った。しかしそれは旧式の情報だ。

完全版の情報は自分達がピンチになったときのために残しておいた。

今がそのピンチのときだ。だがオッタビオは完全版を力づくで手に入れようと

している。すると元イタリア軍のものたちはオッタビオの管理している

人工島マレ・ディアボラを襲撃するだろう。それをオレ達で解決して、

モスカの情報を得、オツタビオの野郎を殺す。それが今回の任務だ」

「わかったぜえ！ XANXUS!!! 早速他のやつらに伝えてくるぜ！」

「相変わらずうるさいなあ、カス鯨君は」

「そうだね」

と言って浅葱とマーモンもXANXUSの部屋を出て行く。

附口。

浅葱は他の幹部メンバーではなくXANXUSと一緒にオッタビオの所に向かっていた。

「ねーボスー。一個聞いていい？」

「なんだ」

「何で私はベル達と一緒にじゃなかったの？」

「あつちはあれで十分だったからだ」

「へー、じゃあボスはボス1人じゃあ足りなかったってことかな」

「消されてえか」

「すいせん！んで、理由は？」

「てめえは作戦とかは全然だが、相手を言葉で絶望させたり錯乱させるの得意だろ」

「大好き」

「オツタビオの言質をとらせる」

「それは、オツタビオが元イタリア軍と繋がっていたのと、揺りかごのとき

作戦をちくつたこと、あとはボスに対する本心、それにモス力を出させて、

絶望させればいいのかな
「

「
ああ
「

「くふふ それなら得意分野だよ 戦いも殺しも好きだけど相手の
混乱してる様を

見るのも楽しいからね
「

そう言った浅葱は実に愉しそうに嗤う。

見た目10才では不気味でしかない表情だった。

それから10分ほどたち、オツタビオがいる部屋にたどり着く。

ガチャッ。

とノックも無しに浅葱はドアを開ける。

「
おわっ」

するとオツタビオの他にもたくさんの方がいた。

「浅葱に、そん、な……。ああ」

と独り言を呟くとオツタビオは浅葱の後ろのXANXUSに対して
ひざをついた。

「お久しぶりです。10代目」

その言葉で周りの部下がざわめく。

しかし口を開いたのはXANXUSやオツタビオではなくこの場に

似つかわしくない10才の見た目を持つ者。

浅葱だった。

「オツタビオ、私のこと忘れてます?」

「いえ、忘れてなど。それにしても昔に比べ成長しましたねえ」

ブチッ。

「嫌味かこの野郎ッ！つーか私の名前気軽にお前みたいな貧弱もやし
が呼ぶな！」

いきなり口調が崩れている浅葱である。

「すみません。では貴方の通り名プリンセス・ザ・アツシア首狩り姫から

取ってアツシア、ならいいですか？」

いかにも子供に対する態度のオツタビオに浅葱はイラつきが早くも頂点に達する。

「（これもオツタビオが嫌いな1つなんだよ。子供扱いしやがって・
・（まあいいです）」

820

しかしイラつきを隠して浅葱は敬語に戻る。

「さて、と。状況を一応調べてきたですけど言ってもらえますか？

そしてこの件は

私達V A R I Aが解決するのであなたは手を出さないでください」

「なっ。今は謎の武装集団が島にて懇親パーティを襲い、参加者およそ150名が

人質にとられている、程度しかわかっていませんが、これには私の責任があり」

だがオツタビオのセリフをさえぎり浅葱は言う。

「オツタビオ君。君は昔V A R I A副隊長だったんだからって私達を頼んでも

いないのかばってでしょう?」

「はい。それが役目でしたから」

「役目?作戦に反対した者の?それとも作戦をチクツたことに対して、ですか?」

浅葱はオツタビオに近づいてオツタビオにしか聞こえないような距離で、囁く。

それに対してオツタビオはビクッ、とわかりずらいが確かに肩を揺らす。

「くふふ じゃあこれはかばってくれたお礼、ということにしておきましようか。」

お礼なんですから手は出してはダメですよ？これで手を出したらあなたは何の

お礼も無碍にするただの偽善者、という肩書きにもなりますかね？
くふふ
「

浅葱の言っていることは筋の通ってないところもあるが、動揺していたオツタビオの

ことには手は出さない、ということだけが刻まれていく。

まさに浅葱の手の平の上状態である。

「わかり、ました。私は今回の件には手を出しません」

「ん、それでいいです。じゃあ一つ質問させてもらいましょう。敵の正体って何ですか？」

「!?!なぜ、それだけを？」

「だって、この場にはオツタビオが集めたであろう部下の気配がた
くさん

あります。それはどれも結構強い部類の気配だ。うまく気配をかく
して

いますからね。そして全員が全員出撃要員なんでしょう?今のあな
たの

様子からしてこれ以上集める様子もない。出撃要員を適切に集める、

ということは敵の正体、強さを知っているのでしょうか?」

「ああ、やはりあなたに口で敵う者はいませんね。これでも結構勉強したんですよ?」

「で?敵の正体は何なんです?」

「敵の正体は元イタリア軍の者と思われます。軍事に作られたあの島だからこそ」

襲撃も成功したのでしょう」

「へえ、さすがだね。そこまでわかってるなんて。でもさあ」

そこで浅葱は言葉を切って、満面の笑みで嗤う。

「さっきは、今は謎の武装集団が島にて懇親パーティを襲い、

参加者およそ150名が人質にとられている、程度しかわかっていませんが、

って言いましたよね？それから会話を私としている間、通信もしている様子も

無かった。ってことは今の情報は最初から知っていたってことですよね

何で言わなかったんです？」

その言葉にオッサビオの瞳がわずかに揺れる。

「ああ、もしかしてそれを隠しておきたかったのですか？隠さないと何か

不都合が生じる、とかですか？例えば、その犯人グループと自分が繋がって

いたり、その犯人グループに用があった、とかですか？それで多くの情報を

与えて私達が作戦を成功させたら困るから、とかですか？」

それを聞いてオツタビオの額には冷や汗が浮かんでいた。

「何を、言っているんですか？そんなのただの推測に、すぎな」

浅葱は言葉をたえぎって言う。

「ええ、ただの推測ですよ。けれど、そのただの私の推測に

なぜ貴方は動揺しているんです？」

それにオツタビオはハッ、とする。

「あ、はは。もう隠し事は通用しないようですね。しかし、それも

あなた方を

皆殺しにすれば万事解決です」

オツタビオはにたあ、と笑う。

するとどこかからXANXUSに向けて光の光線、
圧縮粒子砲が放たれる。

ドカァン。

と轟音が鳴り、煙が立ち込める。

浅葱は煙の外側にいる。

オツタビオは煙に向かって話しかける。

「できてください。貴方がこの程度でやられるはずないでしょう？」

煙が晴れた先には傷1つないXANXUSが立っていた。

「それにしてもなぜそこまでわかつたんですか？ほんの数日前まで

閉じ込められていた貴方が」

「ボンゴレの血に伝わるものを知ってるだろう」

「なっ、そんなはずはない！なぜなら貴方は「オツタビオ！」」

XANXUSが声を荒げる。

「なぜてめえがそんなことを知ってる？やはりてめえはあの場にい
やがったな。」

作戦に反対していたのにあの場にいたってことは、やはりてめえが
作戦を上層部に

バラしたな」

「チツ。やれ！ヴェツキオ・モスカ！！！」

もつちやくそになったのかオツタビオは声を上げる。

するとまた圧縮粒子砲がXANXUSに向かって放たれる。

「浅葱」

XANXUSは一言発する。

「りょーうかい」

浅葱は圧縮粒子砲とXANXUSの間に立ち、短刀二本を構える。

そして短刀二本と圧縮粒子砲を微妙な角度でぶつけて、圧縮粒子砲を弾く。

ドオオンッ。

弾かれた圧縮粒子法は天井にぶつかり、天井に穴を開ける。

「なっ！圧縮粒子砲を弾くだと！」

「これはまだプロトタイプでしょう？そんなものの攻撃を弾き返すぐらい簡単ですよ」

浅葱は笑いながら言う。

「クツ。まだ本領はここからだあ！死ぬ、XANXUS！」

それを聞くとXANXUSはにやり、と笑う。

「今の言葉、聞いたぞ！オツタビオ、てめえを反逆罪で殺す！それにモス力を」

見たものは放って置けねえ。てめえらも全員殺す！」

それを聞いたオツタビオの部下たちは一気に顔が青ざめる。

「やれ、浅葱」

「それを待ってたよ ボス」

そして反逆罪という名の虐殺が始まる。

標的36 特異体質の少女、来る！

あの後は、虐殺、じゃなくて反逆罪として皆殺しが終わったあとに
マーモンが

やってきて、モス力設計図完全版を持ってきた。

それを手に入れたことで作戦は成功ということになった。

今は急ピッチでモス力を完成させようとしている。

完成するまでは幹部は待機、ということになった。

作戦翌日。

浅葱は自室のベッドに横になって目をつぶっていた。

一見すれば眠っているようだが違う。

精神世界で幻想散歩をしているのだ。

アサットはベルのところで遊びをしていた。

内容はベルが一方的にナイフを投げてアサットはそれを避ける、というもの。

動物虐待にも見えるがアサットもそれを楽しんでいるので問題はな

い。

精神世界。

おだやかな風が吹いてどこまでも続いているような草原。

そこで浅葱は1人歩いていた。

「あー やっぱ精神世界は何度来てもいいねえ。まあ誰もいないけど。」

アサットはこんな深いところまでこれないし、ムク兄は、現実世界で

一度憑依してるのでもいいから会わないと、こっちで会ったとしても

認識できないし……。ま、いつか いつか会えるだろうし」

そう言って浅葱は歩き出す。

「さて、散歩しますか　って、あれ？誰がいる？」

浅葱の視線の先には1人の少女がいた。

藍色の瞳に藍色の髪、パイナップルヘアではない。

「こんな深いところにいるなんてね。話しかけてみますか」

そう呟くと浅葱は走って少女のもとへと近づく。

少女はつい先ほどまで生死の境をさまよっくらしいに重傷の患者だった。

けれど、骸と出会い契約を交わしてその危機から脱したのだった。

そして骸は先ほど少女の前から姿を消した。

「骸様。……。また、会える、よね……」

「ムク兄を知ってるの？」

「!？」

後ろからひょこっ、と現れた自分よりも幼そうな外見の少女。

しかし、その姿は。

「骸、様？」

「くふふふ。私がムク兄、じゃなくて六道骸だと思っ？」

「……。少し、違う……?」

「くふふふ。そんなに似てるかなあ、私とムク兄は」

「骸様の妹、なの?」

「そーだよ 私は六道浅葱って名前で六道骸の双子の妹さ ところで、ムク兄と」

君はどんな関係なのかな？」

すると浅葱は一步で少女に近づぐ。

そして手を掴んで倒れないようにして、自分の額を背伸びしてこっ
ん、

850

と少女の額と合わせる。

「え、と。何、してる、の？」

「んー。ここは精神世界だよ？精神でできている。そしてこんな深いところと

なれば記憶を読むことぐらい簡単なんだよ。それに君は何か特殊なようだから

読みやすいし、ムク兄の力が宿っているでしょ？だから余計簡単だよ」

「記憶、を、読んでもの？」

「うん はい。読み終わった」

と言って浅葱は離れていく。

浅葱は少女のこれまでの記憶を全てではないが読んだ。

少女は猫を守って轢かれたこと。

それにより重傷を負い、移植が必要だったけど親に見捨てられたこと。

それでもう死ぬはずだったけれど、骸の宿主となるかわりに内臓を骸の

強力な幻覚で作ってもらい、生きていられること。

「君の名前は凧、じゃなくて今はクローム髑髏、か」

そう言った浅葱は淡く微笑んだ。

「そうだね。クローム、ムク兄が力を使えるようにしてあげているんだ、

私の力も少し貸してあげるよ」

「え!？」

「そのかわりに私とも契約してもらおうけどね」

「それって、骸様と、同じ?」

「うん。ムク兄と同じ関係ってことだね」

「貴方も、どこかに囚われているの?」

「いいや、私は違うよ。理由は、んー、気まぐれ、ってやつだよ。でも憑依先が」

増えて不便なことはないからね クロームも使える力が増えて得はあるよ?」

「じゃあ、お願い、します・・・?」

「くふふ。じゃあちょっと動かないでね」

浅葱はそう言っって有幻覚ではなく骸の使う三叉槍の先端と同じ種類の大鎌を創る。

そしてそれをクロームの胸に突き刺す。

「え？」

「大丈夫だよ」

と言うと大鎌は霧となって大鎌の刺し口に入っていく。

「私がクロームに与えたものは、一つ目にムク兄と同じく強力な内臓の幻覚だよ。」

強力な幻覚ってのは幻覚にかかっているかぎりには有幻覚と同じ効力だしね。」

あ、有幻覚ってのは実体のある幻覚のことね。これなら例えば幻覚の火柱なら」

騙されてなかったら効かないけど有幻覚のものなら実体があるのでから問答無用で」

「焼くことができる便利なものだよ」

「でも、それって、二重になって、るんじゃない？？」

「そこが重要なんだよ。ムク兄のは三叉槍が壊されたら内臓も壊れる。」

でも私は直接クロームの体内に媒介を入れたからね。内臓が壊れることは

ないよ。いつもはムク兄のほうが使われているけどそれが無くなったら私のが

自動的に機能する。それ以外の時はその分の私の力が使える、ってことね

逆に言えば私ので内臓を創ってるときは他に使える力が減るけどね」

「ありがとうございます」

「どーいたしまして 私の貸した力は幻覚を創る力だよ」

「骸様の地獄道と同じ幻覚の力・・・？」

「でも私の力分幻覚が強力になるさ」

「ありがとうございます、ごぞいます。浅葱様」

「ん。私のことは呼び捨てでもいいんだよ」

「……浅葱様でも、いいですか……？」

「んー。まあ本人がいうならいつか。ところでせう」

「？」

「折角会ったんだ。一緒に遊ぼうぜ」

「!?!?・・・いい、の？私なんかで・・・」

「私なんか、とかって自分を墮としちゃダメだよ。クロームだからいいんだよ。」

私は会ったばかりなのにクロームはお気に入りになっちゃったよだから、

一緒に遊んでほしいな、風」

「／／／・・・じゃあ、何して、遊ぶ？」

そう言った風は照れからか頬が赤く染まっていたが楽しそうな表情だった。

標的37 XANXUSの策略、来る！

夕時、浅葱の部屋。

むくり、と浅葱は起き上がる。

ちなみに浅葱の今の格好は藍色の着流しである。

帯は黒色。

明らかに小さい男の子用着流しである。

雲雀の家に行ってから浅葱は着流しを知り、お気に入りとなったのだ。

浅葱は雲雀の小さいころの残っていた着流しを脅し、じゃなく話し合いにより

自分のものにしたのだ。

「んー。おもしろかったー クロームはいい子だね。あんな子は希少価値だね。

体質面からも精神面からも。また遊ぶことにしよー」

そう言つと浅葱はベッドから降りて、着流しのままロビーへと向かう。

「着流しはやっぱりいいね 楽だし何より下駄つてのもいいよね
背も高く見えるし

カランコロン鳴る音が綺麗だ あ、いつそ隊服のコートを羽織るだけにして、

その下これ着よっかな ま、気分しだいでいっか」

独り言をぶつぶつ呟いているとロボーにじく。

「おっはー」

扉を開けると同時に言う。

「おはよ 姫」

「ム。おはよう」

「今はおはようじゃねえぞお」！

ロビーにはベルにマーモン、スクアーロがいた。

「今から会議だあ」！会議室に來い」

「えー。寝起き早々、（精神世界にいたから寝てたわけじゃないけど）、会議とか」

「いいから行くぞお！…！」

「ん」

浅葱は一文字で答えてついでにいく。

会議室への道中。

「てか何で浅葱は隊服じゃねえんだあ？」

「だって今日は休みなんですよ？それに隊服もこれにしようかなーとか？」

カランコロンと音を鳴らしながら浅葱は言う。

「てめえ、！それじゃあ戦いにくいだろおがあ、！」

「それは個人個人さ 私は動きやすいよ、すごい」

「チッ。好きにして」

「似合ってるしいんじゃね？」

「うん。なぜか浅葱には和服というのが似合ってるよ」

ブルとマーモンが言う。

「くふふ ありがとうっ、うわっ、いいね」

そして会議室に浅葱達がつくともう全員揃っていた。

「遅えぞ、ドカスが」

「ボスー、許してよ。私は今まで寝てたんだよ」

「チッ」

XANXUSは舌打ちするがそれ以上何も言わないという事は許したのだろっ。

そして会議は始まり、そこで話された内容はXANXUSがボスになるための筋書きだった。

要約すると、まず九代目を襲って、九代目の偽者とすりかえ、

本物はモスカの原動力にする。

そして九代目の持っているハーフボングレリングを自分達のものにする。

ただしここで無理に奪ったと思われないように、何が言われても

対応できるよう、九代目に死炎印を押させておく。

役割配置はこれもまた内密に行くもののために、九代目を襲つのは
一瞬で

九代目を抑えるために浅葱とXANXUS2人で行う。

マーモンは霧を発生させて、姿を隠すのと、敵の位置を念写で調べる。

ベル、レヴィ、ルツスはアジトで待機だ。

スクアードはもう片方のハーフボンゴレリングを取りに行くので別行動だ。

そして作戦当日。

今はマーモンの作った深い霧があたりに立ち込めている。

浅葱はアサットを首に巻きつけ、普段通りの隊服だ。

隊服の中を着流しで行こうとしたらルッスに、「あらあどうせなら私が

作った着流しをきてほしいわあ」と言われたのでルッスの作るものが

出来るまで普通のものを着ていくことにしたのだ。

もっとも、浅葱が着流しを中に着るのは、楽しお気に入りという

理由も

あるが、起きて早々任務という日は起きたそのままにコートを着れば

いいだけなのでめんどろじじゃないからめっちゃ便利 という理由もあるんで、

どちらを着るかは結局浅葱の気分しだいなのだが。

浅葱は霧みみたいな柄の長袖Tシャツも気に入っているんで。

「さて、と。ボス、私はとりあえず強力な幻術で九代目のジジイを騙して、

その際にボスがジジイを気絶させるんだよね？」

「ああ。浅葱はその後にはーフボンゴレリングも手に入れておけ」

「ん、了解」

そう言って浅葱とXANXUSと九代目の偽者は闇に霧に紛れ、九代目の部屋へと進んでいった。

九代目は今書類仕事に追われていた。

そんないつもと変わらぬ日常が続くと思っていたときだった。

背後にいきなり殺気を感じて九代目は振り向く。

そこにいたのはVARI A幹部の浅葱だった。

「君は、浅葱じゃないか。どうして、ここに」

「油断しすぎれ」

「!
「?

浅葱の左眼が一の文字となる。

そして浅葱が指パツチンの音を鳴らす。

浅葱はそれを合図にして幻覚を全力で使う。

九代目の超直感で幻覚とわかったとしてもかかってしまっくらいに。

すると九代目はそれにまんまとはまり、あたりに蛇がつじやつじやとつじや、

自分に巻きついている光景を見ている。

その隙をついて浅葱はハーフボングレリングを奪い、XANXUS

は九代目を気絶させる。

そして九代目をXANXUSがかついで、九代目の偽者をここに置いていき、

この作戦はあっけなく完了した。

そして帰ったら九代目をモスカに入れ、モスカが完成したのだった。

「
たっ
だいまー
」

浅葱が上機嫌でベルたちがいるであろうロビーの扉を開ける。

「お帰り
姫
」

「お帰りの。あ、着流しもつできてるわよう」

「お ありがとー、ルッス いつも着るかはわかんないけど私服と
しては

「多分絶対着るよ」

「着てくれるだけでもうれしいわあ。服は部屋に運んでおいたからね」

「ん。ありがとう」

そう言って浅葱はにっこり笑う。

それを見たレヴィが「やはり可愛い」と呟いたのを浅葱は聞こえていたが、

聞こえないことにした。

「さて、と。リングを配るからって幹部はボスの部屋に来てだってさ」

「オツケー」

「わかったわぁ」

「了解だ」

「ここでやはりレヴィの声は浅葱は聞こえないことにしたのだった。

ボスの部屋につくとベルが嵐、ルッスが晴、レヴィが雷、すでにいたマーモンは

霧のハーフボンゴレリングを受け取った。

そして浅葱は創無のハーフボンゴレリングをもらった。

創無のハーフボンゴレリングは一代につき創が無かどちらか片方だけが守護者となる掟だが、

リングはどちらも存在する。

そして創無のリングを保管するときにはそれぞれをまずハーフボンゴレリング状

にして、創＋無、無＋創と別々に組み合わせて九代目と門外顧問がそれぞれ

保管することになっているのだ。

模様はどちらも無く、創が何も色を塗られず無が真っ黒に塗りつぶされているだけだ。

「ところでスクアーロはいつ戻ってくるんだろーね」

「まじそろそろじゃね?」

「そだね」

その一週間後、スクアーロは偽のハーフボンゴレリングを持ってきて、

それが発覚した約一週間後、再び日本へと向かうことになるのだった。

標的38 再び並盛、来る！

あと一時間でVARIIAが並盛に向かうという時。

浅葱は1人笑っていた。

「くふふふふ」

「何笑ってんの？姫」

「くふふふ 並盛といつことは！奈々さんの手作りお菓子を食べて
行ける」

「あらあゝ、その話は聞き捨てなら無いわよう。その奈々さんっての
は私よりも

作るの上手なのかしら？」

「ルッス、くふふ。奈々さんのチョコ菓子は世界一なのだよ」

「それはちけるわあ」

「じゃあもつとおいしいチョコ菓子を作ってみれば」

「そつするわぁ！」

と言ってルツスは走り去って行った。

「くふふ。やった。これでルツスのチョコ菓子ももつとおいしくなる」

「姫、そんなにチヨコ好きなのか？」

「うん 大好き」

「そっか」

それから一時間後。

今は日本へ行くための飛行機の中だ。

浅葱の格好はいつもの隊服だ。

「浅ちゃん。チョコクッキー作ったわよう」

「ん。ありがとう」

そしてサクッと浅葱は食べてみる。

「..」

「(やばい。さすがルツス。めっちゃうまくなってる……。まあまだ奈々さんには

及ばないけどもう少しで追いつくんじゃね……。ここは嘘をついてもっとおいしい

ものを作ってもらおう(おいしい、けど奈々さんにはまだまだだね

」

「そう。でも次は負けないわよう！」

「ガンバレ んじゃ私は並盛につくまで寝るから」

そして浅葱は寝る、
のではなく本当は精神世界へと行った。

精神世界。

そこにはパイナッポーヘアの少女が2人いた。

まあ片方は後ろ髪を腰あたりまで伸ばしているが。

「昨日ぶりだね クローム」

「うん……。昨日ぶり、浅葱様」

「さて、と。今日は私が今乗ってる飛行機が日本につくまではここに

いられるけどクロームは？」

「・・・私はいつまででも大丈夫。浅葱様、日本に来るの？」

「うん。あ、でも恭弥に風紀委員の書類たくさん押し付けられそうだな。

でも顔出さなかったら次会ったとき、殺される。ゴメン、しばらく、

というか現実で初めて会えるのは争奪戦のときかな」

「……忙しいんだね。あれ、でもなんで争奪戦のこと……」

「くふふ。知ってるよ。クロームは沢田綱吉側の霧の守護者じゃん？」

「……うん。私は骸様の変わり。なんで浅葱様は、知ってるの？」

「私がVARI A側の無の守護者だからだね」

その言葉を聞いてクロームは驚愕の表情を見せる。

「……え!？」

「あ、まだ言っただけじゃなかったもんね。ゴメンゴメン」

「……なのに、私と仲よくしていても、いいの?。」

「いいんだよ 私は楽しいんだから さて、と。こっちの霧は結構強いからねー」。

クローム、修行つけてあげよっか？」

「・・・そんなことして、いいの？」

「いいのいいの。だってマーモンとも時々幻覚勝負してるし。何より

クロームは親友、ってやつじゃん」

「／／／・・・あり、がとつ」

「ん。とりあえず私が有幻覚と幻覚を混ぜて何十個かのチョコ玉を創るから、

それを有幻覚と幻覚、つまりは実体のものか、幻覚かを分けてみてよ。チョコは

おいしいの創るから有幻覚は食べていいよ　でもただの幻覚のほうは唐辛子味

だから　制限時間はチョコが溶けるまで。オツケ？」

「はい！」

「んじゃ、3、2、1」

パチンツ、と毎度おなじみ指パツチンで浅葱とクロームの前に何十個ものチョコ玉が現れる。

それから10分ほどたってから。

「終わ、った」

疲れているクロームがいた。

「ん。お 全部正解。すごいじゃん、クローム。ところでチヨコ嫌だった？」

「うっん。どうせなら浅葱様と一緒に食べたくて・・・」

「！、ありがとう　じゃあ一緒に食べよう　ちなみに有幻覚と幻覚の違いを

説明しとくよ。有幻覚ってのは存在して、ハンマーを創ったのならそれで

破壊された痕跡は残るけどハンマー自体は術の終了で消える、つまり有幻覚で

及ぼした影響は残るんだ　チョコがおいしいって痕跡は残る」

「？」

「つまりは、消えるとしても、思い出は残る、ってことね」

「／／／・・・ありがとう、浅葱様」

そう言ってクロームは微笑んだ。

「くふふ。じゃあそんなクロームに1つアドバイスしてあげよう
術師と」

戦うときには周りを信じちゃダメだよ、自分の世界を、景色を、現実を、

自分の常識を、それだけを信じるのさ。たとえ自分の常識を超えてきても

それは全て偽りだ」

「はい」

「そうすれば相手の幻術にかからない。それでもかかった時は、相手の力量に

完敗した、ってことだね。ま、それが有幻覚なら終わりだけど、クロームには

私の力が宿ってるから有幻覚は確実に見分けつくだろうけどね」

「わかりました」

「まあクロームも並の術師レベルなら簡単に倒せるぐらいには強いよ」

「……ありがとう」

そしてクロームはまた笑った。

「くふふ。じゃあ食べようぜ。そしてまた遊ぼう。今日は、そっだな。」

有幻覚で人生ゲームでも出してやる？」

「……」

そして浅葱とクロームはたくさん遊んだのだった。

標的39 並盛到着、来る！

ぱち、と浅葱は目を覚ます。

浅葱はベルにおんぶされて、屋根の上を移動していた。

周りにはレヴィ以外が一緒に移動していた。

「あれ？」「じやい」

「お、姫起きた？もう並盛だぜ 姫どう起こしても起きねーの」

「あー、（クロームと人生ゲームめっちゃ盛り上がったからね、そりゃ気づかないや）ゴメン」

「しっしっ 別に謝んなくてもいいし。姫背負ってても全然重くねーし」

「それって、チビだから軽い、ってことじゃないよね？」

浅葱から軽く殺気が発せられる。

「撞く撞く」

「ふーん。ならいいや。ところで今どこに向かっているの？」

「レヴァンとウ」

「うわ、もしかなくてもムツツリ1人で全員殺そうとしてる、とか？」

「そ

「殺していいかな、あのムツツリ」

「うゝおゝおゝおい！……！そろそろ着くぞおゝ」

「あ、ベルー、眠いからおんぶされてもいい？（最近ずっと寝な

いで

精神世界でクロームと遊んでるから寝てないんだよ・・・」

「いーぜ」

「ありがとう あ、最初は私はフード被って正体隠してっっかな」

「オレはいーや、ばねてき。しっしっ」

「まあ髪色は違っけどすぐ気づくよね、多分。その反応も楽しそう」

と言って浅葱はベルの背中におぶさりながらフードを深く被ってベルにしがみつく。

ベルもそれがわかり、支えていた手を離す。

それでも普通に背中にしがみついている、恐るべし浅葱である。

そしてレヴィが1人、敵を襲っているところに着く。

そこでベルが口を開く。

「待ったレヴィ」

「一人で狩っちゃダメよう」

「獲物は仲よく、ししっ」

「事情が変わったよ。どっから他のリングの守護者もそこに」

ここには、ツナに山本、獄寺、ランボ、フウ太、イーピン、リボーン、馬羅がいた。

「鈴!？」

ツナがベルを見つけて声を上げる。

「ししっ それ偽名だし」

「んなー！鈴って、ロン毛の仲間だったのー！？」

それにリボンが口をはさむ。

「てめえがVARIIAだとすると、浅葱もVARIIAなのか？」

「さーな」

「うお お お おい！よくも騙してくれたなあ……！」

「うわああ、でたああ！」

ツナは悲鳴を上げる。

「うおお お おい！雨のリングを持つのはどいつだあ……！」

それに山本が答える。

「オレだ」

「三秒だ、三秒で三枚に下ろしてやるぞお！」

そこでもう1人現れる。

「のけ」

と言ってスクアーロをどかしてXANXUSが現れた。

「でたな、まさかまた奴を見ることがあるとはな、XANXUS」

リボーンが呟くとXANXUSがツナをにらみつける。

「ひひひひ」

「きゃあー！」

にらまれたツナと、実際ににらまれた訳でもない馬羅が尻餅をつく。

「沢田綱吉」

そう一言言ってXANXUSは憤怒の炎を使おうとする。

そこに工事で使うピッケルが飛んでくる。

それにいち早く気づいた浅葱がベルの肩を支えにして軽々とした動きで飛んできたものを

蹴り飛ばし、着地する。

すたっ。

蹴り飛ばされたピッケルは飛ばされた方へと飛んで行く。

ぱしっ、と飛ばした本人のボンゴレファミリー門外顧問沢田家光が
掴む。

「ちっ、そのまま刺さればよかったのに」

浅葱はぼそっ、と呟く。

「しっ、姫、聞こえてんぜ」

「んじゃ今のは聞かなかった、ってことで」

そしてピッケルを蹴り飛ばした浅葱はベルの背後にいたため気づかなかったのか

ツナがここで叫びを上げる。

「んなー！子供ー！？」

「子供じゃないんだけど」

浅葱はにっこり笑う。

まあフードを被っているので口元しかわからないのだが。

「ひい！すみません！って、あれ・・・？もしかして、浅黄？」

その言葉に浅葱の口端がまたあがる。

「だーから、浅黄じゃなくて本当は浅葱だつて」

と言つて浅葱はフードをはずす。

「白石さん!？」

すると馬羅が声を上げる。

「な、何で、し、白石さんが、そちらに、い、いますの？」

「黙ってれよ。いかにもウザい性格な馬鹿羅。ああ馬鹿羅だと馬鹿
つて言葉が

かわいそうだね」

「そ、そんな」いいから佐川馬羅は黙っていてもらえませんか？」
「！」

敬語で、殺気を混ぜて浅葱は言う。

「ふあーあ。てゆうか私寝ててもいい？マジ眠い」

そして浅葱はふらっ、と倒れる。

「おっど」

ベルがそれを支えて、今度はベルが支えておんぶする。

「まったく、こんなとこで寝んな、つつの」

「全くだね」

それを見たツナが声をあげる。

「ってか、浅黄、じゃなくて浅葱って敬語が外れるとあんななんだっ
たんだ・・・」

その後には門外顧問がリング争奪戦の説明をして、チエルベツロがその審判をする、

という話があったのだった。

標的39 並盛到着、来る！（後書き）

感想もいつでも待っています

というか一行でもあねばうねしいです

標的40 並盛の殺し屋探し、来る！

翌日正午。

またしても浅葱はむくり、と起き上がる。

「んー。これではらくは寝なくてもオツケーだね」

そう言って下駄と着流しの上にVARIIAのコートを羽織った格好になる。

着流しの柄は浅葱が着ていた霧みたいな柄のTシャツと同じだ。

「ふあーあ、今日は何をしようか・・・ん？」

浅葱がテーブルを見ると手紙が置いてあった。

『浅葱へ』

今日はリング争奪戦の時刻までは自由時間だったさ。

マーモン』

「へー。でも争奪戦がレヴィとかだったら見たくもない……。しかも

ルツスだとしても多分きもいし……」

浅葱は沈黙する。

「うん。きっと創無戦は後の方かな。多分、いやいやきつとそうさって訳で

恭弥からかってこよっかな クロームは居場所聞いたけど、ま、争奪戦で会えば

いっか。毎日クロームに次の日の争奪戦は誰かも教えてもらえばいいし。それに、

今クロームと会ってもムク兄は何かクロームのところに今いないとか言ってたしな・・・」

「あ、ベルと一緒に遊びに行こう」

そうと決まったら浅葱は走ってベルの部屋に行った。

コンコン。

とノックするとベルの音が返ってくる。

「誰？」

「私、浅葱だよ」

するとベルが部屋から出てくる。

「おはよー、どっか遊び行くぜ」

「おはよ いいけどどこ行く？」

「んー、ベル何かやりたいことないの？」

「あ、そーいやまだ並盛の殺し屋殺しやってなかったな」

「んじゃそれにしよう」

そう言っつてベルと浅葱は並盛の町へと向かった。

「オホ、オホ。オホ、オホ。オホ、オホ。オホ、オホ。」

ちなみにアサットは浅葱の首に巻きついて寝ている。

「わかんね。何か知らねーの？姫は」

「むー、あ、前並盛めぐりしてたときアサリ道場ってそれなりに大きい道場が

あつただけど、綺麗なのに使われてなさそうな雰囲気だったんだよ。そこが

殺し屋の道場だったり、しないかな？」

「しっつ、ー応行ってみつか」

「うん」

そして浅葱とベルはアサリ道場へとやってきた。

「おい、誰かいるならでてこーい！」

浅葱が呼びかけてみる。

・・・。

しかし反応は無い。

「チッ、でて来ないならけり破るぞー、3、2、1、はい、0 - -」

ドオンッ。

という効果音とともに浅葱は蹴り破る。

そこにいたのは山本だった。

道着で真剣を持つて的の前で構えている。

集中していて周りが見えなくなっているようだ。

そして山本が一息吐き出し動いた途端、的が崩れ落ちる。

スパンツ。

「おおー、ここって武の道場だったんだねー」

その声でやっと山本は気づく。

「なっ、浅黄と、VARIIAの!？」

「今気づくとか戦場だったらすぐ死んでると思うよ。それに私の名前は

白石浅黄じゃなくて六道浅葱ね。あとなんでベルはVARIIAの!？なの？

「忘れも二ヶ月ぐらい前までいたのに。まあもうベルは

在籍してないけどね」

「あ、すまん。でも、何でVARIIAがここにいるんだ？」

「暇つぶしに殺し屋探してたんだし」

「そしたら武を見つけた、って訳さ」

「へー、てか殺し屋なんてこの辺にいんのか？」

「さあ？並盛の殺し屋って、でもいたとしても恭弥に全員咬み殺されてそうだよな・・・」

「ありえるし・・・」

その言葉で浅葱とベルの表情が心なしか沈んだ。

「あ、じゃあ折角だし親父の寿司食べてけよ。きっと美味いぜ」

「すし？」

「スシ？」

浅葱とベルが呟く。

「じゅあ行ってみようぜ。じゅあせろ。じゅあなくなっちゃったし」

「姫が言うなら行くか　しししっ
」

「んじゃあね、一応がんばれよー、武
」

そして浅葱とベルは山本の父が経営する寿司屋へと歩いていく。

「ってか、敵に何でガンバレって言うてんの？」

「んー、気分？」

「ま、姫らしーな」

竹寿司。

「いらっしゃい！お二人さんかい？」

店に入った途端に大声がかかる。

「ん。2人です」

そして浅葱とベルはカウンター席の端に座る。

「んじゃとりめえずおすすめもらえますっ？ベルもそれでもいい？」

「いーぜ」

「へい！じゃ、竹寿司セットでいいかい？」

「お願いします」

そして武の父親らしき人は着々と寿司を作っていく。

それを見て浅葱は隣のベルに話しかける。

「あの包丁をばきすいねー」

「じっつ あねくらい王子にもできるし」

「何おう！私にもできるし！」

それが聞こえた武の父が声をかける。

「じゃあやってみるかい？」

「おっ……」

浅葱とベルは声をそろえて答える。

そしてまずは簡単な魚が出されたのでまず武の父が魚を捌く。

魚を投げて包丁を振ると一気が魚が捌かれていた。

「んじゃ次王子の番」

そう言つとベルは自分のナイフを取り出す。

そしてベルも綺麗に捌く。

「おお、すげえじゃねえか。譲ちゃんもやるかい？」

「譲ちゃんじゃないんですけど？てかやるに決まってる」

そう言うと浅葱は短刀二本を逆手に持って魚を一気に二匹投げる。

「くふふ」

スパパパパッ。

綺麗に生け作りができあがった。

「どうだ」

「おお、これまたすげえな。じゃあ次はこいつでどうだ！」

そして武の父は新たな魚を取り出す。

そしてまたベルと浅葱が簡単に捌く。

それを見にいつのまにか人が集まっていた。

そして大方魚が無くなり、観客もいなくなったところ、ベルと浅葱はお土産として

寿司セットをもらって帰ることになった。

「って、時間もなーじゃん」

ベルと浅葱の2人は寿司を片手にアジトへの道歩く。

「ベル、私はしばらく遊びに行ってるよ。皆にも言っといて」

「んじゃ姫は戦い見ねーの？てか姫の番きたらどーすんだよ」

「だってレヴィとかルツスのなんか見てもつままないし。それに

多分創無戦はまだだと思っよ」

「？」

「ま、勘だけどね」

「勘かよ」

「大丈夫だよ。それに私がいなくても皆勝つつしよ？」

「しししっ ま、そーだな じゃあ伝えとく」

「ありがと がんばってね、ベル」

「当たり前」

そうやって二人は別々の方向へと歩いていく。

そして浅葱の勘は当たり前、創無戦が行われるのはかなり後半なのだった。

標的 41 不機嫌委員長、来る！

浅葱はベルと別れた後、行くあてもなくふらふら歩いていた。

なぜか山道を歩いている。

「んー。どこに行こつかなー。なー、アサット？」

「きゅー」

「このちかくにかわがあるぞ。それにひとまなんにんかいるぞ」

「んじやとりあえずそこに行ってみようか」

と言つと浅葱は歩いていった。

歩いていると川が見える位置にやってきた。

そこには確かに人影があった。

「とん」

と浅葱は掛け声を言うとジャンプで一気に川のところに跳ぶ。

しゅたつ。

「着地成功」

浅葱はVARIAのコートと着流しの袖をたなびかせて着地する。

ちなみに羽織ってるだけのコートが落ちないのは帽子のところに紐を通して前で

縛っているからだ。

着地すると同時にいきなり声がかかる。

「なっ！？その服はV A R I Aの」

「ん？」

浅葱が振り向くとそこにはキャバッローネファミリー10代目ボス、
ディーノと

その部下であるロマーリオがいた。

「え、と。誰？」

「は？」

デイナーはすごい警戒していたのに偶然ここに来たという反応をさ
れてしまい

素っ頓狂な声を出す。

「だから、誰って聞いてるんだよ V A R I A のこと知ってるなら
マフィアってことでしょ」

「オレはキャバッローネファミリー10代目ボス、ディーノだ」

979

「へー、私は V A R I A 幹部で V A R I A 無の守護者の六道浅葱だ
よ」

「何しに来たんだ？」

「ふらふら暇潰せるものはないかなー、と歩いてたんだよ」

「じゃあオレ達を襲う気はないんだな」

「うん まあ戦いなら大歓迎だけどね」

「じゃあいくつか質問に答えてくれるか?」

「ん、いーよ まあ答えるかは気分しただけど」

「哀れな双子、ってのは何なんだ？」

その言葉に浅葱がビクッ、とする。

「何で、知ってるの？」

「リボーンに聞いた」

「くふふふふ、ふふふ」

「？」

「あーあ、あの時リボーン殺しとけばよかったかなあ？」

浅葱の言葉には殺気がこめられていた。

ゾクッ。

ロマーリオとディーノの額には冷や汗が流れる。

「ま、いつかでも今は答える気はないな。ムク兄にも了承取ってないし?」

「ムク兄ってのは、六道骸だよな?」

「そーだよ あー、会いたいなー・・・」

そう言つと浅葱は寂しげな目をする。

「仲、良かったのか？」

「うん 当たり前さ、六つの記憶の中からずっと一緒にいるんだ。
でもくだらない」

意地を張って、ムク兄と離れてしまった・・・」

「後悔してんのか？」

「いんや、そのおかげでベル達とも会えたしね。まあレヴィは死ねばいいけど」

「そーか」

「うん」

そして浅葱は満面の笑みを見せる。

ガサツ。

後ろの草陰から物音がする。

すると後ろの草陰から殺気が放たれ、
ほぼ同時に浅葱に何かか襲い

掛かる。

ガキイインツ！

「あり？恭弥じゃん お久ー」

それは雲雀だった。

雲雀のトンファーと浅葱の短刀が競り合っている。

「なっ、てめえら知り合いだったのか!?!」

それに浅葱が答える。

「うん。居候してた」

「!」

「ねえ、僕のこと忘れてない？」

と言つと同時に雲雀の回し蹴りが放たれる。

それに浅葱も足で防御する。

「くふふ 忘れてないって それで、何で恭弥はそんなに不機嫌なのかな？」

確かに雲雀は途轍もなく不機嫌であった。

それにディーノが口出しする。

「そうだぜ！さっきまではそんなに不機嫌じゃなかっただろ！」

「僕がイラついているのは浅黄、いや浅葱のせいさ」

「？何かしたっけ？」

「ふざけないでよ。あの置手紙は何？ふざけてるの？いきなり消えて。」

しかも風紀の腕章も置いていって。並中の風紀委員は休日だろうが

なんだろうが学ランで腕章をつける決まりだよ」

「えー、てかこれ隊服だから最低限コートは着なきゃなんだけど」

そう話す間にも浅葱と雲雀の攻防は続く。

「じゃあそのコートにつけねばいいでしょ」

「あ、なる」

と浅葱が言うと雲雀が風紀の腕章を浅葱に投げる。

「着けて」

「はいはい、っと」

そして浅葱は左袖のコートに腕章をつける。

「あー、これ絶対スクアール口に大声でなんだこれはあ！とか言われるんだけど。」

「てか今まででも休日絶対つけてるわけじゃなかったんだけど」

「知らないよそんなの」

そしてまた攻防が始まる。

しかし2人ともしゃべりながらなので本気ではないようだ。

「それにあの置手紙は一体何なの」

「置手紙は置手紙だよ」

「咬み殺してほしいの？」

「戦いなら大歓迎」

「いいよ、じゃあ咬み殺してあげる」

「くふふ」

そしてお互いに一度距離を取って構える。

雲雀はトンファーを。

浅葱は逆手に短刀二本を。

「ちよ、ちよっと待てお前等！」

そこにディーノが口を挟むが。

「「「んんんん」」」

一刀両断されたのだった。

そして2人の戦いが始まる。

標的42 雲雀対浅葱、来る！

ガキイツ。

雲雀がトンファーで殴りつけるが浅葱に短刀で受け流される。

スカッ。

雲雀のトンファーの第二撃が浅葱に軽くかわされる。

「恭弥。まだまだこんなもんじゃないよね」

浅葱は雲雀を挑発する。

「当たり前だよ」

それに浅葱は妖しく嗤う。

「ならよかった」

と言いつと浅葱の姿が消える。

「！」

「上」

浅葱は高く高く跳躍していた。

「今回は幻覚とか使わずに近接戦だけで戦うからさ、もっと楽しませてね」

と言うと浅葱が落下してくる。

ガンッ。

浅葱の下駄裏とトンファーが激しい音を立ててぶつかると、

「っ」

その衝撃が雲雀の腕に走る。

「くふふふふ
いくよ

近接戦では現時点最強の私の技。

S o m m i t ? d e l c a p o - c a c c i a s t r a v a
g a n z a . 首狩り狂想曲第一番

” T e s t a - c a c c i a D a n c e ” 『首狩り乱舞』

と言うと浅葱は短刀二本による猛攻を開始する。

雲雀は何とかその致命傷を避けるが小さな傷が次々とできていく。

浅葱は回転して跳んで蹴って切って斬って防御の暇なく短刀を、雲雀を斬るため、

首を狩るためにふるつ。

その様は着流しの袖が裾が、コートの裾もついでに舞って、戦いで
はなく

踊っているようにも舞っているようにも見えた。

その姿にディーノとロマーリオは釘付けになっていた。

ギインツ！！！

そして一際強い音が鳴ったと思えば雲雀のトンファーが片方宙に飛

び、もう片方は

浅葱の短剣により押さえつけられていた。

そして浅葱の短剣が雲雀の首に突きつけられている。

「くふふふ 私の勝ち、だね」

そう言った浅葱は息切れしていた。

「すごいな。本当に舞っているようでしたぜ、ボス」

「ああ。すごい綺麗だった、な」

「くふふふふ ならうれしいな でも、やっぱこれ恭弥レベルだと本気で使うから疲れる」

と言いつと浅葱は倒れる。

ふうっ。

しかし地面にぶつかる前に止まる。

雲雀が止めたからだ。

「全く、武器を飛ばしたりするだけでその後すぐに倒れたら勝ち
とはいえないでしょ」

そして雲雀は近場に浅葱を優しく寝かせる。

それにディーノは絶句する。

あの雲雀が他人に優しくしたからだ。

「おて、おっきの続けようよ」

すると雲雀はさっき飛ばされたトンファーも拾ってディーノに向かって振り下ろす。

しかし浅葱につけられた傷のせいで少しふわふわしている。

「って、おい！いきなりかよ。ロマーリオ、そいつ見張っとけ！」

といいながらもディーノは雲雀に鞭で攻撃する。

「へい！ボス」

そしてディーノと雲雀の戦いは続く。

そして数日後。

浅葱も最初はディーノとロマーリオに警戒されていたが日が経つと
もう警戒は

とけていた。

そんなある日。

今日も浅葱と雲雀が戦ったりディーノと雲雀が戦ったりしながら移
動していた。

その日の夕方である。

とうとう雲雀にリング争奪戦のこと、それが並中で行われていることを知られてしまった

のだ。

そして並中のことを知った途端、雲雀の周囲が極寒となった。

「浅葱はそれを知ってたの」

もう疑問系でもなく確信である。

「知ってたよ」

「なんで言わないの」

「だって言ひのめんどくさい」

「それは風紀委員としては肅清に値するよ」

と言つと雲雀はトンファーを構える。

浅葱のVARIACOOTの左袖には風紀の腕章が巻かれている。

「くふふ 私を咬み殺すより並中を荒らしてるやつを咬み殺したほうがいいんじゃないの？」

それを聞いた雲雀はトンファーをしまつて後ろを向く。

「行くよ。浅葱も風紀委員なんだからついてきて」

「はいはい、っと。ディーノジャーに」

と言いつつ浅葱と雲雀がすごい速さで並中へと走っていく。

「って、待て！俺も行くからな！ロマーリオ、行くぞ！」

「くさー。」

と言葉を交わすとロマーリオとディーノも走っていった。

標的43 嵐戦後、来る！

浅葱は今雲雀が並中の玄関でレヴィ雷撃隊を倒しているのを見ていた。

「ねー、恭弥、こいつら倒しちゃったら私が後で愚痴愚痴言われそうなんだけど。」

まあレヴィの部下だからどうでもいいけど」

「知らないよそんなの。ていうか浅葱は僕とこの草食動物達どっちの見方なの」

「んー。どっち、ね……。そうだね。ベルやスクアー口達は私にとって

大事な人だからね。まあレヴィは違うけどね」

「……」

雲雀は黙って浅葱の話を聞く。

「でも恭弥も私にとっては大事だからね。今この場でいうならこいつらはレヴィの

部下だから恭弥の見方かな 何より風紀委員だしね 「

「そう。じゃあ邪魔しないでよ」

「それは嫌 どうせなら私もレヴィ雷撃隊倒してやんぜ」

そう言って浅葱は走り出す。

浅葱の目の文字は四になる。

骸に比べたら全然力は強くないが少しは強くなるためだ。

今回浅葱は素手で戦うようである。

ちなみにアサットは浅葱達が森にいるときにどこかへ消えた。

アサットは昔エストラーネオの実験体だったため外の世界が珍しく

度々外を放浪するのだ。

「待ちなよ」

そう言って雲雀も走り出す。

「咬み殺すよ」

「くふふ やねるものならやっつてみなせよ」

そう浅葱が挑発すると雲雀が浅葱にトンファーを振り下ろす。

けれど走りながら戦いながらもレヴィイ雷撃隊は2人の手によって次々倒されていく。

そしてついにツナ達がいる階につく。

「お、」の階じゃね
「」

「何油断してるの」

ブオッ！

雲雀のトンファーがものすごい速さで振り下ろされる。

「あ、やべ」

と言つと浅葱はすばやく短刀を出し防御する。

「あーあ、素手で勝てるかな、と思ったのにー」

「むしろ負けさせてあげるよ」

「くふふ それは無理」

という浅葱は回し蹴りを最高の力をこめて放つ。

ガンッ。

しかしそれはトンファーに防御され力が拮抗する。

「私にはこんなこともできるのだよ」

そう言うと浅葱は足に黒と藍の炎をまとわせてその推進力で一気に力をこめる。

「っ」

それに耐え切れず雲雀は吹っ飛ばされる。

ドガアンッ！

「なっ、え！？ヒバリさん！？」

ツナの声が聞こえる。

ツナがいるであろう方向に浅葱は歩いていく。

「くふふふふ お久ー、ツナ あと生きてる？恭弥」

「咬み殺す」

雲雀が浅葱に飛びかかる。

ガンッ！

浅葱は短刀で防御する。

「おおっ、ちょいストップ、恭弥」

「？」

「並中には何しに来たんだっけ？委員長」

「！」

それを聞いた雲雀はトンファーをとりあえず降ろしてツナやVAR
IAの方を向く。

「並中への不法侵入及び器物破損。連帯責任で、ここにいる全員咬

み殺すから」

「んなー！争奪戦のことで来たんじゃないやなかったー！この人、校舎壊されたことに

怒ってるだけだー！？」

「さて、と。私も一応並風紀委員だ。だからムツツリとかムツツリとか

ムツツリの首狩るのは任せておけ 恭弥」

「僕の獲物取らないでよ」

「他にもたくさんいるじゃん」

「ううおおおい……どういづつもりだ浅葱い」！

「どうもごうもない。私はただ遊んでたら恭弥達にあって、今は風
紀委員

として来ただけだよ」

そう言つと浅葱は実に愉しそうに嗤つ。

「てめえ、はただ楽しんでるだけじゃねえかあ!!!!」

「ま、いーじゃん」

「貴方は、沢田氏側のリング保持者とVARIIA側のリング保持者ですか。」

でしたら、このような行為をなれては「

そこにチエルベツロが口をはさむ。

「よくも、オレの部下を「

そしてレヴィが言う。

「守護者同士の死闘は「

そこでチエルベツロがレヴィに吹っ飛ばされる。

「黙れチエルベツロ！こいつはただの侵入者だあ！」

と言つとレヴィは雲雀に向かって背中 of サーベルを二本抜いて向かってくる。

「くふふ ムツツリの部下を倒したのは私もだよ」

と言って浅葱が雲雀の前に出て防御する。

ガキンッ！

「貴様！我等に反旗を翻す気か！」

「バーカ 私がマジで殺そうとするのはムッツリだけさ 死ね」

浅葱がレヴィにマジのマジで回し蹴りを放つ。

炎はまどっていない。

ドガアンッ！

ズザザザザー……。

レヴィが吹っ飛ばされて転がっていく。

「はっ、そのままムッシリ」

「何校舎壊してるの」

「恭弥だって壊してたじゃん」

「僕はいいんだよ」

「友達いなくなるよ？」

「友達なんていないよ」

「へー、じゃあ私って何？」

「ただの居候で、いつか絶対咬み殺す」

「咬み殺されるようなことしたっけ？」

「したよ。六道骸と浅葱は絶対についてか咬み殺す」

「え、ムク兄と同レベル？てかムク兄知ってたの？」

「第一六道骸と君の関係も君からは何も聞いてないよ。風紀委員失格だね」

「失格、てことは書類仕事もうしなくていいのか」

ブチッ。

何かが切れる音がする。

「やっぱり浅葱はここで咬み殺す」

ガンッ。

雲雀のトンファーを浅葱はまたまた短刀で防御する。

「えー、また？どうせ負けるんだから諦めなよ」

「僕がいつ負けたっていうのさ」

ブチッ。

何かが切れる音がする。

「その負けず嫌い直したほうがいいよ？マジで。イラッとくるから」

と云つと浅葱はスクアーロのほうに目を向ける。

話進めといていいよ、と云つて合図である。

「さて、第何ラウンドかもうわかんないけど、始めようか」

そう言つと浅葱と雲雀がまたしても戦い始める。

標的44 山本の成長、来る！

雲雀と浅葱はツナ達が話している間も黙々と戦っていた。

ガキイツ。

ガンツ。

スカッ。

ガンツ。

それはあるものの声によって止められる。

「いい加減にしろって。もう話終わってるぜ。」

山本だった。

「邪魔だよ」

雲雀が言って山本にトンファーを振り下ろそうとする。

パシッ。

それを山本は流れるような動きで雲雀の背後に行き、トンファーを
掴む。

「邪魔するものは、何人たりとも、咬み殺す」

すると雲雀が不機嫌オーラを丸出しでトンファーからは仕込み鉤が飛び出ている。

それをまたあるものが止める。

「いい加減にしやがれ」

リボーンが雲雀の前いきなり立って止める。

浅葱はリボーンを初め殺気の含んだ目で見たがそれは一瞬で異常なほど冷たい目になった。

それにリポーンは気づくがまずは雲雀のことが先だと気づかぬふりをする。

「おい、ヒバリ。ここで暴れちまってもいいが、でっけえお楽しみがなくなるぞ」

「楽しみ？」

「今すぐって訳じゃねえが、ここで我慢して、争奪戦で戦えば遠く

ない未来、

また六道骸と戦えるかも知れねえぞ」

それを聞いた雲雀の目つきが変わる。

「ふうん。本当かな」

それに対してリボンがフッ、と笑う。

「校舎の破損は完全に直るの？」

雲雀がチエルベツロに話しかける。

「はい。我々チエルベツロが責任を持って」

「そう。気が変わったよ。僕と戦る前に、あそこの彼に負けないでね」

雲雀が山本に言う。

「えっ」

「ヒバリさん」

「じゃあね。浅葱はちゃんと並中に来てよ。浅葱がいる間は他の委員の分も

やるおかげで風紀委員の書類の総量が増えたんだよ」

「へー、それで書類が溜まっている、と?」

「来なかったら君の好きな子ヨコ菓子屋さん取り壊すから」

「なっ、ざけんな！並森のチヨコ菓子屋は奈々さん、ルツスに続いて三番目に」

美味いんだよ！それを取り壊す、なんて人間のすることじゃないぞ！」

「知らないよそんなの」

「あー、もー、はいはい。行けばいいんでしょ」

浅葱は半ば自棄になって言う。

浅葱は書類仕事は嫌いなのだ。

その言葉を聞くと雲雀は去っていく。

「なんていうか……。てゆうか、あのヒバリさんが戦いを止めた」

「それだけヒバリにとって、骸から受けた屈辱はでかいんだ」

「つーか骸って、そんな約束して、大丈夫なのかよ!？」

「さーな」

「さーなつてオイ・・・」

「うゝおゝおゝおい！刀小僧！さっきの動き気に入ったぞおゝ！！
！これぞ！！」

「貴様の勝つ可能性は0%から、やはり0%だあゝ！！！！！！」

「明日、スクアアローが勝てば、それで勝負が決まる」

「そして、貴様等の最後だ」

いつ復活したのかレヴィが言う。

そしてスクアーロが窓枠に乗って言う。

「首を洗って待つがいい」

それを言うとスクアーロは窓枠から外に向かって消える。

そしてスクアーロの高笑いが響く。

いつの間にかチェルベツロも消えていた。

標的45 浅葱の過去、来る！

V A R I A 達がこの場を去っても浅葱は一緒に去らずにこの場に残っていた。

浅葱は隅で体育座りで何かぶつぶつ言っている。

「なんだよ恭弥。バーカバーカ。私が風紀委員で書類仕事したのは恭弥が押し付けたからだし。てか契約しちゃったからだし。しかも他の人の分やったのは早く帰って精神世界とか行きたかったし寝たかったからだし。それが何？私か他の人の分もやって早く帰ってたせいで風紀委員の書類の総量が増えた、だあ？それで私にその増えた分もやれ、と。くふふふ。ざけんな。私は殺しとか戦いとか遊びとか睡眠とか適当に契約した人に憑依して一日ばれずに乗り切るぜ とかは好きだけど書類は嫌いなんだよ。マジで。あー、書類

なんか全部燃やしてやるっかな。てか何のためにここに来たんだっけ？あ、そうだ。風紀委員としてだ。だって風紀委員の契約書には一生うんたらかんたらって書いてたからね。契約は守らなきゃだよ。じゃなくて、それで、あ、そうだ。リボーンだ。リボーンなんか死ねばいいのに。哀れな双子って呼び名は自分で調べてわかんなかったらすぐ諦めると思ったのに。何口外してんだよ。これが広まったらどうしてくれるの。マジでさあ。この世界でもそう呼ばれる？また、またしても！？ずっと、ずっとこの世界でもそう呼ばれた。哀れな双子？哀れ？勝手に哀れんで。そのくせ何もしない。私達はずっと苦しんだのに。天界道ですらも。その時の呼び名でまた呼ばれる？ふざけんな。この原因は何だ？聞かれた。口外された。リボーンだ。よし、殺してやる」

浅葱はこれを一呼吸もせず言い終わるとすくっ、と立ち上がる。

そこにはさっきまでいなかったディーンとロマーリオがいた。

「どっちらVARIAと入れ違いになっちゃまったようだな」

「**リリリリ**のよー VARIA」

そこに浅葱は口をはたむ。

「なー！浅葱帰ってなかったの？」

ツナが聞く。

「うん リボーンを殺すために」

最後のところで浅葱は本気の殺気をこめる。

その場にいたものは誰もが冷や汗を流して動けない。

応援に着ていた馬羅はもう気絶寸前である。

そしてリボンが口を開く。

「なぜだ」

「哀れな双子」

浅葱はそれを忌々しそつに呟く。

「!？」

「私はそれが肝試しの時に聞かれた時、聞いた者は全て殺してしま
いたかった」

「・・・」

「でもそれをやるとまた復讐者に捕まりそうになりそうだからね。止めた。」

もう復讐者に渡せる情報もないしね。それを追求されるのも嫌だから動揺も隠した」

そこで一度浅葱は言葉を切る。

そして闇しか映さない瞳で言う。

「それを口外された」

そして浅葱の殺気がより一層強くなる。

「まあ私もそれを他人に言うな、とは言わなかった。けど、けどさ、私は……」

皆黙って浅葱の言葉を聞く。

「また、この世界でもその名で呼ばれたら、今更その名で呼ばれたら、

もう、嫌なんだよ。ムク兄の、隣の子のあんな辛そうな表情を見るのは、

もう嫌なんだ」

そこでリポーンは口を開く。

「よくわからねえぞ、オレ達には。何で嫌なんだ？それにこの世界でも、」

とはどっいつ意味だ？隣の子ってのも誰のことだ？」

「くふふ、ふふ。隣の子、とは、ムク兄と私にまだ名前が無かったとき私は」

ムク兄のことをそう呼んでいた。世界、とは前世の記憶のことだよ。私と

ムク兄には六つ前の前世までの記憶がある。死後の世界のね。そこでは私達は

いつも迫害され、差別され、生を否定された。いわゆる天国という天界道で

すらも。その記憶の中での呼び名、ですよ。哀れな双子、とは。でも哀れ

とか言ってもあいつらは私達を蹴落とした。迫害した。差別した。否定した。

その名で呼ばれたらそれが嫌でも思い出してしまっ

「っ」

ツナは言葉も出ない。

「くふふ 少し話しすぎたね。 今は忘れてください。 それでは」

と言って浅葱は消える。

その場には言葉も出ず、立ち尽くす者達が残った。

標的46 浅葱の至福、来る！

浅葱は並中から出てから並盛をふらふら歩いていた。

「あーあ、めっちゃ取り乱しちゃったし……。明日はスクアールと山本、か。」

まあいいや。明日は書類仕事を終わらせたならそのまま寝ちゃおう。でもどこで寝るか」

浅葱はそこで一度止まり考える。

「あ、奈々さんのお菓子食べに行こう！〜んぞいぞい泊めてもらっ
ちやえ」

と言うと浅葱は走り出す。

ピンポン。

浅葱はツナの家インターホンを押す。

すすとすすぐと出てくる。

「ツツ君？あら、浅葱ちゃんじゃない！どつしたの？」

「奈々さんのお菓子が食べたくて。ついでに今日泊めてもらえますか？」

「あしがやいじちごまぢ」

「その間にお菓子作っておくわね」

「あしがやいじちごまぢ」

「あしがやいじちごまぢ。今お風呂用着するわね」

そう言って浅葱はツナの家に入っていく。

浅葱がお風呂から出てくるとお菓子がかもつ出来ていた。

「お風呂ありがとうございました。あ、今日はチョコマフィンですか」

浅葱は服は全てVARRIAが泊まっているホテルにあるのでとりあえず寝る時用と

奈々に貸してもらったパジャマを着る。

これはおそらくツナの物だろう。

ツナの物でさえもぶかぶかである。

「さ、一緒に食べましょう」

奈々が浅葱用にコーヒー牛乳も作って食卓テーブルに座る。

「では、いただきます」

もふっ、と浅葱はチヨコマフィンを食べる。

チョコマフィンの中にはチョコチップが散らばっていた。

「あー、美味しいー 今この瞬間が至福だね」

「それはよかったわー」

と言って奈々も食べる。

そうして食べていると誰かが帰ってくる。

「ただいまー、ってあれ？誰の靴？」

ドタドタと誰かが向かってくる。

「おかえりー、ツツ君」

「あれ！母さん起きてたの!？」

「ええ、浅葱ちゃんが来てね」

「！浅葱!？」

今浅葱に気づいたようだ。

「むー、おふぁえりだね、ツナ。しふぁし気づくのがおふぁいんではないふぁな？」

浅葱は食べながら話す。

「あ、なんかデジャビュ。じゃなくて、何で来たの？てかさそれオレのパジャマ……」

「んー？」つくくん。 奈々さんのお菓子が食べたくなってるね。 それで ついでに

泊まらせてもらおうと思って。 んでツナのパジャマを着てるのは着 替えを全て

ホテルにおいてきてしまっているからなのだよ 「

「へー」 「

「本当にママンのお菓子を食いたかっただけか？」 「

「どっいっことかな？リボン」

「後で話があるぞ。食い終わったらツナの部屋に來い」

「え、リボン？浅葱・・・？」

ツナは一瞬浅葱の名を呼ぶのを躊躇った。

その時の浅葱の目に浮かぶは完全な闇だけであった。

「ツナ、行くぞ」

と言ってリボーンはツナの部屋へ向かって歩いていく。

「ちよっ、待てよリボーン」

ツナもそれに続いて行く。

「浅葱ちゃん？」

「くふふ。何でもありませんよ。」
「馳走様でした。今日もとっても
おいしかったです。」

それではもう眠いので寝させてもらいます
「」

浅葱はいつの間にか全てのチョコマフィンを完食していた。

そして席を立つと浅葱は寝るのではなくツナの部屋へと向かっていく。

ツナとリボーンは今ツナの部屋で話していた。

「てか何であんなこと浅葱に言ったんだよ！」

「じゃねーと多分浅葱は本当のことを表に出さねえだろっからな」

「・・・？っかりボーンって浅葱のこと名前で呼んでたっけ？」

「本当の名前は白石じゃねえからな。でも六道って呼んだら骸と被るだろ」

「あ、なるほど」

「こんなこともわからねえなんて、やっぱりダメツナだな」

「んな！でも、あの時の浅葱の目は、闇しか本当に無かった……。」

浅葱はまだ、何か隠してる？」

そこでここにいなかったはずの音が届く。

「くふふふふ。それが超直感、かな？ツナ」

「なっ！いつからそれ！？」

浅葱はツナの部屋のドアにもたれかかっていた。

「ついさっきだよ。ドアが開いていたからね。ドアは閉めたほうがいいと」

思うよー。機密話とかしてる時外にダダ漏れだし、寒いし」

浅葱の声はいつもどおりだったが、目は死んでいて、闇だけを映していた。

それにツナがやはり一番に気づいて声をかける。

「浅葱、大丈夫・・・？」

「だいじょーぶだいじょーぶだよ。ただし記憶を思い出したただけだからね」

浅葱は昔でもなく思い出でもなく記憶、と言った。

標的47 記憶という名の鎖、来る！

「記憶？思い出じゃなくて・・・？」

ツナは聞く。

「まーね。普通なら思い出だろうけど、あれは記憶だからね。確かに私とムク兄に

ある六つの記憶は真実だよ。けど、あくまでもそれは記憶なんだよ」

その言葉にツナは？を浮かべる。

「もっとわかりやすくいいやがね」

「要するに、私達はその世界では死んだからね」

「んなっ！六つってことは・・・」

「そう。私達には六回分死んだ記憶もある。衰弱死したり餓死したり毒死したり」

殺されたり殺されたり、ね。」

「……」

シナは言葉もでないようにである。

「だからてめえらは世界を壊そうとか考えるのか？」

「まさか 私は違うよ。私はエストラネオはもう壊したからね。それでもう後は

楽しければいいんだよ。人生は愉しく生きなきゃ、っていうでしょ？」

そう言つと浅葱はけらけらと狂つたように笑つ。

それを無視してリボーンは問う。

「他には何を隠している？てめえは骸にも話していないことがあるんじゃないのか？」

するとぴくり、と本当に小さく浅葱が反応する。

「くふふふふ。そんなものがあつたとして君達に話すと思つてんの？」

「だから変わりに骸の情報をやるぞ」

「ムク兄の情報？そんなの知ってるよ」

「黒曜の詳しい話も知ってるのか？」

今度は浅葱はわかりやすく反応する。

「知らなかったらなんだっていつの？」

「教えてやるからためえの話も聞かせる」

「断ったら？」

「もうママンのお菓子を浅葱が食べれねえようにするぞ」

「なんだと！どうやってやるのかは知らないけどリボーンはマジでやりそうなんだけど・・・」

するとリボーンは今度はツナのベッドの下からレオンが変化した籠

を取り出す。

「アサット…？」

中にいたのはアサットであった。

今アサットはリボーンに捕まえられて、アサットの命はリボーンに握られているも同然だ。

それにアサットは申し訳なきそつに鳴く。

「きゅじゅ」

「ごめん……。散歩してたらこいつに捕まえられた……。飴を餌にされて……」

「はあ、まーいいさ。飴は美味しいからね。許す。でも次からは気をつけるんだよ」

「きゅじゅ」

アサットは許されたのがうれしいのかうれしそうに鳴く。

「浅葱ってアサットの言葉がわかるの？」

ツナが場違いな質問をする。

「まーね。精神世界を通して繋がってるから感情ならわかる」

「へー、すごいね・・・」

「理解できてくない？」

「そ、そんなことはないよ!？」

「疑問系になってるし。ま、いや。んで、先にそっちが話してよ。一ヶ月ぐらい前に」

ムク兄が何か行動を起こして大怪我負ったのは知ってる。でも何が
あったのかは知らない」

「何でそれだけ知ってたんだ？」

「ムク兄とは今繋がりにはできるだけ止めてるけど感情だけなら、本
当にうれしい、

とか痛いとかいう感情ね、それは普通に流れてくるから。それが一
ヶ月前には

いつもと違っていた。んで大怪我したってわかるのは私達は大怪我
したら片方の

治癒力、つてか生命力？を供給して片方が死なないかぎりほぼ死
なない契約的

なのをしてるから。そして一ヶ月前にそれはたくさん行使されたか
ら。これでいい？」

「わかったぞ。ならオレも一ヶ月前のことを話してやるぞ」

と云ってリボーンは約一ヶ月前の黒曜生襲撃事件の話だった。

数分後。

「なるほどね。ムク兄ならやりそうかもね。てかそれ私達がイタリ
アに帰った

すぐ後じゃん」

「そつだぞ」

「うわー、どんだけ運無いの？私は・・・」

浅葱はそつ言つと体育座りで座つた。

今まで立つたままだったのだ。

「じゃあ次はてめえの隠してることを全部話してもらつてよ」

「あーあ、もういいよ。話せばいいんでしょ？もういいよ。めんどくさい」

浅葱は半ば自棄になっていた。

「私がムク兄に話してない話はあるけど、多分、てか絶対にムク兄は気づいていた話だよ。話したくない、ってのもあったけどもう気づかれてる」

からいつか、というのと半々だね」

そう言って浅葱は薄く笑みを浮かべる。

「さて、少し記憶話をしようか。不本意だけどアサットを殺される訳にも

いかないし、話さないでツナの家立ち入り禁止とかになるのは困るしね。

奈々さんのお菓子が食べれなくなるのは嫌だ」

と言つと浅葱は一度目を閉じて深呼吸した。

次に目を開けた時に浅葱の目にはやはり光は宿っていなかった。

標的48 報われない努力、来る！

昔、死後の世界である地獄道には1組の双子の兄妹がいました。

その双子は地獄道の最下層にいました。

そこでは暴力的な人がほとんどで、しかも幻覚に侵されているので
ほぼ頭がいかれていました。

そこに子供なんていたら格好の標的ですよ。

双子は毎日暗い狭い小屋に閉じ込められ、暴力を受けていました。

双子はお互いが傷つくのを見るのはもう嫌でした。

しかしたかが5才程度の子供には何もすることができませんでした。

しかし妹の方はもう我慢が出来ませんでした。

兄は妹以外の前では結構普通の、なんともない表情をしています。

けれど妹は知っていました。

兄は妹がいない時は辛い表情をします。

とつても、辛くて、痛くて、我慢して、それでも、耐え切れなくて。

それが兄は妹がいないところではあふれ出す。

でもそれを妹は見てしまった。

だからこそ、もう妹は耐え切れなくなったのです。

妹は考えました。

兄にあんな表情をさせない為にはどうすればいいか。

考えた末に1つの結論に至りました。

自己犠牲。

その名の通り、自分を犠牲にする。

それにとどり着いた日から妹は兄に自分の食べ物も半分渡すようになりました。

今までの量でも生きるのも限界だったのにそれが半分なんて限界も限界です。

そして妹はいつも受けていた暴行も自分が兄の分も受けられないか、と考えました。

そして妹は兄が寝ると、いつも自分達に酷いことを、暴行を加える者達のもとに閉じ

込められている部屋から抜け出して行き、何かの文字が書かれている紙を見せました。

その頃はしゃべるだけでも死ぬ直前まで痛めつけられたので声を発さなかったのです。

紙にはこう書かれていました。

おねがいだから、となりのことをいじめないで。わたしならどんなことでもたえてみせるから。

となりのこゝとほ兄のこゝど。

それに大人達は答えます。

ぎゃはは！そりゃあいい、兄の為に犠牲になるってか？んじゃあ存分にてめえを

ストレス解消に痛ぶってやんよ！

それに妹はこれから待ち受けることに泣きそうになります。

でも兄の為、と自分に言い聞かせて大人達をにらみつけます。

何にらんでるんだよ！？ああ？？そつだ、まずは脱走した罰与えねえとなあ！

と言つて大人達は妹を殴り、蹴り、と傷つけていきます。

そしてその数カ月後。

妹は限界まで衰弱していました。

兄もそこまでとはいかなくとも衰弱していました。

妹は自己犠牲で兄を庇おうと今まで以上に辛い思いをしました。

しかしそんな思いも大人は口約束だけで、兄にも今まで通りに暴行を続けたのです。

その数日後。

双子は五才という年齢で衰弱死しました。

こんなことが双子には輪廻転生した後も続きました。

そして七つ目の世界では、双子は今まで巡った世界で1つつずつ手に入れた能力を

やっと使えるようになり、反抗する力を手に入れたのです。

難波吉さんの『家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る!』とのコラボ小説です!

時系列は黒曜編の前で、肝試しの前辺りです。

私の無の守護者には浅葱視点を載せて、難波吉さんの自由な風には南視点が載っています。

そいではどうぞ

浅葱は今ベルと雲雀の家の居間でお茶を飲んでいた。

「うげ、抹茶苦い・・・」

浅葱とベルは抹茶を作ってみて、飲んでいたので。

「だな・・・」

どつちから浅葱とベルの口には合わなかったらしい。

でも浅葱は一応飲み干す。

「あー、もうダメ……。でも暇だし……。ベルー、どっかで遊んでくる」

「んー、行ってらー」

「あ、抹茶まじりくつても残しちゃダメだよー、この家の倉庫にあつたの恭弥の

許可なく使ったんだし、どうせなら最後まで飲まないで恭弥が怖い」

それにベルは嫌そうな顔をする。

「うー、わかったし・・・」

「ん」

そう言って浅葱は雲雀の家を出て行く。

「ちよび、ぎんぎん行くのかな」

そう眩きながら浅葱は歩く。

「よし、公園へ行こう」

そうと決まれば浅葱は少し駆け足で行く。

浅葱は公園につくとブランコに乗っていた。

そして一回転しよう、という遊びをしていた。

そしてついに浅葱がブランコで一回転する。

するとどこからか声がかかる。

「うて、おい！」

しかし浅葱は華麗に着地する。

するとまた声がかかる。

「着地できたのかよ」

どつちから浅葱を心配して声をかけてくれたらしい。

「くふふ 当たり前です それで貴方はなぜこんなところにいるんです？」

浅葱はその人物に敬語で言葉を返す。

「ん？まあ、何となくかな。それにしても…骸…？いや、右目が普通だし、

左目は眼帯だし…それに女の子だろ？」

するとその人物も返事を返す。

その人物は恐らく女だろうが男と間違えそうな格好をしていた。

「ムク兄、知ってるの？」

浅葱は相手が骸の名を出したことに驚いて思わず敬語じゃなくなる。

「ムク兄…？…もしかして妹、とか？」

「おや？一発で当てるとはすごいですね。察しの通り私は六道骸の双子の妹ですよ」

浅葱は冷静さを取り戻して話す。

「双子!？」

相手の驚きように浅葱はある疑惑を抱く。

「チビ、とか思ってます?」

浅葱からもものすごい殺気が放たれる。

「そんな殺気出すなんての 骸の双子だろ?オレは風間南!骸の…

友達？仲間？

…ま、そんな感じの存在だ。オレは別にチビだなんて思ってねーよ。
人間の

成長期ってのは個人差があるしな」

その言葉に浅葱は警戒を少し解く。

「ムク兄の仲間…？」

「ああ。それで骸の妹だから…六道、何？」

「…六道浅葱ですよ」

「んじゃあ浅葱って呼ばせてもらっせ、浅葱も呼び捨てでいいからな。」

「あ、あと敬語じゃなくてもいいぜ？」

「くふふ ムク兄が仲間を作るとはね、でも、南ならいいかもね。
楽しそうだ

あ、南になら変装解いてもいいかな」

浅葱は敬語を外して話す。

と言って浅葱は眼帯をはずして幻覚をかけていた髪も元に戻して藍色にする。

「うお、その色になったらもつと似てんな」

「まーね　でも私が10歳の見た目ってのは理由があるのだよ」

「理由？」

浅葱は鎖に巻かれた漆黒のおしゃぶりを取り出す。

「アルコバレーノ……！」

南は驚く。

「そうさ。私は10歳の時にアルコバレーノとなって呪いを受けた。それは

赤ん坊になるはずだったんだけど私の中の力と反応して呪いが少し変わったんだよ」

「そっか……。でもま、赤ん坊にならなくて良かったな」

「あー、そういう考え方もできるね。確かに赤ん坊なんかになってたら・・・」

「だろ？」

「うん ありがとう、南」

浅葱が満面の笑みを見せる。

南も少し笑って言う。

「そーだ。浅葱、今から時間あるか？」

「…あるよ。」

「商店街とか行って、遊ばね？」

「うん 行こう」

浅葱と南は商店街を歩いてる。

「なんか見たいもんとかある？」

浅葱と南は並んで歩く。

「んー、ない。南は？」

「オレもないな。んじゃラ・ナミモリー又行くか!」

「お。ケーキがおいしい、って噂のお店だね」

「行ったことなかったのか?」

「うん。お菓子なら奈々さんの食べに行くか、おいしいチョコ菓子
店が

あったからね。ケーキ屋はあまり行ってなかったんだよ」

「へー、じゃあウマイから楽しみにしとけよな！」

そしてラ・ナミモリーヌへ。

そしてラ・ナミモリーヌ店前。

「ここがラ・ナミモリーヌだぜ」

「どのくらい美味しいのか楽しみだね」

浅葱と南は嬉々として言っ。

ラ・ナミモリーヌ店内。

「オレはモンブランとミルフィーユ…それと紅茶」

南がまず注文する。

「かしこまりました」

それに店員が答える。

「んじゃ私はチョコと名のつくケーキ全部」

浅葱のその言葉に店員は驚愕して答える。

「そ、それではチョコレートケーキ、チョコブラウニー、生チョコケーキ、

チョコロール……の13個となりますけどよろしいですか？」

「ん、オツケー。それをお願い。飲み物はコーヒー牛乳で」

「かしこまりました」

店員は若干引き気味で帰っていく。

「浅葱チヨコ好きなのか？つかそんなに食えんのか？」

南は引かずに聞く。

「うん 好きだよ。チヨコがあれば生きていけるかもね それにチヨコと

名のつくもので私が食べれない物も食べれない限界の量も存在しないのさ」

無駄にキラッ、として浅葱は言います。

少しの時間が経つ。

「お待たせいたしました。こちらが注文のモンブランとミルフィーユ、

それに紅茶でございます。そしてこちらがチョコレートケーキ、

チョコブラウニー、生チョコケーキ、チョコロール……

それにコーヒー牛乳でございます」

店員は台車に乗せて運んでくる。

「ん、ありがとうございます！」

「んじやいただきますーす」

そして2人は次々と食べていく。

「むー。美味しい。あのチョコ菓子屋はケーキおいてなかったからな
ー。」

浅葱が美味しそうに食べながら言う。

「だろー、ここのケーキはウマイんだ」

南も美味しそうに食べながら言う。

すると近くに座っていたギャル女子高生の声が聞こえる。

「そーいえばさあ、ここにくる途中にやってたケンカどうなったんだろっねえ」

「さあ？あの郵便局の裏路地にある空き地のところでしょう？遠目にしか

見てないからあまり見えなかったしい？わかんない」

それが聞こえた南と浅葱はぴく、と反応する。

「な、浅葱…聞いたか？今の」

「もちろん　なんか面白そうだね」

「んじゃ…行くか!」

「ん、いーよ　でも食べ終わってからね」

そう言う浅葱のケーキは、もう半分くらい無くなってた。

郵便局の裏路地にある空き地。

ドガガッ！

「「「うわああ！」」」

入り口の近くにいた二人が悲鳴を吹っ飛んだ。

「だ、誰だ！！」

「^{ガキ}子供と…男？」

ビキッ。

何かがキレる音が二回した。

「誰がガキだ！私は立派15歳なんだよ！」

「オレを男と言おうが構わないが、仲間をバカにする奴は許さねえ」

浅葱と南が来たのだ。

「や…ヤベエぞ！コイツら…！」

「野郎共、一気にたたみかけるぞ…！」

ケンカをしていた者は皆、二人に襲いかかる。

それにも関わらず、二人は会話し始める。

「浅葱……」

「ん？なに？」

「合わせ技とか、考えね？」

南が言うと同時に、不良が二人に鉄パイプで殴りかかる。

だがそれを少し身体をずらすだけで、いとも簡単にかわす二人。

「合わせ技、いいねえ　んじゃー南、私と契約してくんない？いいの思いついた

けど説明難しいからさ。契約したら情報送れるからね」

「契約？」

「憑依弾っていう特殊弾があつてね。それを使えば契約した相手に憑依することが

できるのさ。それを私は使った。ムク兄も持つてるよ、もう使ってるかは不明だけど」

「へー、いいぜ」

「ありがとう んじゃ簡単に説明しとくよ。私の契約方法は大鎌で傷つけること。

んで、ただ一方的に憑依したり話しかけるだけなら傷つけるだけでもいいけど、

それより繋がりを強固にするなら大鎌を刺す。刺したら大鎌で傷つける面積が

増えるから、強固になるんだよ。契約の傷は、相手が抵抗しなかったら肉体的損傷

にはならないからね。んで、繋がりが強固な契約すれば精神世界にも行けるように

なるし、互いにテレパシー、的な物を使える」

「へー、すげえな！」

と、話してる間も浅葱と南は敵の攻撃を軽々と避ける。

「ま、わざわざ敵に種明かしするのも嫌だしな。いいぜ」

「んじゃ契約するねー」

と言って浅葱は有幻覚の大鎌を出す。

「避けないでね？南」

っっていつて浅葱は南に大鎌を投げて心臓辺りに突き刺す。

「！？コイツら、仲間割れか！？」

「よし、今の内に!」

不良達は二人の行動に驚くも、今がチャンスだと言つように襲い掛かってくる。

ガシッ!

だが、不良の持っている鉄パイプを、一人が止める。

「あ？仲間割れ…？」

それは、南だった。

「！！！？コイツ…今刺されて…！？傷一つ無い！！？」

南に刺されていた大鎌はいつの間にか霧散していた。

南に掴まれた鉄パイプを持っている者以外はゆっくりと後ろに下がっていく。

「んじゃ、浅葱…」

「うん」

「首狩りと風の協奏曲第一番。

Concerto n. 1 nel vento e cacciatori di teste.

『知らぬ間に血潮舞う独壇場』

”Il sangue volante incontra
tata involontariamente”

二人の声とほぼ同時に指パツチンが響く。

浅葱の目は一になっている。

「ゴ—！南」

「—じお」

とうとう南は空中に駆け上がる。

まるで空中にも足場があるかのようだ。

「な、なんだ!？」

「なぜ空中に!?!ってブゴア!」

セリフの途中で雑魚キャラはどこからか殴られる。

南は全然違うところにいるはずなのにどんどん違うところの敵が吹っ飛んでいく。

敵は知らぬ間に吹っ飛ばされて混乱している。

「くふふふふ　」
「ここが戦場なら技名通りになってますね　」

「なっ！どづいつことだ！説明しやがれ！」

「もう混乱する顔は存分に見れたし、知っていてもかわせないだろ
うから教えて

あげるよ。私はまず有幻覚で人が乗れるくらい丈夫なワイヤーを張り
巡らす」

「オレはその上に乗って空中を駆けながら倒しまくる」

「な、なんだ、それだけ」

「じゃあその間浅葱は何をやっているでしょっ」

「何をやっているんだ・・・？」

「幻覚をかけているんだよ。南の姿が見えないように。違つとこるにいるように」

見えるように。分身して見えるように。ほら君達の後ろにいるかもよっ」

浅葱がそう言つと敵は一斉に後ろを振り向く。

「バーカ、こっちだつつの」

実際は本当の南は浅葱の上空にずっと立っていた。

幻覚で見えないだけで。

そして南は敵の背後から次々殴って蹴って気絶させていく。

1分後にはすでに南が全部倒し終わる

地面には1000人近い男が倒れている。

「んー、楽しかった」

「だね 相手が弱すぎるけど」

「そーなんだよなー。並盛って強い不良とかいないし……」

「だよなー、それが並盛の欠点かなー」

「確かになー」

「そんじゃ、また商店街で遊ぶか！」

「そーだね」

そして二人は暗くなるまで遊んだ。

浅葱は南と別れてから雲雀の家に帰ってきていた。

そして今はベルと2人、夕食を食べていた。

雲雀は今だに並中から帰ってきていない。

おそらく浅葱がさぼった分も溜まっているのだろう。

浅葱は書類整理はするしないと百枚あたり同じく10分弱という速さでできるし、

ある技を使えばその十分の一にできるのだが浅葱は書類仕事が嫌いである。

ちなみにある技とは有幻覚で宙に10本腕を創って、それで書類をもって宙に固定。

それを浅葱の強力な視力でもって見て、さらに有幻覚で10本のペンを創って

同時進行で書きこんでいくので10倍のスピード、十分の一のスピード、

といつわけである。

けどこれ以上増やすと一気に気力が減るので10が今は限界なのだ。

書類仕事が嫌いである浅葱は溜めて溜めて、溜めた末に一気にやる、
という戦法を

最近を取っているのだ。

「つか姫今日何かいいことあった？」

「んー、何で？」

「何かいつもより上機嫌だし ししっ」

「くふふ まーね。楽しい奴と出会ったんだよ」

「へー、姫がいうなら楽しかったんだな」

「うん その人は仲間、って言うてくれたからね。そうだね。私からしても」

その人は仲間であり、親友、っていつのかな？」

そう言って浅葱は笑う。

「ま、とにかくよかったな、姫」

「ん。こんなに楽しかったのはいつぶりかな？昨日ぶり？一ヶ月ぶり？」

「それ全然違っぜ？」

「ま、いーじゃん」

と言って2人は笑いあう。

しばらく雲雀の家から笑い声は絶えなかったという。

標的49 久々の書類仕事、来る！

浅葱は六つの記憶の一つ目を話して話を纏めた。

「と、いう訳だよ？今の話と私とムク兄との契約の話で2つだからね。」

これでツナの家立ち入り禁止は無効。アサットも離してよ」「

1190

それにリポーンは答える。

ツナはもう顔面蒼白、といてもいいぐらいいであらう。

ツナにとっては考えられない過去だからである。

「わかったぞ。２つ、ってことはまだありそうだがもつ脅す材料がねえしな。」

もういいぞ。ありがとうな

と言ってリボーンはアサットを離す。

「..しんき」

アサットは籠から出された途端、浅葱に飛びついて首に巻きつく。

「よしよし、もう大丈夫だよ？」

と言って浅葱はアサットを撫でる。

「お母さん」

アサットは「お母さん」として話す。

そこで今まで黙っていたツナが口を出す。

「浅、葱……。今の話、って、本当、だよな」

「うん？この状況で嘘を言っでどうするのさ？何も楽しくないよ」

「楽しい楽しくないじゃないよ！あんな、あんな、辛い」勝手に同情何てするなよ」「！」

ツナの言葉を遮って浅葱は言う。

「勝手に同情して、それでも何もしない。そんな同情はもついたらない。ただ、

哀れんで、でも本心では自分より下な、不幸な者がいることに安心して、

そんなのはもついたらない。偽善なんて、もついたらない」

「！浅葱……。ゴメン」

「別にいいさ。ツナはダメツナだからね」

と言って浅葱は笑う。

「んなー！ー！それと何の関係ー！ー！？」

「んんんんんん」

ド
ミ。

リボーンにツナは蹴られる。

「イテッ、何すんだよ！リボーン」

「あんな大声上げたら近所迷惑だぞ」

「っ」

「んじゃ、私はもう寝るよ。おやすみー」

「あ、うん。おやすみ」

「おやすみだぞ」

3人は挨拶して、それぞれ寝た。

翠口。

「ふあーあ。んー、久しぶりに8時に起きたかも？」

浅葱はむくり、とベッドから体を起こす。

起きると浅葱は元から着ていた着流しに着替え、借りていた服をた
たんでから持って、

台所へと行く。

「おはようです。奈々さん」

「おはよう、浅葱ちゃん。もうシツ君達は出かけちゃったわよね？」

「そうですね、ま、いいんですけど。それよりも、借りていた服、ありがとうございました」

「いえいえ、また遊びに来てね？」

「はい　それではそろそろ私も出かけることにします」

「そう、じゃあまたね」

「それではまた」

と言って浅葱は借りていた服をテーブルに置き、玄関へと向かう。

浅葱は下駄を履きながら考える。

「んー、まずはどこに行こうか・・・」

浅葱は少しの間沈黙する。

「ん、決まり。まずはホテル行って服着替えて、それから恭弥のところに行くか

書類仕事は嫌だけれども、まあ一応風紀委員だしね・・・」

そうと決まり、浅葱は走ってホテルへと向かう。

浅葱はホテルに着いて今日は藍色に薄いピンクで蓮の花が描かれて
いる着流しに着替えた。

もちろん上には隊服のコートを羽織っている。

それに隊服の左袖には風紀委員の腕章もついている。

「創無戦はそいえば着流しと普通のどっち着よう……。んー、着流しは

楽だけれども……。戦いやささでいえばどっちも同じだし……。

でも大鎌使うなら普通の方が使いやすい、かな……。よし、普通の方で

創無戦は戦おう」

と少々長い独り言を呟くと浅葱は並中に向かう。

ちなみにホテルでは自室のみに行ったので誰にも会わなかった。

「おっはー、恭弥」

応接室のドアを開けながら浅葱は言う。

それに恭弥は書類の山から一時だけ顔を上げ、返す。

「遅いよ。書類がたまりすぎてる。君も半分やりなよ」

「うげ、これを半分？」

「そう」

書類の山はテーブルからはみでて床にもたくさん積みまわっていた。

「あつ、ま、いや。んじゃ、始めるか」

書類仕事開始 12 時間後。

もう夜の 9 時ぐらいだろう。

浅葱は大体 7 万枚ぐらいはやったのではないだろうか。

「なぜ、たかが風紀委員にこんなに書類がたまるんだ・・・」

と言つと浅葱は力尽きて熟睡する。

何だかんだで浅葱は自分の分に加え、雲雀の分も半分ぐらいやったのだ。

熟睡した浅葱に雲雀は浅葱が脱いでいたコートをかけてやる。

「全く。勝手に僕の方までやって勝手に力尽きるなんてね」

と言うと雲雀は浅葱をその場に残して去っていく。

書類仕事はもう済んだので見回りでも行くのかもしれない。

標的50 寝坊癖が呼んだ禍、来る！

翌日午後10時50分。

辺りはもう真っ暗である。

そんな並中応接室。

ソファアールの上で動く影が1つ。

「あれ？まだ真っ暗……。数時間しか寝てない、とか？」

浅葱である。

そして浅葱は辺りを見回してある物を見つける。

応接室に置かれている日付、時間が表示されるデジタル時計である。

そこに表示されていたものは。

「うええ！？10時50分？しかもこの日付、ってことは約26時間寝た？」

「どんだけだよ!？」

浅葱は呆然と口を開ける。

「やばい。非常にやばい。あと残ってるの霧と雲と創無だけだし。霧はクローム

だから絶対見に行くし。雲は、まあ恭弥だろっからいいとして、でも創無だったら

マジやばいし!クロームにも精神世界に行ってた訳じゃないから今日が何戦か

聞いてないし!？」

そこまで考えが行き着くと浅葱は猛ダッシュで並中学校内を走り回る。

「今日はどこ！？あ、体育館電気ついてる。ってことは体育館か！
？」

とりあえず浅葱は全力ダッシュで体育館へと向かう。

体育館の扉は開いていたので浅葱は跳びこむ。

「って、あれ、クロームに、犬に、千種！？つかやばい。止まれな
い！」

浅葱は全力ダッシュの上に跳んだので勢いが殺せず、犬と千種を巻き込んで着地する。

「浅葱さん!？」

「浅葱様・・・?」

そして煙が晴れると浅葱はむくり、と起き上がる。

「痛い。着地失敗なんていつぶりだろ」

「・・・浅葱様？大丈夫・・・？」

浅葱に気づいたクロームが話しかける。

「ん？あ、おっはー
クロームに犬に千種
そして久しぶり犬、千種。
それに

現実では初対面だね
クローム」

「浅葱さん、おっはー、ってもしおはあぢいぢやないですか。」

「だって私はさっき起きたし？」

「いつから寝てたんですか・・・」

千種が半ば呆れながらも言う。

でもその声には敵意は全く無く、久しぶりに会えた、という喜びに満ちていた。

「んー、昨日の夜9時ぐらいから？」

「浅葱さん昔と全然変わってないびょん」

「てゆーか悪化してます・・・」

犬と千種が言う。

「えー、それは悪化じゃないよー。たくさん寝れるようになった、
って喜ぶところだよ」

「浅葱さんは昔から一番寝てたびよん」

「んー、そだっけ？」

「そっだびよん。オレ達は追ってが怖くて寝れなかったのに、浅葱
さんだけ普通に

寝てたびよん・・・」

「ま、いーじゃん ムク兄は犬に千種を信用してた、ってことで」

「・・・それよりも何で五年前と姿が変わってないんですか？」

千種が聞く。

「質問遅いよー、千種クン つかもう隠すのも説明もめんどいな。もっおしやぶり」

隠すのやめちゃえ」

と云うと浅葱はおしゃぶりを隠さず服の上に出す。

「！アルコバレーノのおしゃぶりが隠れずか！？」

「くふふふふ そうだよ。五年前犬達と会った後だね。姿が変わらないのはその影響」

「・・・あと、浅葱様はVARIAなんですか？」

千種が聞く。

「そうだびょん！何でそのコート羽織ってるんれすか？」

「んー？答えは簡単。私がVARIA幹部だからだね。てか気づくの遅くない？」

それにクロームに聞いてなかったの？」

「あんなブス女の話なんてきかないれす」

ブチッ。

何かが切れた。

「くふふ。クロームをブス女呼ばわりするなんて犬でも許せないよ。
クロームは

私の親友なんだから」

親友という言葉に少しクロームの頬が赤くなる。

ドガンッ！

浅葱の華麗な回し蹴りが犬に決まる。

「キヤギョーン！」

「千種もクロームのことちゃんを守ってね。」

浅葱はにっこり笑う。

「……はい」

「あ、そいえば今日って何戦？」

（（（（（今更!？）（（（（

この場のほぼ全員の心が一致した瞬間だった。

標的50 寝坊療が呼んだ禍、来る！（後書き）

ついに50話です・・・。

これも皆さんが呼んでくれたおかげです。

感想が来るたびに体力全回復し、評価やお気に入りが増えているのを見るたびに精神力やら何やらも全て全回復し・・・。

本当にありがとうございます

そしてこれからもよろしく願います

そいでは感想もいつでも待っています

標的51 霧のリング争奪戦開始、来る！

「今日は霧戦だよ、浅葱様」

クロームが浅葱に言う。

「ん、クロームありがと ってことは今日はクロームとマーモンだね」

「はい」

クロームは答える。

若干緊張しているようだ。

「大丈夫だよ、クローム 君は私の親友であり契約者であり弟子なんだ。自信を持ちなよ」

「はい」

クロームの声にはもう自信が宿っていた。

そこで違う声が響く。

「浅葱、君はどっちの見方だい？」

マーモンである。

「あ、マーモン お久ー、私はVARIIAの見方だよ でもクロー
ムは弟子だし？」

「全く、浅葱らしいね」

「お褒めに預かり光栄です」

と云って浅葱はわざとらしく言っ

「褒めてないけどね」

「ま、いーさ。ボス、今日、ってか争奪戦見るの初めてだけでもこ
つち側で

見ていい？久しぶりの犬と千種と話したいんだよ」

その言葉でXANXUSと浅葱の視線が合う。

精神の弱いものならXANXUSのその視線に当たるだけで気絶で
きるんじゃないだろうか。

しかし、浅葱は平然としている。

そして数秒後。

「好きにしゃがれ」

「ありがとう ボス」

と言って浅葱は笑う。

「と、という訳で……さちで見させてもらうからよろしくね」

「なっ！ テメエはVARIAだろうが！」

獄寺が言う。

それに浅葱は口をわずとらしく尖らせて言う。

「えー、隼人と私の仲じゃないかー」

浅葱は完全に反応を愉しんでいる。

そこでリボーンのおしゃぶりが光る。

「ん？っ、やっぱ、アイツも気になったんだな」

するとコロナロが現れた。

しかし寝ている。

「師匠？もう京子と寝ている時間のはずでは？」

了平が言う。

「だからおねむだぜ。」「ラ」

コロネロの鼻ちようちんが割れる。

「だが、カエル乗せたチビの正体がアルコバレーノかどうかを見極めねーと」

なんねーからな」

「ふん。間抜け面下げた奴が増えたか。この戦いで、もっと間抜け面をさらすことに」

なるだろうかな」

「そういえば、ディーノさん。今日は来てくれないのかな」

「アイツは、昨日の夜、急用が出来て旧友に会いに行った」

そしてチエルベツロが口をはさむ。

「そろそろバトルを開始します」

「各霧の守護者はバトルフィールドに」

「よし！では円陣行くぞー！」

了平が張り切って言う。

「え、あ、そ、そっだね」

ツナも同意する。

「…」

山本も張り切る。

「いい。いらないよ、そんなの」

しかしクロームはぼっさり切り捨てる。

「ノリ悪いなあ」

「なんだあアイツは」

「ふん」

それぞれがクロームを批判する。

しかし浅葱が言う。

「ねえ君達。クローム批判したら、どうなると思っつ。」

浅葱がにっこり笑って言う。

「あ、ゴ、ゴメン！クローム！それに浅葱！」

ツナがすぐ言う。

「ん。許す」

そしてクロームが小さい声で言う。

「いってきます」

「ん、いってらー。2人ともガンバレだね」

浅葱は軽いノリで言う。

その後は何か長い説明があったが浅葱は全て無視してぼー、っとしていた。

(説明長い・・・)

とか考えながら。

浅葱は基本自分が関わる作戦とかなら一応聞くが違う奴は大体ノリで大丈夫じゃね？

とか方式である。

そしてチエルベツロの音が響く。

「それでは霧の対戦。マーモンVS^{バーサス}クローム髑髏。バトル開始！」

標的52 霧のリング争奪戦？！クローム対マーモン！、来る！

バトルが始まると同時に、クロームが幻覚を使う。

その中で平然としているものは一部だけである。

もちろんその平然としているものに浅葱も入っているが。

そして浅葱はまだまだこれが本気ではないとわかっているので欠伸びながら見る。

「犬ー、一個聞いていい？」

「なんねすか？」

「クロームってあの格好寒くないの？精神世界では白いワンピース
だったけど」

あの格好とは、へそを出しているところやスカートが短いところ
ある。

「オレに聞かれても困りますねす！」

「だよー……じゃあ干」わかりません「あ、うん。ゴメン」

そうこう話している間にマーモンが青い触覚のようなものでクロムを締め付けていた。

それにツナ側はあわてるが浅葱は平然とする。

「浅葱？何で笑ってるの？」

ツナは浅葱に聞く。

確かに浅葱は笑っていた。

「くふふふふ あー、術者じゃないとわからないよねー。これは

「えっ？」

「誰に話してるの？」「うち」

ツナが聞き返そうとした瞬間にクロームの音がマーモンの後ろから聞こえる。

そして今までクロームの姿だったものがバスケットボール入れの籠になる。

「んなー!どうなってんのー!?!?」

「幻覚だよ」

「幻覚って……」

浅葱が言った単語で何やらツナ達がごちゃごちゃ言うのが浅葱は気にせずに見視する。

そしてマーモンがおしゃぶりから鎖を外しアルコバレーノの力を解放し、

またごちゃごちゃやってるが浅葱は気にしない。

「ねえ犬、千種」

浅葱は少し悲しそうな声で話しかける。

「何れすか？浅葱さん」

犬は気づかないが千種は浅葱の変化に気づく。

「ふと思うんだよ、私は。ずっと犬達に聞きたかったんだ・・・。

君達は、ムク兄と居て、何よりも最初私達についてきて、後悔はして
る？私達に

ついてこなかったら君達は戦いに関係なく生きれたかもしれない。
どこか遠くに

行ったりとかね「そんなことないねす！」！？犬？」

突然大きな声を出した犬に驚く浅葱。

「オレ達は、浅葱さん達が居ないと、あの時死んだ。浅葱さん達
がオレ達を

救ってくれたんねす！だから後悔なんてしてないびよん。絶対ねす。もちろん柿ピーも」

千種は無言でうなずく。

「そう。なら、良かった」

浅葱はホッとしたような声で言う。

そして微笑む。

「ありがとう」

「／／／そっ、そんなお礼言われることじゃないねす」

「／／／……そっけです」

「くふふ　そっか、んじゃまた戦いを見ようぜ」

するとリボンが丁度浅葱に話しかける。

「浅葱、お前のおしゃぶりに巻きついてる鎖はバイパーのと同じ物か？」

「そうだよ」

「それはおしゃぶりの力を封じる物なのか？」
「コラー！」

今度はコロネロが聞く。

「まあそうだけでも、でも完成してたら私達はこんな姿じゃないはずだよ？」

「未完成ってことか？」

「くふふ。さっきマーモンが言ったよね？呪いを解く努力もしてない奴には」

教えたくも無いね」

「……」

その言葉にリボンとコロネロは黙る。

「ちょっと、ちょっと待ってよー！さっきから呪い、って。それにこんな姿、ってどついでに？」

ツナが聞く。

「何でもねーぞ」

リボーンが答える。

「何でも、って」

ツナがまだ何か言いたそうだったがリボーンのいつもとは違う表情に口をつぐむ。

「さあ、戦いを見なくてもいいのかな？ツナ。こうしてる間も戦いは進んでるよ？」

浅葱が言う。

「あ、そうだった！」

戦いはクロームの不利な状況だった。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「もう君の負けだよ。諦めたらどうだい？」

「絶対、負けない・・・！」

クロームは言つと三叉槍をくるくる回してから地面に勢いよく叩きつける。

「..」

すると辺りに火柱が立ち上る。

その一本にマーモンが飲まれる。

「やった！」

ツナが声を上げる。

「まだだぞ」

しかしリボーンが言う。

するとマーモンが火柱からでてくる。

「ムム……？いきなり力が上がった？」

「マーモンは服が少し焦げていた。」

「煙も少しでていたがすぐにおさまる。」

「くふふ　クロームやっと私の力も使ったかな？」

「え？浅葱の力？」

ツナが聞く。

「私とクロームはムク兄とクロームの関係とほぼ同じだよ。ま、私はどこにも

囚われていないけどね」

「..!」

クロームは力を全開にしてマーモンに幻覚を使う。

すると昔浅葱が使った火の蛇のように火柱がそれぞれなり、全てがマーモンに向かう。

「ムム！これは今までとは段違いだね」

と言ってマーモンは今度は顔の部分から吹雪を出す。

その吹雪に当たった所は次々と凍っていく。

数秒すると火の蛇が全て凍りつく。

ところどころ火が漏れていたがそれも全て凍る。

「あ……」

「やばいかも、クローム」

浅葱は呟く。

「え、どういふこと？浅葱」

クロームは呆然としている。

それはそうだ。

「だって、幻覚とは人の知覚を司る脳を操るものだ。だから術師の戦いで

幻覚を幻覚で返されるということは」

そこでマーモンと浅葱のセリフが重なる。

「知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示す」

標的53 霧のリング争奪戦？久々の邂逅、来る！

クロームの足元から氷ついていく。

「っ」

それでもクロームは幻覚を創ろうと念じる。

「もう何を念じても無駄だよ。君はすでに、僕の幻覚世界の住人なんだからね」

とマーモンが言うとクロームは飛ばされて、氷に叩きつけられ、地面に落ちる。

「うっ」

クロームは地面に落ちて三叉の槍が少し遠くにあるとわかったら必死で手を

伸ばして、持つ。

それを見たマーモンは言う。

「ム、どちらその武器は相当大切な物のようだね」

マーモンはそう言い、槍を壊そうとする。

「ダメ……」

しかしマーモンはますます力をこめる。

「ダメー！」

クロームの悲鳴と壊れるのが同時だった。

「はっ」

犬と千種が動き出しそうになるのを浅葱は片手で止める。

「浅葱様・・・？」

「ダメだよ、犬、千種。そこには赤外線もあるし、何よりクロームは大丈夫だよ」

「ゲホッ、ゲホッ！」

それでもやはりクロームは咳き込んで血を吐いて、倒れる。

「え、え!？」

「どうしたんだ!？」

「顔色が急に」

「お、おい!アレを見る!」

クロームの腹が潰れていく。

「陥没していく・・・!?!?」

「これも幻覚!?!?」

「ムム、これは現実だ。どうなっている!?!何だこの女」

マーモンが言う。

「浅葱！？クロームはどうなってんの！？お腹が潰れて……。あのままじゃ！」

ツナは浅葱に聞く。

「くふふふふ　大丈夫、大丈夫。見ててごらん」

浅葱は言う。

「それにベルー？私の親友兼契約者権弟子を舐めてもらっちゃ困るな」

「姫？」

するとクロームの内臓が戻ったのか、お腹が元に戻っていく。

「っう！ゲホッ！」

クロームは何とか起き上がるけど立ち上がれはしないようだ。

「今度は腹が元に戻ったぞ!？」

「どっつなってるんだ!」

浅葱は少し真面目な顔になる。

「あ、でもやばいかも・・・」

「浅葱さん？どういことねすか？」

「直前に私の分も全開で使ったからさ、クロームの内臓に力が自動で回るのが

少し遅れたんだ。そんな短時間だろうが人の肉体から内臓がすっぱり

抜けるってのは、やばいんだよ」

「それって、結局やばいってこととーとー!?!」

「そうなる」

するとクロームの周りに霧が発生して、クロームが見えなくなる。

「あれ、って・・・」

浅葱は一転して、泣きそうな、嬉しそうな声で呟く。

すると明らかに少女の物ではない、少年の声が聞こえる。

「クフフフフ」

「ムム？男の声？」

すると霧が一際濃く集まっていたところから衝撃覇のような物がマ

ーモンに

向かっていき、マーモンに当たる。

「へいわ、せいわ」
「...」

そんな悲鳴を上げ、マーモンは吹っ飛んでいく。

「随分粹がっているじゃありませんか、マフィア風情が」

霧が大方晴れ、姿が見える。

それは六道骸であつた。

「誰だ？」

バジルと了平は不思議そうにする。

「んん？」

「娘が……」

ベルとレヴィが眩く。

「六道骸、間違いない」

「骸、無事だったんだ……」

「お久しぶりです、舞い戻ってきましたよ、輪廻の果てより」

骸は言う。

「奴が霧の守護者の正体なのか、コラ！」

それにリボーンはフツ、と笑う。

「んん？六道骸？浅葱と同じ名字？というか浅葱と瓜二つじゃないか」

「おや、また言われますね。まあ、その話はまた後で」

六道骸は言つと少し後ろを向く。

浅葱が居たところである。

なぜ過去形かといえば。

浅葱は観客スペースの隅っこで体育座りして、幻覚をかけて見えなようにしていた。

「やばい！何あの成長ぶり！？記憶の中では今みたいに自由も無かったから、今の方が栄養はとれるのはわかるよ？わかるとも。わかるよ、マジで！でも、何だよ！アレは！私は呪いで成長止まってるけど、止まって無くてもあんなに背高くなる自信ないんだけどね！それでも双子か！このヤロウ！もう私は悲しいよ？つか妹だけでも生まれるのが数分、数秒早ければ私が姉なんだよ？なのに、なのに、これ何十センチ身長差あんの？50センチはあるんじゃない？やばい・・・。プライドずたずた・・・。その上に気力もやばいかもしれない・・・。あ、でも戦いなら勝てるかも・・・？嫌、絶対勝てるし？そいえばムク兄と会ったら契約しようと思ってたけど昔の痛み分け的な契約でもう契約できてんじゃない。アレって、めっちゃ繋がり深いから憑依とかだけの契約なんてわざわざもう一回しなくても大丈夫なんだよね。って！そうじゃなくて！」

と浅葱はずっとぶつぶつ呟いていた。

あれから浅葱はずっと一人、呟いている。

周りが幻覚世界になってようがんもん知るか、である。

しかも周りからは自分に幻覚をかけているので見えない為、ぶつぶつ
つ眩きを誰にも

止めてもらえないのだ。

まあ見えていても止められるかは疑問だが。

「第一私とムク兄の身長差はどこから始まったんだ！ナツポーの分
際で！」

「誰がナツポーですか?!?!」

浅葱はいきなり聞こえた声に振り返る。

「ムク、兄……」

これが六つ前の前世からもずっと一緒にいたのに、8年会いも話しも

しなかった双子の再会であった。

標的54 霧のリング争奪戦？〜八年ぶりの再会〜、来る！

浅葱は先ほどまでぶつぶつ骸に文句を言っていたのに、いざ骸を前にすると何もでてこない。

それどころか目が潤んでいく。

「あう。ムク兄・・・、骸・・・、隣の子・・・！ずっと、ずっと会いたかった！」

と言って浅葱は骸に飛びつく。

「ずっと、ずっと、会いたかった。寂しかった。悲しかった。ベル

達はいたけど、

ずっと隣にいた人がいなくなっただんだ」

「ええ、僕もですよ」

いつもは取り乱しもしない浅葱が取り乱し、骸は今までみたことも聞いたことも無く、

想像もできないような優しい表情と声なので周りは声をかけることもできない。

まあVARIIAはすでにいなくなっているが。

「でも、本当は私が悪いんだよね……。あの時、意地なんか張らないで戻ればよかった」

と言うと浅葱は顔を上げて骸と目を合わせる。

「ごめんね……」

「それは僕もです。ゴメン、なさい」

「おお！ムク兄が素直に謝れるようになった！？」

久々発動、浅葱のシリアス雰囲気ぶち壊しスキルである。

「やっぱり浅葱は浅葱ですね。ハア。というかそれを言うなら浅葱もでしょっ？」

「何だと！それは私を馬鹿にしてるのか？このヤロウ！」

そして2人は一端離れて構える。

しかし、数瞬後、2人は笑いあう。

「くっ、ははははは　こんなのも久しぶりだね」

「ク、ハハハ！そうですねえ」

「あ、そうだ、この八年、色々あったしね。記憶の共有しようぜ」

「ええ、いいですよ。もう五年前の契約は効果が切れましたからね。
記憶の

共有ぐらい簡単にできますし」

そして2人は手を繋いで目を瞑る。

「あ、そいえばマフィア何個潰した？」

「中ぐらいは1つ。小さいのは十数個でしょうか」

「フッ。私の勝ちだね。大が一個に中は十数個。小は、数十個、かな」

「はあ、まあ仕方ないですね。今回は浅葱の勝ちにしておきますよ」

「何おう！ん、記憶の共有終わったね。つかそろそろムク兄こつちに留まるの」

「限界じゃない？」

「そうですね。それでは、今度は精神世界で会いましょう」

「うん。またね」

と言つと骸は倒れ、クロームの姿になる。

「お、っ」と

それを浅葱はクロームの方が身長は大きいのに受け止める。

「っつて、軽っ！犬！千種！クロームに何食べさせてるんだ！」

「麦子ヨコレす」

「馬鹿か！せめてチョコクッキーも食べさせる！」

そこで今まで話に参加できなかった面々も参加する。

「んな！それ大して変わらないじゃん！」

「ツナ、麦チョコとチョコクッキーの区別もつかないようなら死んじまえ」

「んなー！ー！そんなにー！ー！？」

「くふふふ ま、いや。ところで明日の争奪戦って何戦？」

「また聞いてなかったのかよ！」

「だって。ま、いいじゃん。教えてよ」

「……創無戦です。浅葱様」

「お、マジでか。そっちの創の守護者は誰？」

「VARRIAに教えると思ってるのかよ」

獄寺が言う。

「ワ、ワタクシ、で、ですわ」

今まで後ろの方で幻覚汚染の影響がふらふらしていた馬羅が言う。

それを聞いた浅葱の表情が変わる。

「へえ、佐川馬羅、ね。なら愉しみだね」

と言って浅葱は凶悪な笑みを浮かべる。

「さて、と。今日はそうだね。黒曜センターに行こうかな。さ、行くよ犬、千種」

「はいねす」

「……はい」

クロームは浅葱が背負って歩いていく。

「じゃー、じゃー、」

「あ、うん」

と、いつものように霧のリング争奪戦は幕を下ろしたのだった。

標的55 創無戦当日昼間〜ver・ツナside〜、来る！

「ねえ、リボン。佐川さん本当に大丈夫なのかな・・・」

ツナは相変わらずバジル達と修行していたが、今は休憩中であった。

「わからねえぞ。オレ達の側には創無に相応しいのが誰もいなかったんだ。」

だから創無だけは不戦敗にしようと思ってたんだ。まあ向こうにもいるとは

リングを配る時はまだ確定できてなかったがな」

「うん」

「だが、向こうには無の守護者として、浅葱になった。それでもうこちらは

不戦敗にするか、ってなった。だが、そんな時、佐川が創の守護者に私が

なる、と言ってきたんだぞ」

「それは知ってる……。けど、何で断らなかったのさ！」

「最初は断ったぞ。だけどあいつは引かなかった。それにあいつは一般人、

って訳でもないんだぞ。あいつはある中小マフィアのボスの娘なんだ」

「！？」

「そのマフィアはな、いわゆる少数精鋭なんだ。そして、少数精鋭
と言っても、

戦闘がすごいんじゃない。情報操作や発明に特化してるんだ。だか
らこそ、

情報戦のみで比べるならボンゴレにも引けを取らないとも言われて
る。

まあ、情報操作されてるからそのマフィア自体知ってる人は少ない
がな」

「なっ！じゃあ、佐川さんも情報戦が得意なのかな・・・？」

「知らねーぞ」

「んなっ！」

「ただ、そのマフィアは発明にもすぐれている、つつつたる？だから、戦闘と

なれば非常に優れた武器で、機械で戦うといわれる。機械なら人の個人能力は

関係ないしな。だからこそ、個々人の戦闘能力が少なくても他のマフィアに

捕まって情報源とかにされてねーんだぞ」

「へー……。浅葱と佐川さん、どっちが勝つの、かな……」

「普通に考えたら、浅葱だな。けど、佐川は何してくるかわからな
えから、

やっぱりわからねえな」

「そっ、か」

「ツナはどっちに勝ってほしいんだ？」

「えっ？オレは……。この争奪戦で負けたら、皆がやばいし、でも、

浅葱にも傷ついて、ほしくないし……」

「やっぱりツナは甘いな」

「でも、浅葱だって少しだったけど、クラスメイトだったし、今でも

クラスメイト、ではあるらしいし、それに、友達だし」

ツナは友達というところではっきりと言っ

それにリボーンはニッ、と笑う。

「それを忘れるなよ。ツナ、テメエは甘いがそれがいいところでもある。

そこがファミリーをひきつけてもいるんだ。甘い、ってのは言い換えれば

優し過ぎるって意味でもある、でも仲間思いなのは悪いことじゃねえからな」

「リボン、うん！オレは、やっぱり友達には誰も傷ついてほしくないんだ。」

だから、オレは戦う」

そう言ったツナの目には光が宿っていた。

それにまたリボーンはニツ、と笑って言う。

「ならばさっそく修行始めるぞ！」

と、またツナの修行は始まるのだった。

標的56 創無戦当日昼間〜ver・浅葱side〜、来る

黒曜センター午前6時。

ここは黒曜センターで一番大きい部屋である。

その一番奥にある、以前は骸が座っていたソファーに浅葱は横になり寝ていた。

今の浅葱の姿は着流しではなく、普通の隊服。

黒のショートパンツに太ももまである黒のニーソックス、それにブーツ。

上は薄水色の霧みたいな模様のはいったぶかぶか長袖Tシャツ。

裾はショートパンツが半分かくれる程度だ。

そしてその上から前を開けたVARIIA隊服のコートを着ている。

袖がすっぽりと手を隠している。

裾は膝辺りだ。

昨日浅葱は一度ホテルに戻り、服を着替えてきたのだ。

そしてその浅葱が身じろぎをして、起き上がる。

「む？久しぶりにちゃんとした時間に起きた、かも・・・」

そして浅葱は周りを見渡すと犬、千種が眠っているのを見つめる。

そしてクロームは今起きた所のように起き上がって、目をぱちくりさせながらこちらを見た。

「浅葱、様？あれ？いつの間に、ここに・・・」

それに浅葱はクロームの前に一っ跳びして降り立ち、答える。

「昨日はあの後、ムク兄がこっちに実体化してね、マーモンを倒したんだよ。」

「んで、明日の対戦は創無、つまりは私だね。」

「！私……。骸様の役に立てなかった……。」

そう言って顔を俯かせ、落ち込むクロームの頭を浅葱は身長が低いくせになでる。

「大丈夫だよ、クローム。クロームはムク兄の役に立てたよ。」

凧はムク兄の役に立てたんだ」

それにクロームは顔を上げて、浅葱を真っ直ぐに見る。

「本、当・・・？」

「うん クロームはわかんなかったかもだけど、クロームと戦った
ことで」

マーモンは結構消耗してたんだよ？それにクロームの幻覚は本当に一級品だよ。

そんなレベルの術師はそうそういないんだよ」

「／／あり、がとう。あ、今日って浅葱様が戦うんだよね・・・」

「ん、そーだよ でも心配は無用だぜだぜ？私を誰だと思っている！」

それにクロームはくすり、と笑う。

「浅葱様だよ。でも、気をつけてね・・・？」

「ん。わかってるよ。どんな相手でもどんな秘策が待ってるかわか
ったもんじゃないからね」

と言って浅葱は笑う。

「あ、今日はクロームちゃんと寝てなよ？まだ疲労残ってるだろうからね」

「うん。ありがとう」

「んーん。んじゃ私は精神世界で久しぶりにムク兄と遊びたたかいでもしてくるかな」

「がんばってね」

「うん 今度こそムク兄に勝ってやるさ あ、ご飯はちゃんと食べるんだよ？」

そいじゃあ、起きたばっかだけど、またおやすみ、クローム」

「はい、おやすみ。浅葱様」

と言うと浅葱はソファーに戻り、精神世界に行き、骸と一日中遊んだ。

クロームはとりあえず、朝ごはん、麦チョコとチョコクッキーを食べ、

疲労を取る為にまた寝たのだった。

標的57 創無のリング争奪戦？！戦いのルール説明、来る！

並中深夜10時45分グラウンド。

この場にはツナ、獄寺、山本、笹川了平、リボン、コロネロ、シヤマル、

馬羅、それに何と雲雀も居た。

後は、XANXUSにベル、レヴィ、ゴーラモスカが居た。

後いないのは浅葱達だけである。

ちなみに馬羅は無駄に大きなキャリアバッグ的な物を持ってきていた。

大きさはちょうど馬羅と同じぐらいであるつか。

「しししっ 姫まだかな」

「うむ。最近全然話してない・・・」

「テメーは昔から話してないだろ」

と言う言葉にレヴィが切れ掛かりそうになったとき、新たな声が響く。

「…」

ゴスッ。

「ぐあっ！」

いきなり空中から浅葱が降って来て、着地の時にレヴィを蹴っ飛ばして、

レヴィの上に足で着地したのだ。

そして乗っいたらすぐに降りる。

「お久ー、皆 それにボス 精神世界で遊たかんでてたら遅くなっちゃった。」

てか引き分けだったし・・・」

レヴィとゴーラモスカは華麗にスルーをする浅葱である。

「お久ー、姫」

「おせえぞ」

「ゴメンゴメン、ボス」

「ってか浅葱なんでいきなり空中に!？」

ツナが聞く。

「ん？屋根を伝ってきたからその勢いでぴょん、と」

(絶対ぴょーんで済む高さじゃなかったよ！)

とツナは心の中でツッコム。

「あ、やっと来たね、クローム、犬、千種」

「は、早いびよん。浅葱さん」

「ハア、ハア・・・、ハア・・・」

クローム達は息切れしてついてきていた。

そして今まで口を開かなかった、というかいなかったチエルベツロ
がいきなり現れ、言う。

「それでは、創無の守護者が集まったので、今晚の対戦を開始しま
す」

「まず、創無戦のフィールドはグラウンド内全てです。観客席は端に設けます。」

そして、グラウンドとグラウンドの外の境目には金属製の糸で編んだネットを

張り巡らせており、さらにそこには電気を通してあるため、出ることはできません」

「それでも無理に出ようとした場合は失格となります」

「要するに、出ようとしなければいいんでしょ？」

「そうなります」

「そして創無戦は霧戦と同じく、特別な仕掛けは何もありません」

「理由は創無の守護者の使命にあります。創の守護者の使命は

『その魂の暖かさで持ってファミリーを癒し、全てを創造する』、

無の守護者の使命は

『その魂の闇で持ってファミリーの敵を壊し、全てを無に帰す』

の為に仕掛けはいらぬのです」

「創無のリング戦の勝利条件は今までと同じく、相手のリングを奪い取り、

創の守護者なら創のリングを、無の守護者なら無のリングを完成させることです」

「そして、今戦いにおいては、時間制限などは一切無く、決着がつくまで続くこととなります」

「それでは、観客の皆さんは観客席に移動してください」

その声でぞろぞろ移動を開始する。

だが、浅葱に声をかけるものも数人いる。

「がんばれよ、姫」

「浅葱様、がんばって、ね」

「浅葱さん、がんばってくらさいびょん」

「……。犬と同じく」

「ありがとう でもクローム達はツナ側だろ？いいの？私応援して」

「浅葱様は、私達の仲間、だから」

クロームは言う。

「！ありがとう、クローム」

「はい」

「そいじゃ、行ってくるよ」

「行ってらっしゃい」

クロームが言いつと浅葱はフィールドの真ん中へと歩き出す。

そして浅葱と馬羅が向かい合う。

馬羅はあの無駄に大きいバグを持ってきている。

そしてチエルベツロが言う。

「それでは創無の対戦。六道浅葱^{バーサス}VS佐川馬羅。バトル開始！」

標的57 創無のリング争奪戦？〜戦いのルール説明〜、来る！（後書き）

いきなりですが11月8日より11月12日まで私は音信不通となります。

なぜなら、その期間は修学旅行なのです。

しかも機械類はもちろんダメなので、元から私の携帯はモード無料じゃないので携帯ではインターネット使わないんですけども、帰ってくるまでインターネットが使えないということなのです。

ですのでもちろん小説家なるうにもログインできないし、閲覧できないので……。

しかし無の守護者は12日まで予約投稿してありますので毎日一話更新されます。

その間は感想返信等できないですけど、帰ってきてみたら感想とかあったら嬉しいので一行でも書いてくれたら嬉しいです

そいではいつも読んでくれてありがとうございます

標的58 創無のリング格闘戦？！馬羅の兵器、来る！

バトル開始の合図で浅葱は跳んで馬羅に殴りかかる。

ビュッ！

風斬音が響く。

そして馬羅は即座に後ろに跳んで避ける。

ドゴオンミッ！

浅葱のパンチが地面に当たった所を中心に網目状に地面が割れる。

「な、何あの威力……！」

ツナが叫んでいるが気にしない。

だって浅葱はツナだって死ぬ気になればできるんじゃないの？と思

っているからだ。

「あれれ？何で佐川馬羅なんかに避けされたのかな・・・？」

浅葱は不思議そうに問う。

「ワ、ワタクシをそこまで舐めてかからないほうが、いい、いいです、わ、わよ？」

ワタクシは、て、敵の動きを予測してくれる「コンタクトを、っ、っ、っ
けている、んですの」

「へーえ、それは君の自慢のファミリーに作ってもらったのかい？」

「そ、そうですわ、わよね？」

「へーえ。じゃあそれは君の力じゃなくそれを作った人の力だね」

「ち、違いますことよ……」
「これを、つ、使いこなすはワ、ワタクシ、ですの。」

だから、ワタクシの、ち、力ですわ」

「ふーん。まーいいや。とりあえず佐川馬羅をボコボコにできれば。

さ、その鞆は何なのかな？切り札とかはちゃっっちゃと使った方がいい
ーよっ。」

「そっぴです、わ、わね」

と浅葱が言つと馬羅は鞆を開ける。

すると中から随分と人型に近いロボットが出てきた。

それはゴーラモスカが少し細身になったような物で体のいたるところから刀が生えていた。

「こ、これは、ワタクシのファミリー、インデビデュアレファミリーが、つ、造った」

戦闘用ロボット、デュアレモスカVER.3と、い、言いますの。
どこかから入手、

し、した設計図を基に改良を、く、繰り返して作った、んですわ」

「また、モスカかよ・・・」

そう言った浅葱の目には闇が渦巻いていた。

それを見た馬羅が一瞬ビクッ、とするがすぐにデュアレモスカに指示を出す。

「行きなさいデュアレモスカ！ワタクシの敵を、殲滅なさい！」

「へーえ、がんばればキョドらなくてもしゃべれるんじゃない？さてと。」

デュアレモスカだけはどんぐりの強いのか、な！」

その声と同時に浅葱は向かってきたデュアレモスカに回し蹴りを本気で放つ。

バコオッ！

しかしデュアレモスは片手で受け止め、浅葱を吹き飛ばす。

「！」

浅葱は20数メートルという高さまで飛ぶ。

普通ならこんな高さから落ちたらお陀仏である。

「くふふ 以外と強いじゃないか……。馬羅の分際で」

という浅葱は有幻覚の大鎌を右手に出して、持ち、さらに有幻覚の足場を出し、

それを空中で蹴って落ちる速度をさらにあげる。

そして落下の衝撃もあわせて、大鎌を遠心力で振り回し、デュアレモスカにぶつける。

キーンッ！

「チツ。切れないし。なら！」

と言って浅葱は連続で斬りつける。

キーンッ！

ギーンッ！

キキーンッ！

しかし全てが防がれ、デュアレモスカも切れない。

そんなある時だった。

今まで外野でデュアレモスカと浅葱の戦いを見ていた馬羅が剣を持ち、浅葱に切りかかったのは。

「！」

スパアッ！

浅葱はそれに気づくが、デュアレモスカも居る為、十分に避けることができず、

背中を後ろから縦一文字に切られる。

「・・・」

浅葱は無言でデュアレモスカと馬羅から離れる。

幸い傷口は深くないようだが服は一字に切れていたようだ。

そして、広範囲に切れたために、上半身の服がずり落ちる。

「..」

浅葱は慌てて掴んで、後ろが半分には切れている長袖Tシャツを取って、胸の辺りに

リボン縛りで縛り付ける。

しかし胸以外は上半身が丸見えである。

そこにあったのは、浅葱がずっと隠したかったもの。

骸には特に隠したかった忌まわしきもの。

禍々しい烙印が上半身全体に広がっていた。

標的59 創無のリング争奪戦？！禍々しき烙印、来る！

「きゃっ！な、何ですの、そ、それ、はい、いったい、何ですの？」

馬羅は浅葱の烙印を見て悲鳴を上げる。

それを見たクロームも目を見開く。

どつちやら骸もクロームの中から創無戦を見ているようだ。

「あーあ、佐川馬羅のせいでムク兄にはれちゃったじゃん。まー、ムク兄なら

昔から知ってたんだろっけど」

「それは何だ？」

リボーンが問う。

「えー、言わないとダメダメみたいな感じ？」

「浅葱さん……？」

犬が心配そうな、それでいて不思議そうな声を上げる。

「んー、ま、いつか。教えてあげるよ」

と浅葱は言う。

「ま、ツナとかリボンやムク兄とかにしかわかんないとは思っけど、」

「わかんない人は後でツナにでも聞いてね」

そして浅葱は話し出す。

「ま、ツナとリボンに前話した続きからね」

「しゅ」

「あその他に、私達には五つの記憶がある。でも、私にはムク兄と違
って、

もう一つだけあるんだ」

そこで浅葱は言葉を切り、息を吸う。

「私は六つの記憶の全てでずっとムク兄を守ろうと無駄な努力をしていた。

でもそれで同情するものなどいなくてね。むしろ嘲笑われたのさ。
馬鹿な妹、

気づいているのにまだ続けるなんて、殴られすぎて頭が可笑しくな
っちゃった？、

とか、ね。けれど私はやめなかった。その時は、続ければいつか努
力は報われると

思ってたから。でも無駄だったよ。そんなものはね。この痣はその
烙印。

私にはさっきも言った通り六つとも一つ、とても短いけれど記憶
があるんだ。

そこには六道輪廻の神様のな奴等がいてね。私はそいつらにも嘲笑われた。

私とムク兄は六つをまわって、六道輪廻それぞれのスキルを手に入れた。

でも私にはもう一つある。でもそれはスキルとかいう物より、欠点と言った方が

正しいかもね。この烙印は私が永遠に記憶に囚われることの烙印。無駄な自己犠牲を

した結果。神はそんな私を見ておもしろがった、その烙印。嘲笑ってこれをつけた。

これが持つ効力は絶対記憶能力と苦痛。これは私が少しでも感情を揺れ動かしたり

したらこの烙印から痛みが広がる。ま、もう慣れたけどね。そして絶対記憶能力は

すごい、とか思つかもしれないけど、逆に言えば、辛いことも全て忘れられない。

この烙印を押されたのは多分この世界に来るすぐ前だ。けど、記憶というのは

忘れたとしてもほんの片隅に残っているものでね。その全てが呼び起こされ、

修復され、私は覚えている。本当に全てを、ね。痛かったこと。相手に

嘲笑われたこと。その表情。殺されたこと。殺された時の痛み。餓死寸前の苦痛。

毒を飲まされた時。殺された時の相手の表情も、全て、全てだよ。そして最後に

六道輪廻の神は言った。『我等からの贈り物を忘れられぬようにしてやる。感謝しろ』、

とね。最後の最後まで私、私達は迫害され、蹴落とされ、差別され、否定された。

ムク兄は過去を忘れて前を向けるかもしれない。いや、世界への復讐ってのも前を

向いた証拠だよ。でも私には無理なんだ。過去に縛られ、前を向けない。それに、

私はもう諦めてしまったからね。でも後悔はしてない。私はムク兄が幸せになれば、

笑うことができるなら、それで幸せだからね」

そう言って浅葱は笑った。

「浅葱・・・」

クロームの体を借りた骸が言う。

「ムク兄はでも知ってたでしょ？このこと。それでも私がムク兄が私を止められ

ないようにしていた。だから、ただの自業自得で、自己満足だったんだよ、私はね」

そして浅葱はクローム、骸の方をしっかりと見て言う。

「だから、お願いだからムク兄が負い目を感じるとかやめてね」

とほつきり言つと、浅葱は馬羅の方を向く。

「さ、続きを始めようか」

標的60 創無のリング争奪戦？〜アルコバレーノの力〜、来る！

「そいえば佐川馬羅はなぜ話してる時待ってたの？話してる時は隙めっちゃあったっしょ」

浅葱は純粹な疑問から聞く。

「ワ、ワタクシも、は、話を聞き、情報を、え、得る為ですわ」

「ふーん。ま、いいけど んじゃ今度こそ貴方を、壊してやんよ」

ゾクッ。

浅葱の殺意がこもった言葉に馬羅は震える。

「それはっ、無理です、こ、ことよ！行きなさい、デュアレモスカ！

今度こそワタクシの敵を殲滅なさい！」

そう馬羅が言うとデュアレモスカがキュイイイン、とスイッチが入ったかの

ように音が鳴り、あちこちから生えていた刃がぼろぼろ四分の三ほど落ちていく。

「？」

浅葱は不思議そうにそれを見る。

そして、デュアレモスカが消える。

「!?!」

否、消えたのではなく、高速で、音速で移動し始めたのだ。

「刃を落としたのって軽量化するためか。元から余分に、異常に多く付いて

いるから、減らしても支障はない。どころか、それぞれは切れ味も
だけど硬さを

半端無くする為に重過ぎる重量。だから、減らした分だけ速くなる、
ってことかな」

「そ、そつですわよ。この速さにはさすがに人ではついていけない、
は、はずですわー！」

馬羅は勝ち誇ったように笑う。

しかし浅葱は不適に嗤う。

「くふふ それはどうかな」

浅葱は首から提げている漆黒のおしゃぶりに巻かれている鎖を外す。

1381

カアアア。

鎖を外すとリボン、コロネロのおしゃぶりと共鳴して黒く光り輝く。

そして浅葱の体にも変化が訪れる。

耳が少し尖り、犬歯が鋭く伸び、手の爪が鋭く5センチほどに伸びていた。

1382

「！な、何ですの、それは。ま、まるで、あ、悪魔のようですよ」

馬羅のその言葉に浅葱は薄く嗤って言う。

「悪魔、ね。確かに、自分でもそう思うよ。まあ、おしゃぶりの封印を解いたし、

アルコバレーノの力を舐めない方がいいよ?」

と言つと浅葱は消える。

「ヤ、ヤ、ヤ」

「こっち」

その声に馬羅は上を素早く向く。

「上！？な、何で、あ、あんなに高く！人間技じゃ、あ、ありませんわ！」

馬羅の言ったとおり浅葱は人間で到底跳ぶことでは届かない上空数百メートルに居た。

そして浅葱は何の武器も持たないで凄いスピードで落下してくる。

「し、しかし、武器も持たず、さっきも落下の衝撃を加えてもデュアレモス力は

壊れなかったのですわよ！それに音速で動いているものを、と、捉えることなど、

できるはず、あ、ありませんわ！」

「それは、さっきまでの話を」

そう言って浅葱は右手を振りかぶる。

ドオオンッ！！！！！！！

凄まじい轟音が浅葱の落下とともに鳴り響く。

土煙が辺りに立ち込めた。

標的61 創無のリング争奪戦？〜正常な思考〜、来る！

「っ、デュアレモスカは・・・！」

土煙から現れたデュアレモスカは真っ二つになっていた。

「ど、どうやって！武器なんて持っていなかった、はず、で、です
のに。それに、

なぜ音速のデュアレモスカを、と、捉えれたの、ですわ」

「武器ならある」

土煙が完全に晴れると浅葱は無傷で立っていた。

そして自身の右手の爪を見せる。

5センチほどに鋭く尖った爪を。

「まさか、そ、それで、そんな、たかが爪でデュアレモス力を、き、斬ったと、

おっしやるの!?!」

「たかが爪じゃないさ 私はこの爪を斬れる物は同じ硬さ、鋭さの私の爪しか

知らないよ。それに上空からならデュアレモスカの位置はすぐわかる。

そこに空中に有幻覚で足場を作り、微調整しながら蹴って加速して降りてきた

瞬間に、落下分の力をこめて爪を振れば簡単だよ」

浅葱は簡単そうに言うが実際は簡単などではない。

もちろん普通の人間では数百メートルから落下、という点で死亡となるし、

運動能力的にも不可能である。

しかし浅葱は狐の力もあり、アルコバレーノの力もあるので、一応は可能と

いえる、理論上では、だが。

しかし実際は不可能である。

正常な思考では。

なぜなら、落下の途中で人間なら、いや、飛べない生物なら、飛べない状態の

生物なら何であれ少しは恐怖を感じるはずなのである。

しかし浅葱は全く恐怖を感じない。

つまり、浅葱は正常な思考ではない、という事となる。

まあ、それは否とはいえないのだろう。

だって、浅葱は恐怖という感情をもつ記憶でしか、ほとんど覚えていないし、

わからないのだから。

浅葱は記憶の中で、常に恐怖し、恐怖と狂気の中で生きてきた。

それで、恐怖に慣れ、恐怖という感情を欠落してしまったのだろう。

生物は恐怖という感情があるからこそ、生きていく。

全ての生き物の根底には死への恐怖があるのだろう。

しかし浅葱にはない。

だから正常な思考ではない、できない。

しかし浅葱は変わらない。

過去に縛られ続ける限り。

しかし浅葱が過去から開放されることはない。

烙印を押されたその時から、浅葱はもう過去から開放されることはないのだ。

未来への希望を幾ら見出そうとしても、浅葱にはいつまでも過去が纏わりつくのだ。

記憶となって、苦痛となって。

標的62 創無のリング争奪戦？浅葱対馬羅、来る！

「そ、そんなこと、簡単なはず、あ、ありませんわ！」

馬羅は浅葱が簡単と言ってデュアレモス力を壊したことに對して激昂する。

「簡単だから簡単なんだよ？私にとっては」

「……ば、化け物ですわ」

馬羅は忌々しい、忌避するような視線で浅葱を見る。

「全く、その視線は記憶の中とそっくりだね。ま、いーさ。化け物なのは自覚してるし」

「でも、わ、ワタクシは負けませんわ！」

と言うと馬羅は走って浅葱に近づく。

走る途中で馬羅は1メートルぐらいの機械の棒を出す。

甲高いノコギリのような音が鳴り響く。

「何それ？」

「こ、これは、棒の持ち手以外は全て、ぶ、分子レベルで振動している、のですわ」

「分子？あ、それってめっちゃ斬れるやつ？」

「そ、そうですね」

「ふーん。でもさあ、それって、当たらなきゃ、意味ないよね？」

と言った瞬間に浅葱は数メートル離れていた距離を一步で詰め、馬羅に回し蹴りを放つ。

ドガア！

しかし浅葱は蹴った瞬間に少し違和感を覚える。

まるで、鉄でも蹴っているような。

しかし、ま、いつかで浅葱は済ました。

そんな音が鳴って馬羅は直撃した左腕を庇いながら吹っ飛んでいく。

馬羅は立ち上がる。

「ワ、ワタクシは絶対、負けないんですわ。ワタクシのファミリー
の為に、」

「負けれないんですわ！絶対に、ボンゴレファミリーの守護者と
な、なっ、」

「ワタクシのファミリーを一躍有名、巨大にしてみせますわ！」

「それを馬羅は強い意志のこもった目をして言う。」

しかしその逆に浅葱は闇を目に宿して言う。

「へーえー。じゃ、君はボンゴレの為でもツナの為でもなく、自分の為に」

「戦ってたんだー」

「それが、な、何ですの？結果論でボンゴレの為になりますわ！ワタクシの」

ファミリーの情報操作、発明能力はそれほど凄いのですわよ!」

「もし、役に立つとしても、それは貴方じゃない。貴方の、佐川馬羅の

ファミリーが、でしょう?」

浅葱のその言葉に馬羅は表情を慌てさせたものにする。

「違いますわ!」

「違くない。佐川馬羅がワタクシのファミリーの情報操作、発明能力はそれほど」

「凄いですわよ、って言ったんだよ？」

それに馬羅はハツ、とした顔になる。

「ま、いや。もうこれ以上口で言い合っても無駄でしょ？決着早くつけようぜ」

「わ、わかりましたわ。もう、だ、出し惜しみはなし、にしますわ」

と馬羅は言い、懐から1つの銃を出し、先ほどまで持っていた棒を捨てる。

「銃？」

「い、これで終わりですわ」

と言って馬羅は銃を両手で構え、浅葱は爪があるので武器は使わず、

素手のまま構える。

(あれ？さっき左手蹴ったの直撃だったのに持ててる・・・？ま、いや。馬鹿羅だし)

そう思って、浅葱は気にしなかった。

しかし、後からこれを後悔することになるのだった。

標的63 創無のリング格闘戦？馬羅の絶対防衛、来る！

「んじゃ、今度こそ決着をつけようじゃないか」

と言って浅葱は走り出す。

「あ、甘いですわー！」

と言って馬羅が銃を撃つ。

ズガガンッ！

「甘いのはそっちだよ」

キキンッ！

と言って浅葱は撃たれた弾を全て爪ではじく。

それに馬羅は笑う。

「でございますから、甘いのはそちらですわ」

「！」

…
…
…

浅葱に弾き飛ばしたはずの銃弾が当たったのだ。

そして浅葱は膝をつく。

「それはホーミング弾。そして、そ、それはただの銃弾では、あ、ありません。」

アルコールノに有害と、さ、される物質を、ワタクシのファミリ
ーで発見、し、

して、それを含んでいます。こ、降参するなら、い、今のうちです
わよ」

それに浅葱はフツ、と唾づ。

「こんなので降参なんてするはずがないだろ？それにさ、この物質もまだ発見

したばかりだろ？まだ、純粹じゃない。だから、そこまで有害でもないよ」

と言って浅葱はふらふらながらも立ち上がる。

そして傷口を爪で刺し、一つずつ体内の銃弾を抜いていく。

そして銃弾が抜かれたところは次々と傷口が塞がっていく。

「！な、なんで、こんな、早く、き、傷が」

それに浅葱は答える。

「ま、ネタバレすると簡単なことだよ。私はアルコバレーノとなっ
たことで、

おしゃぶりと同化した。そして、私は他のどのアルコバレーノより

もおしゃぶり

との共鳴率が半端なく高いんだ。だから、超人的な身体能力と、回復能力がある。

ま、いつもは封じてるけども」

「ま、まさに、悪魔、で、ですね。それに、ど、同化……？」

「同化については黙秘。または聞かなかった、ってことで。それに何とでも

言えればいいさ。私は化け物だったことぐらいもっ自分覚してるからね」

そう言って浅葱は足に力を入れる。

そして馬羅も銃を構える。

ドンッ。

ズガガガガッ！

浅葱が全力で踏み切って、馬羅に近づく。

踏み切った地面は軽くクレーターができていた。

馬らは銃の最大連射数まで撃つ。

浅葱は銃が１メートル先に来ると思いい切りジャンプして馬羅のすぐ後ろに着地する。

「終わり」

と言って浅葱は馬羅の背後から爪を奮つ。

「む、無駄ですね。も、もう、あなたのデータは解析、し、しました」

「？」

浅葱は馬羅の言葉に疑問を感じつつも攻撃をやめない。

ガキイン！

「なんだ、これは」

浅葱は思わず言葉を漏らす。

それもそうだ。

だって馬羅の背中を爪で切り裂こうとし、攻撃を当てた瞬間に金属が

ぶつかり合うような音が鳴ったのだから。

「ふふふ。ワ、ワタクシは我がファミリーが開発した攻撃無効化鎧を、き、

着ていますの。これは元からあなたように作り、あとは一度攻撃を受ければ

次からは完璧に無効化できるもの、だ、だったのですわですから、もうあなたが、

か、勝つことは、できませんわ」

「何でかな？」

浅葱は聞く。

攻撃が無効化されることなど何でもない、とでもいっしょうじうに。

「だ、だって、攻撃が無効化、さ、されるのです、わ、わよ」

それを聞いた浅葱はクスリ、と嗤って、一度馬羅から距離をとる。

「攻撃が無効化？んなもん知らないよ。無効化されるなら、無効化できないほど」

強烈な一撃を叩き込めばいい」

「そ、そんなこと」

「さて、次こそ本当に決めるよ。早く帰ってチョコ食べたいしね」

そう言って浅葱は右手を握って、漆黒と藍色の混ぜた炎を灯す。

それを見たツナが反応する。

「んなー！あれって死ぬ気の炎ー！？」

「そうだよ。これは私がエストラーネオの人体実験で手に入れた力だけだね」

そしてどんどん炎の純度を上げていく。

純度が上がるとともに漆黒がより闇の色に、藍色が綺麗に透き通っていく。

「さあ、終わりだ」

浅葱は言いつつと同時に馬羅に駆け出す。

標的64 創無のリング争奪戦？！創無の決着、来る！

馬羅は浅葱の駆け出したスピードについていけずに立ち尽くす。

その間に浅葱は右手に力を圧縮させながら馬羅に近づく。

圧縮させた力に大気が震える。

そして、その強大な力をそのまま右手に纏い、浅葱は馬羅をぶん殴った。

ドゴアアアンッ！！！！

馬羅はこれ以上ないほどに吹っ飛ぶ。

そして浅葱殴った時にとっておいた馬羅のリングを、無と創にわけ、

無と創のリングを完成させる。

無のリングをチェルベッロに見せて浅葱は言う。

「チエルベツロ、これでいいのでしょっ。」

「はい。無のリングが無の守護者、六道浅葱の物となりましたので、

創無戦の勝者は六道浅葱となります」

その言葉に一部の者が沸き立つ。

「おめでとう……。浅葱様」

「やったれす！浅葱さん！」

「……おめでとう」

「しししっ やったな、姫」

「ありがとう」

そこで浅葱の頭に言葉が響く。

「おめでとうございます。浅葱」

骸である。

「ありがとう、ムク兄」

「ま、まだですわー!」

と言ってまだ砂煙の上がっていたところから馬羅がいきなり現れ、
浅葱から

創のリングを奪う。

「創と無の、リ、リングには、適正があると、き、聞いたことがあ
りますわ。」

適正の無い者はリングをはめることがで、できないと」「

「あり？しぶといね。つかもう決着ついてるけど？」

「しかし、はめることが、で、できなければ、守護者には、な、な
れませんか！」

「まーね。でもさ、貴方がつけられる確証もないですよ？」

「そ、それはあなたも同じ、で、ですわ」

「私は大丈夫なんだよ。第一、私は無のアルコバレーノだからね。
無のボンゴレリングに

異常に共鳴することはあっても、拒まれることはありえない」

そう言って浅葱は無のリングをはめる。

しかし何も起きない。

「ほら、私は無には拒まれない。無のリングに拒まれた場合は精神が壊れる。」

あ、でも無のリングの場合は拒まれる、ってより堪えられない、かな。無の

リングをつけると、つけた人は何をしても満たされない凄まじい虚無感が

付き纏う。それに堪えられなかったら、精神が崩壊する。創のリングに

拒まれた場合は創造の反対で、体の一部が消失する。拒絶率が多いほど、

消失する部位は多くなる。そして、それぞれの拒まれない条件は「ワ、ワタクシは、

絶対守護者に、な、なりますの！」「

馬羅は浅葱のセリフを遮って言う。

そして創のリングを馬羅はつける。

「！ほ、ほら！ワタクシ、だ、だって、だいじょ、キヤアアアアア
――！」

馬羅は突然悲鳴を上げる。

そりゃそうだ。

何てったって、馬羅のリングをしていた右手と右足が根元から、それ

左足の膝から下がいきなりどす黒く染まり、もやの用にフツ、と消えたのだ。

「途中でセリフ遮るからそうなるんだよ。」

無のリングに拒まれない条件は『魂が漆黒の闇であり、無であること』、

創のリングは『魂に溢れきれない暖かさを持つ者』。

自分の利益しか考えない人間が暖かさなんて持つ訳ないじゃん」

そう言って浅葱は右手右足、左足の半分を失って倒れ、血を流し続け、気絶している馬羅は

無視して創のリングを拾い、戦いが終わって赤外線という壁が消えたクロームの

方に投げる。

「クローム、創のリングしてみてくださいよ。クロームなら絶対大丈夫だよ
私が保証する」

そう浅葱は言う。

「浅葱様……。わかりました」

と言ってクロームは創のリングをはめる。

しかし何も起きない。

「ほらに クロームはやっぱり創の守護者にぴったりだね ま、霧にもぴったり」

「だけでも、クロームは私にしたら眩しすぎるくらいに優しく暖かいからね」

「浅葱様・・・／＼。ありがとう」

「んーん。ま、そっちが勝っちゃったりした場合とかは創のリングはクロームの

物でいいんじゃない？創の守護者（仮だった人）はもう足手まといで何も

役立たないし、何より創のリングに拒否られてんだし」

そこでチエルベツロが口をはさむ。

「ひとまず創のリングはこちらで預かせてもらいます。ただし、佐川馬羅の

創の守護者としての刺客はリングに拒まれた時点で剥奪させてもらいました。

そして明晩の対戦は、雲の守護者の対決です」

と言ってチエルベツロは消えた。

「さて、私は久しぶりにV A R I Aの皆とどのようなベルにボス達、

ちやっちやと帰ろうぜ ムツツリは来なくていいけど」

「なぬ！」

「なぬじゃねーよタ」

等といいながら浅葱を含んだVARIIAはホテルへと帰っていくのだった。

こうして、創無のリング戦は浅葱の勝ち、それに馬羅はツナ達が勝ったとしても

創の守護者にはなる資格がなくなる、という結末で終わったのだっ
た。

標的65 雲のリング争奪戦？〜雲戦開始〜、来る！

浅葱は午後7時ぐらいに起きた。

「ふあーあ。んー、もう夜じゃないか……。とりあえず着替えよう」

と、ホテルの一室で呟くと浅葱は着替え始める。

今日は藍色に薄水色で霧柄の模様がついている着流しである。

その上から、風紀の腕章がついたVARIACOOTを羽織る。

「今日で戦いが終わり、か・こつちが勝ったらこつちの勝ちで、ツナ側が

勝ったら引き分けじゃん・・・」

といいながら浅葱は部屋をでる。

そしてロビーに着く。

「ベルー、黒曜センター行ってくるに。んで、今日も多分クローム達と観戦するから」

ロビーに入るとほぼ同時に中にいたベルに言う。

「ん、オツケー」

「んじゃあに、ベル」

「しっつ、じゃーな」

と言葉を交わすと浅葱は黒曜センターへと行く為、外へでる。

黒曜センター。

「うーす 起きてるー？」

浅葱はいつもクローム達がいる部屋に入って言う。

「こんな時間に起きてない人っていますかびよん？もう夜の7時だ
びよん」

ブチッ。

「くふふふ 起きてなかったら悪いのかな？私はほんの数十分前に起きたけど？」

「！ すんませんびよ！ってキャギョーン！」

浅葱は犬にそこらへんに落ちていた大石を投げた。

「けっ、当然の報いだぜ」

「浅葱様……今日は、どうしたの？」

「ああ、クローム。今日はさ、雲戦一緒に行こうと思ってね」

「ヴァリアーの人達と一緒に、じゃなくてもいいの……？」

「……の……の、んじゃ、時間までご飯食べたりして、暇つぶしして、から、行くーぜ」

「はい・・・」

それから3時間ほど浅葱やクロームは雑談したり、食事をとったりと、

時間を潰してから、並盛中へと行くのだった。

並
中。
。

全員が揃ったところで、チエルベツロがルール説明を始めた。

要は地雷とガトリングに気をつけて戦え、ということである。

そして雲戦が始まる。

「それでは始めます。雲のリング、ゴーラモスカV^{バーサス}S雲雀恭弥、バトル開始！」

標的66 雲のリング争奪戦？〜ゴリラモスカの秘密〜、来る！

結論から言おう。

雲戦は圧倒的に雲雀が勝利した。

本当に10秒とたたずに終わったのではないが、というぐらい圧倒的だった。

これでリング争奪戦はひきわけとなったのだ。

しかしそんなもので雲雀が止まるはずは無く。

やはりというか何というか雲雀はXANXUSを挑発して、戦いを挑んだ。

けれどもそれはXANXUSの策略であり……。

「つーか恭弥ももう少し頭使えばいいのに。罠だっけ気づけるかもなのに」

浅葱は呟く。

あたりは雲雀がゴーラモスカの暴走で戦場と化している。

「浅葱様……？早く逃げないと……」

「んー？大丈夫だよ。クローム達も守ったげるから動かないでね」

「でも浅葱さん！」

犬は焦る。

そりゃあそつである。

何てっ たって上からミサイルが降ってきているのだ。

「だーから 大丈夫だっていってるじゃないか」

という浅葱は指パッチンを一度鳴らす。

すると浅葱の体から漆黒と藍の混ざった炎が飛び出し、ミサイルを
全て空中で

飲み込み、燃やし尽くす。

「くふふふ 私はミサイルなんかじゃ殺せないのさ」

「浅葱様……。ありがとう」

「全然、構わないさ にしてもあっちでは何かごたごたやってるね
」

と言って浅葱はある方向を指差す。

浅葱が指差した方向にはいつの間にかツナがあり、モスカと戦っていた。

「ボス・・・！？」

「どうやら飛んで来たみたいだね。今も飛んでるし」

「飛ぶ・・・。ボスつて、凄いんだ」

「私だつてやるうと思えばできるよ。半端なく疲れるけど」

「浅葱さんも凄いびよん・・・」

「ん？やつと九代目出てきたね。大怪我付きで。」

「浅葱様、知ってたの・・・？」

「まーね。つか私は結構重要な幹部の位置に居るんだぜだぜ？」

「へー・・・」

「だからわかるけどもさ。ツナはこれ以上ないほどにボスの策略に引っかけてるね」

「そんなこと、私に言っちゃってよかったの……？」

「ま、普通はダメだけど、まあクロームや犬ならいいかな、っと」

「……浅葱様。そんなんでよく幹部でいられますね……」

「うおづー！いつからそんな毒舌になったんだ、柿ピー」

「……柿ピーじゃない」

その声は誰にも相手されること無くスルーされるのだった。

「ん？何かごちゃごちゃまたやってるね。行ってみる？」

その言葉にクロームはこくり、と頷く。

「じゃ、行く」

そう言つと浅葱、クローム、犬、千種は走っていく。

「ボンゴレの歴史に刻んでやる。XANXUSにたてついた、愚かなチビが1人いたとな」

「1人じゃないぜ！10代目の意思是」

獄寺がボムを構えて言う。

「オレ達の意味だ！」

山本が刀を構えて言う。

笹川了平やクロームも構える。

「個人的に」

雲雀も構える。

「来るか、ガキ共！」

「しっつ、いいねえ」

レヴィとベルも構える。

「くふふ　ゴメンネクローム。今回はかりはクロームの敵だね」

浅葱も短刀二本を出して構える。

ちなみに言うておくがおしやぶりはもう昨日の創無戦が終わった時に

鎖を巻いて封印している。

しかしそこでチェルベツロが口をはさむ。

「お待ちください。九代目の弔い戦は、我々が仕切ります。リングの移動は、

我々の認証なくしては、認められません」

そこであちらこちらから反論が聞こえるが全てをほぼスルーされる。

「我々は、勝利者が次期ボンゴレボスとなるこの戦いを大空のリング戦と

位置づけます。すなわち、今まで行ってきた七つのリングの最終戦です」

「それでは明晩、並中に皆さん、お集まりください」

「あーらら、モドキに執行猶予与えちゃったよ」

「何い！」

「てめえ…！」

「ツナは修行で、体力を使い果たしてたんだ。グッドニュースだぞ」

「ふん。明日が喜劇の最終章だ。せいぜい足掻け」

とXANXUSが言うと大空のハーフボンゴレリングをツナに投げる。

そしてXANXUSは炎を強くし、周りが見えなくする。

標的67 雲のリング争奪戦？！地雷大爆発、来る！

光が消えた時にはもうXANXUS等VARRIA、それにチエルベツ口は消えていた。

「き、消えた・・・！？あの女達もだ・・・！」

「あ、きゅ、九代目！しっかりしてください！」

と言ってバジルが駆け寄る。

「遅かったか」

そこにキャバッローネファミリーの面々と、ディーノが現れる。

「跳ね馬！」

獄寺が声を上げる。

そしてその頃浅葱といえば。

「クローム、クローム」

「！ 浅葱様、ヴァリアーの人達と一緒に帰ってなかったの？」

「ん、まーね あ的地雷郡を爆発させたいなー、と」

「何でですか!？」

「んー、だって、楽しそうだから。つー訳で、ちょっとさがつとい
てに」

と言うと浅葱はディーノの方へ歩いていく。

「ディーノー」

「！浅葱！？何でヴァリアーのお前がここにいんだよー！」

「ダメ？じゃなくて、地雷周辺の人達非難させてよ」

「何するつもりだ？」

デイーノは若干引き気味で言う。

「くふふ 全部一気に爆発させるのさ 楽しそうたる？」

「ハア、ったく。浅葱の性格がなんとなくわかってきたよ」

デイーノがため息を吐きながら言う。

「んじやいーの？それに地雷回収の手間も省けるよ」

「じゃーねーな。おいー！テメエ等、一回そこどけー！」

と、ディーノが言うとキャバッローネファミリーが撤退する。

「んじやいきまーす 3、2、1」

そして浅葱は指パッチンする。

すると浅葱の体から漆黒と藍の炎が飛び出し、一つの球体になる。

「はい、どーん」

と浅葱が言つとその炎の球体が地雷郡に高速で向かっていき、派手に当たった。

1476

ドガガガアアアンツツツツ!!!!

それはもう凄まじい轟音が鳴って、爆発した。

大体の者は呆気に取られていた。

その中で浅葱だけハイテンションである。

「くふふふふ うれしいね」

しかしそこに1人近づく。

大きくトンファーを振りかぶって。

バコオッ！

浅葱にトンファーが直撃する。

「いって！何するんだ恭弥！」

「それはこっちのセリフだよ。君仮にも風紀委員だよな？」

「？ そっただけど？」

「ならなんで並中破壊してるの」

「ハッ！ ゴメンちゃい？みたいな？」

雲雀は無言でトシフアーを構えて浅葱に殴りかかる。

「咬み殺す」

「うええ！ま、いや。折角だし戦ってやんよ」

と、浅葱と雲雀は戦い始めるのだった。

「浅葱とヒバリ……。一応敵同士っスよね」

獄寺の独り言が響くのだった。

その後はもうそろそろ日が昇る、という時間まで戦い続け、そのまま浅葱は

風紀委員の書類仕事をさせられるのだった。

標的68 大空のリング争奪戦? 大空戦開始、来る!

大空戦当日午後10時50分。

浅葱は精神世界に居た。

「うー、あー・・・」

浅葱は大の字で寝転がっていた。

その近くに骸が座る。

「全く、どうしたのですか？もうそろそろ大空戦ですよ？行かなくていいのですか？」

「うー……。恭弥のせいだ」

「雲雀恭弥？ああ、書類仕事をやらされたのですか」

「やっとわかったか……。書類仕事どれだけ溜めてるんだよ。しかも書類やる前に」

戦ってたから余計疲れるし……。大空戦でもし戦いあったらどうするんだよ」

「じゃあ僕の槍を使えばいいでしょう？昔した契約、互いに生命力を

分け与えられるもの、その契約の証の槍は持っているでしょう」

「ああ、なるほど。それなら戦いあったとしてもオツケーだね　ありがと、ムク兄」

浅葱は起き上がって、笑って言う。

それに骸も笑いを返す。

「ところでさ、その生命力分ける契約名前つけようよ。凄いいいづら」

「そうですね……。どんなのがいいでしょうか」

浅葱と骸は暫しの間沈黙する。

「「せいめいどうかのけいやく生命同化の契約！」

「ん。決まりだね」

「ええ。というかもっそろそろ現実に戻らなくていいのですか？」

「あ、やばいかも。大空戦始まってしまっ。つー訳で、またに」

「それでは、また」

と言葉を交わすと浅葱の姿は霧のように消えた。

その後に骸も霧のように消えた。

浅葱はぱちり、と眼を覚ます。

「恭弥？」

浅葱は雲雀におんぶをされて、いつの間にか大空戦の関係者が集まっている所に居た。

「やっと起きたの」

と言った声が聞こえると浅葱はどわっ、と落とされる。

「いで！ま、いつか。恭弥が運んでくれたんでしょ？おんきゅー」

浅葱はついた土をはらう。

ちなみに浅葱の格好は昨日から書類仕事をしたり、と寝てる時間なんて

数十分だったので、昨日の服装のまま、着流しである。

そしてチェルベツロの声が響く。

どうやらルール説明をするらしい。

浅葱は一応自分も参加するっぽいのでちゃんと聞いた。

そして、大空戦が始まる。

浅葱は馬羅とともにグラウンドの端らへんに居た。

毒により、行動不能で。

まあもとより馬等は行動不能で、布団にくくりつけられているが。

標的69 大空のリング争奪戦？！デスヒーターター解毒く、来る！

「さて、ここからどうしようか・・・」

浅葱は1人呟く。

まあ正確には1人ではないのだが。

だが馬羅は浅葱が存在ごと無視しているので無視する方向で。

それに馬等は意識を失っているのだ。

「とりあえず、解毒して他の皆とかクロームとか助けなきゃだね。クロームは

敵側だろ、とかいうツツコミは無し、ってことで。てか私は一体誰に向けて

しゃべっているんだ？ああ、独り言か。そうだった。私はムク兄と別れてから

独り言が多くなったんだっただけ……。独り言が多い人って何か寂しい人に

見えるよね……。って、また独り言……」

浅葱は少し落ち込む。

しかしすぐに復活する。

「ま、いつか とりあえず、このですひーたーとかいう毒はそこま
で効かないな。」

まあそりゃそうか。化け物だし」

と言いながら浅葱はポールの足を短刀を使い斬る。

ズドオオオオン。

そして落ちてきた創のリングは無視して、無のリングを拾い、解毒する。

「んじゃ、まずはクロームの所に行こうかな。まあ、創のリングは無視しよう。

だって、仮だとしても今は馬鹿羅のリング、ってことになってるし。

とりあえず

クロームに所有権渡させてからじゃないと何か触んのも冷静に考えたら嫌だな・・・」

と呟いてから浅葱は馬羅と創のリングを放置して体育館の方へと歩いていく。

ギイイイイ。

浅葱は体育館のドアを開けて、入る。

すると天井に大きな穴が開いていた。

「あり？何があったの？あ、もしかしてボスの銃弾当たったとか」

自己完結すると今度は正面を見る。

そこには毒によって苦しむマーモンとクロームが居た。

「おおっ、ちゃっちゃと助けちゃおう」

と言って、一飛びでポールの上の霧のリングを取る。

ちなみに先ほど跳んだらすぐ取れるのに斬ったのか、その理由は至

って簡単。

気分である。

そして浅葱は手早くクロームの解毒をし、次にマーモンの解毒をする。

1500

「マーモンマーモン」

「ん、なん、だい？あと、解毒、礼を、言う、よ」

まだ毒が抜けきっていないのか切れ切れに話す。

「多分最後に獄寺とかがたくさんリング持ってここ来ると思っから
な。」

罿仕掛けようぜ。ちなみにクロームには少しの間おとなしくしてて

もらっからに。反論は認めません!」

「浅葱様……。解毒、ありがと……。反論しても、無駄だ、っ

てのは、わかってるよ」

それを聞くと浅葱はニツ、と悪戯をしかける前の子供のように笑った。

標的70 大空のリング争奪戦？！守護者の戦い、来る！

ガラガラッ！

勢いをつけて体育館の扉が開かれる。

「ポールが！どうなってやがる！」

「髑髏はどこいきやがった!？」

入ってきた獄寺と山本が叫ぶ。

コンコン。

「こつちこつち」

ベルがクロームの三叉槍で地面を叩きながら言う。

「こつち」

「待ってたよ」

「くふふ」

そこには縄で手を縛られ、上から吊るされ、ベルが三叉槍で、浅葱が三叉鎌を

クロームの首に突きつけている光景があった。

「なっ、何で浅葱まで！」

「馬鹿ですかー？私はVARIIAの一員さ。その上では親友何てくだらない物だよ」

「さ、お前達の持つリングを渡してもらおうか。さもないと、ししっ」

それから少々の時間が経過する。

「じじじっ ぶじすんのぢ」

「しょうがねえ。リングを渡すしかないみてえだな」

「な、何言ってるんだよ！」

「オレが持つてるリングが雨、雲、それに創。獄寺が嵐と晴と雷。つまりお前たちの

持つてる無、霧のリングと合わせれば、守護者のリングが全て揃う」

「ムム」

「ラッキー、集める手間が省けたじゃん」

「お、おいこの野球馬鹿！わざわざそんなことを教えるなんて、何考えてる」ただし！」「！」「！」

「山本は獄寺の言葉を遮って言う。

「いっぺんにはやらねえぜ。まずその子の解毒と、この雨、雲、創のリングとの

交換だ」

「なっ」

「それができたら信用して、残りのリングとその子の交換に応じる」

「へー、武って結構頭使えるんだね　ま、いいよ。ベルもマーモンもいいよね？」

浅葱は無無を言わさぬように言う。

「しっつ、姫が言うならいいぜ」

「わかったよ」

「んじゃ、武がまずリングを転がしてよ。刀のリーチには入らないからね。」

それに私も一緒にクロームを解毒するからさ」

「わかった」

そう言って武は2つのリングを転がす。

しかしそこで落ちていた足に躓く。

「何やってんの?」

(時雨蒼燕流、攻式三の型 遣らずの雨)

山本は足で刀の柄を蹴って、ベルに向かって飛ばす。

「いだあ！」

ベルが吹っ飛ぶ。

「足で、刀を！」

「！」

マーモンも山本に右手で刀を突きつけられ、浅葱はベルが持っている

た三叉槍を

左手で持った山本に首に突きつけられている。

「動くな」

「形勢逆転だな」

「やるじゃねえか山本！」

「やはり只者じゃない連中だよ。警戒しておいてよかったよ」

と、マーモンが言うとマーモン、ベル、浅葱にクロームの姿が消える。

「武達はこの体育館に入った時から私の有幻覚と、マーモンの幻覚に騙されていたんだよ」

「ししっ 形勢再逆転」

あたりにはマーモンの幻覚だが、大量の分身が居る。

それぞれが笑って、不気味な様子となっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354w/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 無の守護者、来る!

2011年11月20日19時48分発行